

ダヴィード異伝

二味つゆり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ファイアーエムブレム風花雪月より、デイミトリ×マリアンヌの子どもたちが異界を超えて共闘する話。

主人公は、紅花ルートのデイミマリの子です。

(ぶらいべったーに投稿していましたが、ある程度目処が立ったので投稿開始します)

デイミマリが前提というオリキャラ主体なので、カプ要素はあまりありません。

魔法や紋章に関しては、自己解釈含めたオリジナル設定です。

風花主人公も登場しますが、原作に倣って「」がありません。

pixivで連載していた「嵐を孕む」シリーズの外伝的作品です。

(pixiv.net/novel/series/1370009)

※「嵐を孕む」はR18での投稿ですので、年齢制限に達していない方の閲覧はできません。

※シリーズとこの話はそこまで関係ないので、シリーズ未読でも問題なく読めるかと。

目次

ダヴィードたちのお茶会

1 | 1 紅蒼の再会 | 1

1 | 2 ダヴィードたちのお茶会

18

1 | 3 「せんせい」 | 38

血の功罪

2 | 1 紋章が謎 | 50

2 | 2 迷いを断つ刃は | 82

秋嵐立ち込めて、夢現。

3 | 1 デアドラの街にて | 92

3 | 2 嵐を孕む外伝
↳ 蒼月2 & a

m p ; 紅花0・5
| 107

3 | 3 秋嵐立ち込めて。 | 128

嵐の対峙

4 | 1 嵐を斃す① | 139

4 | 2 嵐を斃す② | 151

4 | 3 嵐を纏う | 161

4 | 4 嵐を払う | 171

4 | 5 嵐を拒む | 179

4 | 6 嵐を救う① | 188

4 | 7 嵐を救う② | 211

ダヴィードたちのお茶会

1-1 紅蒼の再会

地下深くに作られたと思われる巨大な遺跡機構。恒久の時が流れたことを示すように、全体的に苔むして緑色を帯びていた。各所には青い光を放つ魔石があり、光源が確保されている。光が照らすは、石櫃。急傾斜で長く続く階段の先には、それらを見下ろすような玉座が置かれている。人ではない何かが作ったとすら思える広大で静謐な空間。——聖墓。ゆらゆらと揺れる兵士のようなもの、幻影兵。聖墓を守護するために魔力によって生み出されたものだろう。

聖墓の玉座の対極に位置する祭壇の前では、生身の3人の若者が幻影兵に囲まれていた。

「ふむ。聖廟に共通する様式を持っている。が、聖廟よりも荘厳で古代的、宗教的な要素はむしろ減っている。だが護衛がいることから重要拠点と思われる……遺跡だろうか、ここは」

揺らめく影の中に確かに存在する敵意のぎらつきをさらりと受け流し、金髪碧眼の青年はゆうると周囲を観察する。

「兄上？　今、オレたちは思いっきり敵意を向けてくる相手と対峙しているんだが？」

それを諫めるように声をかける青年は、兄と呼ぶ彼よりも頭半分背丈があり、背丈と比例した大きな身体つきを、士官学校の制服で包み込んでいる。その手には剣を構え、背には別の剣と槍が備えられている。透き通るような淡い水色の髪は後頭部でまとめ、それでも余る部分を背中流している。戦闘態勢を見せる身体に対し、瞳はその小豆色を揺らして困惑を見せている。

「すごく広くて大きいわね。建物の中なのに、ペガサスでもドラゴンでも思いっきり飛べそうよ」

今までのやりとりを聞いているのかいないのか、巨大な空間に素直で純粹な感想を述べる少女が2人の間に入り込む。突き抜けるような空色を髪と瞳に宿し、長い髪は右側頭部でひとつ結びに高くまとめ上げてその空色を魅せる。

「我が妹よ？　お兄ちゃんキミたちの楽観的どころ羨ましいよ？」

兄に次いで妹すらも戦闘態勢に入らないという状態、その冷静さ、もとい警戒心の無さを嘆きつつ、それでも剣を構えるのはやめられない。涙が出そうになる。兄は柔らかく笑って弟の肩に手を置く。

「二カ。それもこれもここに着いた時にお前がああ青い石に触れなければ彼らも起動しなかったのではないかと、魔道に疎い私でもわかるのだがね」

青い光を放つ魔石を指差し、笑顔で弟に事実確認を行う。

「ハイ。巻き込んでゴメンナサイ、兄上」

弟が頷くのを見て、兄は彼の背中に差し込んでいる槍を引き抜いて構えた。

「見て、ダーヴァ兄様！ 向こうに玉座があるわ。その近くにいるであろう指揮官を倒して、玉座を制圧しましょ」

「なるほど。そうするよ」

妹の鋭い意見を聞き受け、弟に目で合図を送る。弟は崩れた瓦礫を飛び越えて幻影兵に向かって刃を立てた。戦闘の開始である。

「リーザ。すまないが、お前はここで私たちの宝物を守っていておくれ」

弟の後を追う直前、兄は妹にそう命ずる。

「そんな！ あたしだって戦えるわ、兄様！」

兄たちが戦っているというのに何もできない自分がかしい。自分もレイピアを携えているから戦える。そんな気持ちを素直に伝えたが、厳しく首を横に振られてしまった。

「違う。守って欲しいんだ、それを」

兄は優しく指差し笑って、攻撃を仕掛けて来た兵に向かって駆け出した。

妹は指差されたそれ、自分が両手で握っている武器を見つめ、再び力を込めた。革袋

が鞘代わりになっていっているほど巨大な刃と見た目以上の力を持つ、国の、大陸の、歴史の、家族の宝物である、その槍を。

こうして、ファীগス神聖王国の王子王女らのそれぞれの戦いが始まった。

兄は臂力を活かして魔導士や弓兵をほぼ一撃で屠り、弟は物理攻撃をしてくる敵を剣技と黒魔法を駆使して撃破していく。本来ならば、力がある分魔法防御に不安のある兄と、魔法防御が高く攻撃射程も長い弟とでは、相手にする敵は逆であるのが定石だ。敵を少しずつ引き寄せ各個撃破する定石な戦法を実施するには、一度攻撃を受ける必要があるからだ。しかし、2人はあえて敵陣に切り込み、短期決戦を挑んだ。それは、一体たりとも妹のもとへと向かわせたくなかったからだ。宝とは、彼女の持つ槍だけではない。兄弟からすれば妹も宝そのものだ。普段から稽古をしているとはいえ、彼女に実戦経験などない。士官学校へ行くにもあと2年欲しいくらいなの少女なのだ。なればこそ、2人の兄は危険を冒してでも自らを囮とし、同時に敵をねじ伏せることにしたのだ。

「どいてもらおうか！」

敵がまとまって動き始めたところに、戦技・旋風槍で周辺空間を抉る弧を描いて猛攻を続けるは、兄であり、ファীগス神聖王国の第一王子・ダヴィードⅡミロスラヴⅡブレード。常に物腰柔らかく穏やかに微笑み続ける彼は、戦場においてもおおよそその姿勢を崩すことはない。だが、柔和な雰囲気とは裏腹に、振るった武器の威力は凄惨た

る結果を残すこともある。身に宿す紋章はブレード家のそれとは異なるが、異なるからこそ武器による攻撃は威力を増していくのである。その紋章は単純な所作にこそ力を与える、攻撃的であり強力な紋章だからだ。

「もらった!」

敵の攻撃を剣の鎬で受け流しつつ、少し距離のある敵の虚を突いて黒魔法サンダーを放つは、ファীগス神聖王国の第二王子・ニカノールⅡレフⅡブレード。親類縁者の中では珍しく奇策や魔道に造詣が深く、戦いにおいては縦横無尽・臨機応変に活躍する。身に宿すは兄と異なり家名の小紋章だが、彼はブレード家の家宝でもある英雄の遺産「アラドヴァル」を継承するつもりはない。彼は、槍術よりも剣や斧、黒白問わない魔法への適性が強く、相対的に槍の扱いが苦手なのである。また、彼よりも「アラドヴァル」に適性のある者がいるのも理由の一つである。

更に適性のある者とは、兄たちの奮戦を見つめる少女、ファীগス神聖王国の第一王女・エリザヴェータⅡオレーシャⅡブレードである。彼女は実戦経験や心身の成熟はさておき槍術が得意であり、何よりもブレードの大紋章を持っているため、アラドヴァルの力を誰よりも引き出すことができる。故に、戦線を退いた父からアラドヴァルを継承し、いざという時に備えて訓練を重ねていく予定であった。

そう、彼女はアラドヴァルを継承したばかり。それもたった先程のことである。

ことの流れはこう。父王がセイロス聖教会の大司教猥下と会合を開くために大修道院へとやって来た。そして、大修道院に併設されている士官学校在籍中の次男の顔を覗こうと、ならば、敬虔深い信徒である妻はもちろん、母校の様子を気にする長男や今後入学するであろう長女も連れて行こう、少しの間だけでも家族で過ごそうと王家の者を引き連れて来たのだ。

そして、士官学校の一学級の級長を、飄々としながらも立派に務める次男の様子を見て、アラドヴアルの継承を行なうてしまおうと提案したのだ。次男は槍の扱いが相対的とは言え得意ではないが、魔道や未知な力への耐性が強い。長女はその逆だ。修道院に滞在しているうちに、次男と長女で英雄の遺産の使い方を学ぶと良いと言つて槍を渡し、共に政を治める妻と一緒に大司教との会合へと去つてしまった。

母である王妃から英雄の遺産「ブルトガング」を継承し日頃から携えている長兄から、紋章の力の引き出し方、遺産への力の伝達の仕方、紋章石との共鳴の仕方などを教わり、いざやってみる前に食堂で食事にしようとしてと修道院中庭を抜けようとしている時だった。「みつけたぞ」

3人とも、心に問いかけてくるような少女の声を聞いた。その瞬間、見たこともない巨大空間へと移動していたのである。そして、先に至る。

それにしても、突然のことに驚きつつも、敵意を向けて暴力を使ってくる相手にひる

むことなく立ち向かう兄たちは、本物の戦士だと、王女は感心と尊敬と、僅かな劣等感を抱く。不思議と、戦場に立っているという恐怖はなかった。

祭壇周りの敵をあらかじめ片付けたところで、長兄は深追いは止め、妹へと振り返る。「リーザ、おいで。ここからは一緒に進もう」

兄の微笑みを受け、妹はとびっきりの笑顔を見せ、戦場となっていた棺中心の区画へと瓦礫の山を飛び越えて走った。

「兄上、さらつと遠回しにオレが先陣切る指示出さなくてくれよ……」

妹を待つ間、装備品の損傷を調べたり、己や兄の傷を癒しながらため息を吐く。弟からの苦言に、兄は穏やかな笑み湛えたまま答える。

「大丈夫。ニカが適任なのだから、やれるさ」

「まあ、遠距離魔法が飛んで来たら兄上はひとたまりもないもんな」

「事実なだけに耳が痛い。すまないが、頼むよ」

苦笑しつつもはつきりと指示を出す兄に対し、頼られて満更でもない様子でうなずいてみせた。

やがて妹も近づいて来た。アラドヴァルを抱え、兄たちとの合流に喜びの表情を浮かべながら走って来る。ここで、次兄は何らかの魔道を検知し、訝しむ。焦った様子で辺

りを見回し始める。

「どうした、ニーー」

「リーザ！ 退がれ！」

「え……？」

次兄からの突然の指示に驚き2、3歩後退する。言うが早いか、兄たちと末妹の間に巨大な壁が現れた。ニーーのように見えた。ズシン、と地響きと共に現れたのは、セイロス聖教会の持つ技術のひとつ、ゴーレム兵だった。

「えっと……あれ？」

その巨大さ、内包する魔力の大きさ、威圧感にうまく判断が出来ない。兄の機転が無ければ押し潰されていたかもしれない。そんな想像をさせるほどの強大な敵を前にして、妹は立ち尽くす。

ゴーレムは魔力で作られた光る槍を振りかざし、足元の少女に撃ち込もうとする。

「リーザ！」

回り込むにも時間も速さも無い。相手を止め切るだけの力も、注意を逸らす知恵も無い。身体は既に動いているが、間に合うかどうか。兄妹たちは恐怖に縛られていた。

「いや……うそ……」

突然の恐怖に、少女はその場に立ち尽くし、槍の先を抱えてただ震える。

つと、ゴーレムと少女の間に、ひとつの影が現れた。

「そのデカい図体でー」

影はゴーレムに装甲を蹴り込むことで足場を作り、空中で敵と対峙する。

「躲せるか？ー 『エンジェル』！」

白魔法の魔法陣から、中級攻撃魔法エンジェルが放たれる。魔力を動力としていたり魔力を多く内包していたりする魔物に特に効くエンジェルの光が、ゴーレムを内部から灼く。浄化され溢れ出た魔力は、まさに天使の羽根のように形を変えて辺りに散らばる。

「グオオ、オ、オ……」

虚を突かれ、身を守る装甲も剥がされたゴーレム兵は、槍を消滅させ混乱状態に陥った。これで、ほんのしばらくであれば動きが止まる。

そして、その「ほんのしばらく」があれば、妹を救わんとする兄たちの追撃には十分であった。

「兄上、リーザ、ごめんな。こんな時なのに高揚してやがる……この血が、戦えと！」

目の前の敵を打ち砕かんとする攻撃的な目は、陶酔し悦びに震えているようにも見えた。高く跳び、ゴーレムの腕の付け根を狙って繰り出された戦技・両断は、ブレードダツドの小紋章の力を帯びて通常以上の威力をもたらした。ゴーレムの腕が本体から切断

され、轟音と共に石畳に転がり落ちた。

それに続くように、兄は弟の肩を借りて跳躍し、ゴーレムの胸を目がけて槍を構える。魔道には疎い。だが、胸にある大きな力の核を潰せば、此奴は倒せるーそう直感した。「ああ、やはり私はー守らねばならない……この血に懸けて！」

戦技・魔物貫きによつてゴーレムの作動機関は打ち砕かれ、ゴーレム兵はその動きを停止させたーように見えた。

「まだ動くか、こいつ……！」

ゴーレムは僅かに残った魔力で暴れようとしていた。しかし、三者ともに攻撃後すぐに追撃に転じることができない。それでも、とそれぞれが対処に動こうとした時だった。

先程まで立ち尽くしていた少女が腰からレイピアを引き抜き、ゴーレムの切られた腕とへこんだ装甲を蹴つて核へと跳躍した。

「あたしも……！」

兄たちの奮戦に発破をかけられ、硬直していた身体が解き放たれた。味方が紡いだ好機を逃すまいと身体が跳ねた。恐怖よりも、皆に追いつきたい、相手を倒したい、その気持ちだけで跳んだ。

「逃げたりしない！」

「刺突剣レイピアが重装兵や騎馬兵に有効な一撃を与えることができないのは、剣がしなって鎧の合間や馬具の結合部に入り込んで弱点を的確に突くからだ。このゴーレムもそうだ。壊れかけの装甲からちらりと見える魔力の残滓を、レイピアをねじ込んで破壊するだけだ！」

「勇気と気力を振り絞って戦技・魔物斬りを振るう細腕に、ブレードダッドの大紋章が力を与える。落雷のように穿たれた攻撃によって、レイピアはひしゃげ、ゴーレムの核は砕け散った。」

「と、止まった……？」

「今度こそ終わった、と安堵しへたり込む少女。その前には、項垂れるようにして動きを止めるゴーレム兵と、仄青い空の色を帯びた白髪（はくはつ）の人物が立っていた。」

「怖かったろうに、よく投げ出さず、重要な紋章石を守る判断をして、さらにゴーレムに立ち向かうとは。すごい子だな」

「見上げると、目が合った。自分と同じ美しい蒼の色をしていた。青年とも少年とも判断付かぬその人は、やさしく手を差し伸べていた。」

「あたしは……そんな……、ただ怖かっただけ……」

「差し出された手を取り、少女はゆっくり立ち上がる。死すら感じた恐怖、そして恐怖を前に何もできなかった自分への嫌悪で胸がいっぱいである。自分が持つ力は、味方の

窮地にようやく立てただけのちっぽけな力だ。今も、涙が溢れて来るのを抑えるので精一杯だ。

「何にしても、良くぞ国の至宝を守り、敵を倒してくれた。ありがとう」

長めの前髪を額周りで三つ編みにして後ろに流しているおかげか、表情がよく見える。やんちゃな雰囲気はあるものの、国を背負うことを知っているような口ぶりだった。僅かに首を傾げて薄っすらと浮かべられた笑みと差し伸べられた手から伝わる体温は、不思議なことに、父に褒められた時のような誇らしさと母に撫でられた時の安心感をもたらしてくれた。

後方からは2人の兄たちが駆けて来る。戦闘後の安心感に緊張が解けかけた、その時だった。

「グオオオオオオ！」

破壊したと思いついでいたゴーレム兵が再び動き出したのだ。新たな核が生み出され、その魔力を使ってギョルギョルと不穏な音を出し、外れた機構を戻したり腕の代わりに胸の装甲を尖らせたりと、再びの攻撃の準備を始める。

「魔獣と同じか、体力を分散して貯蔵する仕組みは！」

ゴーレムと魔獣の体力分散は同じだから魔物特効のエンジェルが効いたのだ、その時点で魔獣相手と同じ戦い方を徹底すべきだった。青年は自分の認識の甘さに舌打

ちをする。

「リーザ、一旦こつちへ！」

次兄が末妹を呼び寄せる。青年は自分が持っていた鋼の槍を少女に渡し、暗にこれ以身を守るようにと伝えた。それは同時に、アラドヴアルを青年に託せという意味だった。名も知らぬ人に託して良いのか——少女は逡巡する。

「リーザ。『彼』なら大丈夫。こちらに來なさい」

このような状況でも穏やかな声色を崩すことなく、長兄は妹を呼んだ。理由は分からないが、信じる兄が信じる人ならば安心できる。少女は代わりの槍を抱えて兄たちのもとへと走り寄る。

「……………これは悠長に構えてられないね」

長兄は槍を置き、腰に帯びていた一振りの劍を鞘から引き抜く。劍の柄こそ人間が作るそれだが、鏢や頭身は石竜子のような鱗を幾つにも重ねてやや湾曲している。鏢部分には、紋様が刻まれた赤黒い石が詰め込まれていた。持ち主が力を込めると、その血が反応して劍全体が赤い光を放つ。英雄の遺産「ブルトガング」である。

「兄上、それ効くか？」

弟がやや困惑した様子で訊ねる。兄は珍しく苦い顔をして口をつむぐ。それは、ブルトガングは通常の劍と異なり、持ち主の魔力が刃をより鋭くする仕組みを持つ魔法劍だ

からだ。しかしながら、現在の持ち主は体内の魔力が少なく、反比例した臂力で刃を無理矢理ねじ込む使い方をするため、本来の威力が出せるか兄弟ともども焦っているのである。

『彼』の魔法が、魔物特効とはいえ一番効いていたようだから、恐らく魔力での攻撃が通りやすいのだと思う」

「……なるほど。それは同感だな。戦技を出してやつと攻撃が通った感がするものな」

「私が突破口を開くから、ニ力はそこをこじ開けてくれ」

「わかった」

ゴーレムが再び攻勢に出たと同時に、2人も駆けた。

「ダーヴァ兄様……!」

虚を突かれてもいない、混乱もしていない巨大なゴーレムに再び立ち向かおうとする兄に、不安げに声を掛けてしまう。

「大丈夫だよ、リーザ。お前たちと、『彼』がいるから」

兄は剣により力を込める。身体の周囲を膜のように巡る力を、紋章石へさらにさらに送り込む。

「……モーリスの紋章よ、力を貸しておくれ……」

自分の中の魔力が少ない事実は、確かに不安感を僅かに生んでいる。しかし、それで

も戦わなければ状況は開けない。

ゴーレム兵と対峙する。ゴーレムは魔力を集約させ、巨大な槍を2人目がけて投げ込んだ。

「兄上の道はオレが切り拓く！」

ゴーレムの光の槍は、弟のマジックシールドを応用した魔法障壁で弾かれる。魔力による攻撃の脅威は去った。そうとなると、兄が恐るものは、何もなかった。

ブルトガングの奥義『獣牙』が放たれる。

獣牙の軌道は、ゴーレムの足元を左下から斬り上げた。予想通り、ゴーレム兵自体は魔法攻撃に弱く、金属の板は容易に裂けて空間を生み出していた。また、魔法攻撃である影響か、刃の届いていない胸元まではつきりと裂けていた。魔力の中心核が見える。今度こそ、最後の核である。

「ニカ、頼んだ！」

「おうやー！」

槍を弾いた直後から展開していた魔法陣に、魔力を込める。魔力は薄く赤く染まった陣を通り別の形へ変化する。ある程度距離がある標的にも届き、貫く雷の閃光。黒魔法・トロン。

トロンによる攻撃は確かに核を貫いたが、ゴーレムを止めるには一歩及ばなかった。

核に残った僅かな力で、ぎこちない動きながらも猛撃態勢に移るゴーレム。戦技や魔法を使ったばかりで逃げることも追撃態勢を取ることまでできない2人。ゴーレムの咆哮が響き渡る。そんな中、舞う土埃にひとつの影が現れる。

「2人ともありがとう。時間稼ぎにや十分だ」

その声は咆哮に掻き消されほとんど聞こえなかった。だが、土埃が舞う中でもその人物が何をしようとしているかは明白だった。

「待て、それはアンタには使いこなせない！ 危険だー！」

弟が叫ぶ。それはゴーレムに攻撃が効かなくて危険という意味も、ともすると英雄の遺産の力に吞まれる可能性があつて危険という意味もどちらも含まれていた。

謎の青年は先程預かつたアラドヴアルの鞘を取り、構えた。彼の持つ血の力が、アラドヴアルへと巡つて行く。

アラドヴアルの槍先部分が赤い光を帯びている。それだけなら、それを持つ人物が何らかの紋章を持っていることが分かるだけだ。

「なぜ……………」

「……………」

戦闘中の、それも佳境。ゴーレムの猛撃が待つ時だというのに、見惚れてしまう。弟は疑問を呟いて絶句し、兄はただ黙っていた。

アラドヴァルは紋章石すら光らせーそれ即ち、その槍を持つ者は紋章石に刻まれた紋様と同じ紋章の力を持っているという証拠を見せーていた。

「……『無惨』って、こうだったっけ？」

アラドヴァルを正中にひと突き。風穴が空く。青年は軽く跳躍し、最も力を発揮するように弧を描き槍先をゴーレムにぶつけた。もはや投げつけるかのような振るい方であった。しかし、効果は絶大で、ゴーレムの核どころか胴体部分であったものすら跡形もなく潰してしまった。

もはや、ゴーレムが再び動くと思う者はいない。

「……幻影兵を出現させていた将兵は倒してある。これで戦いは終わりだ」

青年はアラドヴァルを鞘に納め、静かに言った。

「ああ……。ありがとう、『ダヴィード』」

長兄は一瞬呆気にとられたが、すぐにいつも通りの笑みを浮かべ、自分と同じ名を持つ青年の名を呼んだ。・

1—2 ダヴィードたちのお茶会

「この地に眠る魂たちよ。あなた方の安らぎの地を騒音で満たしたこと、どうかお赦しください。あなた方が主の御許で安らぎと共にあらんことを……」

ミロ斯拉ヴの弟ニカノールは、兄妹の中でも殊に敬虔な信徒であった。死者の眠る地で騒動を起こしたことは、責任や原因の所在に関わらず彼の胸を痛めるには十分だった。少しでも死者に寄り添い、己の心の平穏を取り戻すため、彼は祈った。祈りの言葉を連ねた後、死者の安寧を願う鎮魂歌を歌いながら、祈りを込めた魔力を空間に放った。聖墓は空間が広くも音が響きやすいようだ。

優しい声色の鎮魂歌が響き渡る中、それを邪魔しないほどの小声で、2人のダヴィードは互いの知識と記憶を共有していた。

「ーで、前にミロ斯拉ヴに会って帰る時に通ったのが『聖墓』なんだが……」

「同時に私たちが聖墓に居るといふことは、この聖墓は『どこの』ものか分からない、ということか」

ミロ斯拉ヴの推察が自分のものと一致していることを首肯で伝える。

「ま、この世界の『せんせい』が迎えに来てくれるのを待つとしようぜ」

「『先生』……そうか、そうだね」

2人のダヴィードが何やら納得して和やかな雰囲気醸し出す一方、2人の間で完全に固まり沈黙しているミロスラヴの妹エリザヴェータ。そんな彼女に助け船を出したのは、歌い終わって3人に合流したニカノールだった。

「兄上。リーザは完つつ全に理解が追いついてないぞ……」

「ニカ。お祈りはもういいのかい？」

「鎮魂に『もう』も『終わり』も無いさ。それより、今の状況を把握しないと今度はオレたちが祈られる側になると思って。そのための最低限の礼は尽くした」

「そうか。すまないね」

弟に満足に祈る時間を与えてやれない申し訳なさから、ミロスラヴは目を伏せる。

「……」が噂に聞く聖墓ってことは分かるんだ。だが……」

聖なる魔力に包まれた空間、ゴレム兵に刻まれた聖者セイロスの紋章、立ち並ぶ石櫃、これらを統合して出した結論は、ニカノールにとってさしたる問題ではなかった。今は別の問題を解決させたかった。兄の横に立つ、来歴の不明な謎の青年についてだ。青年はニカノールに対して敵意のない純粹な興味の視線を向けていた。

「俺はダヴィード。ダヴィードⅡアリストアフドミニクだ」

ニカノールからの視線を受けて、謎の青年はその本名を明かす。

「ドミニク……?」

意外な家の名前が出され、ニカノールは訝しむ。一方、ミロスラヴは新たな情報とそれを知らなかった事実に驚嘆の声を上げる。

「そう言えば家名を聞いていなかったね。ドミニクなのか」

「まあ今となつては便宜上使用させてもらつてるって感じだがな。あ、俺のことはアリストアフと呼んでくれ」

堂々と本名、呼び名を伝え、これ以上知らないことでもあるか? と言いたげに、アリストアフは微笑した。

「ええと……、兄上は、この方がどなたか知っているのか?」

「え? 今本人が言ったとおりアリストアフ……ダヴィード||アリストアフ」

「そうではなくて」

ややズレた兄の主張を少し焦った様子で遮ってしまう。文武それぞれの師をして熟達の域と評せしめるほどの聡さのあるミロスラヴだが、妙なところで鈍い節がある。ため息を吐く弟を、ミロスラヴはきよとんとした様子で見つめる。その視線から目を逸らし、今度はニカノールがアリストアフを見つめる。

「アリストアフとやら。何故アラドヴァルが使える?」

緊迫した視線は、詰るようなそれになる。2人のダヴィードは、どこから説明したも

のかと顔を見合わせる。

ニカノールの知るフォドラにおいて、ブレーダットの紋章は傍系のそれが突然現れる場合を除けば、王家の者である証だ。現在の統治者の血を継ぐ者という意味での王家は自分たち兄妹3人だけだ。傍系についても、そのような存在は確認されていない上、青年の年齢を上下に幅を取って仮定しても産まれていないはずがない。また、今ですら吟遊詩人にその糧を生み出す逸話を作り続けている両親が、父王が婚姻外の子を成したとも考えにくい。

「ニカ。こんなことをいきなり言われても、荒唐無稽だと信じてもらえないかもしれないない……」

ミロ斯拉ヴは目を伏せたまま、そんな前置きから話し始める。

「アリストアフは、異世界の存在なんだ。異世界の父上と母上の、たった1人の愛息子だ」
「はあ……?」

兄の言葉を聞いたニカノールの表情と台詞は、案の定といったところだった。

実のところ、ミロ斯拉ヴもまたアリストアフについてはあまり知らない。分かるのは、異世界の存在であること。本人の言動から、異世界の両親は亡くなっていること、アリストアフには兄弟がいないこと、士官学校では級長を務めていたこと、槍術と理学が得意なこと。それくらいしか分からない。ドミニクという家名も、つい先程知ったほどだ。

なぜミロ斯拉ヴがアリストーフを知っているか。それは、遡ること3年前。「ダヴィードⅡミロ斯拉ヴⅡブレレーダッド」と「ダヴィードⅡアリストーフⅡドミニク」は、各人が士官学校に在籍していた頃に一度だけ出会っている。ミロ斯拉ヴにとつて大陸暦1206年、アリストーフにとつて帝国暦1200年のことだった。ミロ斯拉ヴの生まれ育つた世界は、帝国の争覇を撃ち破り戦争を終結させたファールガス神聖王国がフォドラを治めていた。一方のアリストーフは、その帝国が争覇を成し遂げた世界、旧体制を解体し新たな価値観に生まれ変わりつつあるフォドラで生きていた。

ひよんなことからアリストーフがミロ斯拉ヴの世界に迷い込み、2人は級長を示す蒼のマントを介して出会い、ミロ斯拉ヴが自分の両親や家族についての話をするのをアリストーフが嬉しそうに聞く、という不思議なお茶会を開いた。

その際、アリストーフは自分が来た世界のこと、己の両親の名も、名字も、紋章のこと、何も語ることはなかった。しかし、ミロ斯拉ヴはアリストーフの言動や雰囲気、宿しているであろう紋章の特徴から、「異世界の両親の子」であることは察していた。お茶会の閉会宣言をしたのは通りすがりの大司教殿で、アリストーフを連行して行ったことから、女神様が遣わした数奇な出会いだと思うことにした。数奇な出会いだからこそ、異世界の存在に納得することができたのだ。

ミロ斯拉ヴは、「ダヴィードⅡアリスタフ」と名乗る人物にはもう二度と会えないと思っていた。

しかしながら3年の時を経て、アリスタフは目の前に現れた。同じ3年の年月を経た姿で。

デイミトリⅡアレクサンドルⅡブレダッドとその妻マリアンヌの子。その肩書きだけならば3人の兄妹と同じだ。しかし、アリスタフの両親はアドラステア帝国の大陸統一に伴った戦乱で命を落としている。母は、アリスタフが1歳半の時、父は、3歳になったその節に戦死した。三兄妹からすれば、完全に異なる世界の出来事である。

そういう訳で、アリスタフは自分の世界の歴史や人間関係、自身の経歴を簡単に説明した。

歴史については帝国による争覇への道のり、その道中における共通して知る人物の安否、その後の帝国の新体制や価値観について。経歴については、戦後、帝国からも旧王国諸侯からも干渉されないようにと、乳母の親友アネットによってドミニク家に保護されたために、ドミニクの家名を使っていることを。

「簡単な説明」の中の、数多の信じられない事象を聞きながら、ニカノールはアリスタフを観察する。戦闘中の身のこなしは歴戦の猛者のそれであり、兄とと雰囲気に近いことから、年齢は自分よりも上から兄と同じくらい。そう仮定すると、年齢のわりに童顔

だ。大きな瞳は兄や妹、そして父と同じ色をしている。髪の色も、白の中の青さは母の色と同系色である。童顔と評した顔立ちも、何となく母に似ている気がする。そして何よりも、先の戦闘で見せたブレードダッドの紋章石との適合反応。間違はなくブレードダッド家に連なる存在である。そして、その血が誰に由来するか、時間で辻褃が合わなければ空間で辻褃を合わせる。「異世界の両親の子」という肩書きならば、うなずけないこともない。

だが。辻褃と理解と納得は別のところにあるのだ。

「オレたちを、理解の、範疇から、置いて、いけないでくれ！」

あれからずっと沈黙したままのエリザヴェータを揺さぶって、混乱をその身で表現するニカノール。エリザヴェータはなおも動かない。弟らの訴えを、兄は苦笑いで受け止める。

「うーん。ニカの賢さなら大丈夫だろう思って。リーザはそのうち順応するさ」

「ええ……」

返す言葉も淀む弟をよそに、兄は言い忘れていた、と呟く。

「推測だが、この聖墓も私たちのいたフォドラとは違う世界の可能性が高い」

「情報が多い！」

どんどん増えていく情報に対して、思わず飛び出た悲鳴が響きやすい構造の空間を持

つ聖墓内にこだまする。

「ここは異世界のガルグマクの地下で、この世界の『せんせい』が迎えに来るまで待たなければならぬ。ちなみにアリストーフは異世界の、それも帝国が王国と教会を倒した世界の父上と母上の子。私が士官学校に在籍していた頃、一度だけ会ったことがある。アラドヴァルが使えるのは、父上からブレードダッドの小紋章を受け継いだからだ。以上。……まとめると短いものだね」

ミロ斯拉ヴ自身としては簡潔にまとめられて満足したようで、うんうんと頷いている。ニカノールはその横で頭を抱えつつ、「得体の知らない人物」から「異世界の両親の子」という見方を変えればさらに得体の知れない人物について、疑問と共に言葉の刃を口にする。

「王国があゝの帝国に負けたことも信じられないが……。アリストーフさん、なぜ貴方は『死ななかつた』んだ？」

痛烈な言葉を浴びせた実感はある。この「死なない」は、単に運良く生き存えたという意味ではない。だが、自身が「ファールガス神聖王国の第二王子」という肩書きにただ胡坐をかいている訳ではないからこそ、同じ王族としての心持ちが気になったのだ。

なぜ殉じなかつたのか。何を目的として今は生きているのか。ニカノールの中に浮

かぶいくつもの予想が、答えを待っている。

「……1186年孤月の節、帝国軍が王都侵攻の動きを見せた時に、ゴージェイエ边境伯領へ疎開したから——……」

きつと相手の望む答えはそれではないだろうと思いつつ、戦禍に巻き込まれなかった理由を述べる。ニカノールは厳しい目線をアリスタフに向ける。アリスタフは別の答えを続ける。

「終戦時には3歳になったばかりの子どもだったし、自刃せよと言う人が現れる前に、ア——アネットに保護されたから、色々分かるようになった頃にはもう帝国の支配下で、王国がどうのこうの言う世界じゃなくなってたよ。だから殉じても意味はない。今はただ、フォドラの外交官として、北部方面の調停のために働いているよ」

「……帝国に屈したってことか？」

「ニカ！ 言葉を慎め！」

「だってよ、兄上！ 王国が帝国に負けただなんて……、レア様が殺されて……、父上も母上もない世界だなんて……」

2人のやり取りを見て、いかに帝国の印象が悪いか分かった。大陸全土を巻き込む戦乱を呼べば、民は嘆き、大地は泣く。だからこそ、それを終結せしめた王は救国王と呼ばれるのだろう。救国と呼ばれるほどに、帝国の所業は相対的に悪くなっていく。それ

を感じ取った。

とはいえ、自分にとっては仕えている国でもある。悪く言われて何も思わない訳がない。しかし、それを口にするほど幼くもない。だからこそ、冷静に、客観的に説明を加える。

「……確かに俺はブレード家唯一の嫡子だった。はじめこそ旧王国諸侯の一部がガキの俺を旗頭に、つて動いていたらしいけれど、そういう動きは粛せ……減っていつて。まあ何とか王国からも帝国からも殺されずに済んで。そんなもつて、紋章主義や貴族主義のない世界で育つたから、亡国再興とかは考えていないんだよ」

「じゃあ、せめて仇は……?! あんたの世界では、父上も母上も……こ、殺されて……」
「……………ふう……………」

アリスタフにとつては、何十何百と聞かれ言わされてきた質問である。異世界に来てまで同じことを説明しなければならぬのか、と少し自嘲気味にため息を吐いた。

「……まず前提が——」

「ニカノーロヴィチお兄様」

アリスタフの発言すらも押しとどめ、咎める口調で重たい空気を切り裂いたのは、先程からずっと黙り込んでいたエリザヴェータであった。

「はじめにダヴィードお兄様は仰つたわ。アリスタフさんは異なる世界から来たよ。だ

とすれば生まれも、育ちも、信念も価値観も、葛藤も赦しも、あたしたちとは違う。今すぐに必要な情報として、ニカ兄様の質問に答えは要らないと思うわ」

エリザヴェータは自身の髪留めを取り去り、アリストフに見せた。緑青色の輝石が銀枠に囲まれた美しい装飾品であり、彼女の母から譲り受けたものだ。

それは、アリストフの後頭部で彼の纏めた髪を留める装飾品と同じものだった。思わず手を後ろにやり、それが抜き取られたものではなく、同一空間に2つ存在しているものだと確かめる。アリストフ自身は、今この時までこれが母の形見であることを知らなかった。いつの間にか所持していて、それは乳母メルセデスの形見かその親友アネットからの贈り物だと思っていたからだ。だが、異世界の王族を名乗る者が同一と思われる物品を持っていたことで、自ずと生母のものと理解した。

「あたしも理解が追いつかないけれど、アリストフさんはどこかの世界のお父様とお母様の子ども。あたしたちに似た存在。何よりも、味方。それだけ分かればじゅうぶんよ」

「リーザ……」

呆けた様子で妹の名を呼ぶニカノール。エリザヴェータは、刺々しい哀しみが覆う2人の空間を、笑みと言動で破ってみせた。ニカノールはかぶりを振って絞り出すように

言う。

「分かつてる。分かつてるけど、王家の人間が、異世界とは言え王家が途絶えたと聞かされて何も思わないわけにはいかなかった訳で……ごめんさい」

「いや、謝ることはない。弟さんの言い分は最もだ。それに、異世界の……って言われて納得できないのも正常だ。疑ったり詰ったりするのは、俺を信じたいから、ってことだと思うよ。疑念を取り去って、仲間になろうとしてくれたんだらう？」

「……」

自分すらも言語化できていなかったアリスタフへの疑念は、妹の助けもあり、当の本人により結論づけられた。そうだ、仲間になる以上は味方であってほしい。敵ー兄や妹に危害を加える可能性のある者は排除しなければならなかった。自分の中の強い信念が棘を持つて相手に向かっていたことを自覚した。

「そうは言っても、先の非礼は詫びさせてください」

自分に信念があるように、相手にももちろん信念がある。それを侮辱しかねない言動をしたのだ。自戒も込めて、ニカノールは深く頭を下げた。

「分かった。謝罪を受けよう。許す。理由はさっき言った通りだ」

向けられる好奇や悪意には慣れてる。それに、相手の背景を知っているからこそ、相手の言動に疑問は無く、怒りもまた無いのだ。その背景理解の助けには、ミロスラヴ

の存在が大きいことは言うまでもない。とは言え、謝罪を無碍にして相手の悔悟の機会を奪うのは野暮の極みだ。アリストアフはニカノールの謝意を素直に受け取った。

「それと、妹を助けてくれてありがとうございました」

「それについては、私からも。心からの感謝を……アリストアフ」

今まで弟たちのやり取りを黙って見守っていたミロスラヴも礼を述べる。少々照れ臭くなったアリストアフは、いいってことよ、とはにかんだ。

「まあ、色々話したいのは山々なんだが、とりあえずはここがどこの世界で、なぜ呼ばれて、どうすれば帰れるか、力を合わせようぜ」

改めて仲間になったアリストアフの言葉に、三兄妹は力強く頷いた。

「では、アリストアフ。君が以前に聖墓を通った時、先生はいつ頃現れたんだい？」

「あー、あの時は既に師が待つていたから……。今回の待ち時間は読めんな」

渋い顔をしたアリストアフの返答に、ミロスラヴも苦笑する。

「いつまでも来なくて、餓えてしまったら困るな」

「あたしたち、昼餉の前だったから……」

「そう言われると、腹減って来たな」

戦闘で警鐘を鳴らして昂っていた神経が正常に戻ると、今度は腹の虫を鳴らす。しょぼくれた顔をする面々に、したり顔でアリストアフはあるものを掲げてみせた。

「ダヴィード君のお茶会携行品が役に立つな！」

見れば、横は片手剣ほどの長さ、径はアリストアの腰ほどの包みが高々と掲げられている。ぼかんとする三兄妹をよそに、アリストアは包みを開け、中から木製の椀、鉄製の茶器、茶葉、そして菓子を取り出した。

「俺はある紋章学者と打ち合わせをするために修道院に来ていたんだが、紋章学を極めんとする者つてほしい甘いものが好きだからさ。で、いい案が思いつく部屋の外でもお茶会ができるように、つて、割れない木製と鉄製の茶器を手に入れたわけだ」

椀が鉄製だと熱いし重いし錆びるから、湯沸かし用の茶器以外は木製を選んだんだ、と呑気に解説しつつ、敷き布に茶器を並べ、日持ちしやすい焼き菓子を並べていく。

「まだ2人の紹介も聞いてないし、な？」

そう言われてみれば紹介し損ねていた、と反省する生真面目なミロスラヴ。聖墓で飲食つて罰当たりじゃないか、と信徒ならではの懸念を抱くニカノール。おいしそうなお菓子だから早く食べたいわ、と目の前の誘惑に夢中になっているエリザヴェータ。三者三様の思惑が渦巻く中、アリストアは人数分の敷き布が無いので外套を着用しているミロスラヴとニカノールと自分はそれを敷くように命じ、紺色の敷き布をエリザヴェータに渡した。

「あら、お水はお持ちでないの？」

敷き布を受け取りながら、並べられた道具類の中に重要な水分を保管しておくものがないことを指摘する。

「いい質問だぜ、お嬢さん」

ニヤリと笑い、ニカノールに視線を向ける。

「弟くん、ファイアーは撃てるか？」

「ああ、もちろん」

ファイアーと言えば初級黒魔法のひとつである。理学に明るい彼はもちろん習得済みである。

「助かる。ーじゃあ、行くぜ」

アリストフは自身の前に小さな魔法陣を組み、己の魔力を通していく。組み込まれた命令式によって魔力は風の性質を帯び、大気中の水分を集めて一塊の水を作り上げた。ニカノールはその魔法をフィンブルであると予想するが、自分で首を傾げる。

本来の風の上級魔法フィンブルは、もつと巨大な氷で敵を包み、一定時間経過で氷ごと破壊する魔法である。しかし、アリストフの展開したフィンブルは一握ほどの大きさで、何も包まず、そして破裂しない。いまだ宙を浮いている。最も、黒魔法の中で地を這うのは風属性から派生した氷魔法のブリザーとフィンブルと相場が決まっている中、浮く氷というのは異端そのものであった。

アリストルフは左手で陣に魔力を送りつつ、右手で木の器をひっくり返して氷の上方に配置する。氷の下には、同じように茶器がおいてある。

「じゃ、ファイアーよろしく！ 俺に当てないでくれよ」

「ええ……。はい……」

あまり見たことのない物理学の論理展開に困惑しつつも、ニカノールは氷に向かってファイアーを放った。

蒸発した水分、落ちたり溶けたりした水分は木の器に集まり、必要な水が揃った。それを鉄製の茶器に入れ、ファイアーで湧かす。茶葉の包みを入れ、ほどよく蒸らす。セイロステイーの出来上がりである。

「はい、どーぞー！」

「木の器って風情があるわね。いただきますー！」

「魔法、つてまさに魔法だね……。？ いただきますー」

「聖墓の空気から精製した聖なる水……。主よ、守護聖人セイロスの名に免じて飲食をお許してください。心していただきます。……。うまい」

各位がそれぞれお茶や菓子を口にし、空腹や渴きを満たす。重要な遺跡機構の中で、何とも不思議なお茶会が始まった。

はじめに、ニカノールとエリザヴェータが名と身分を名乗り、ミロスラヴも改めて名

乗った。士官学校卒業後、正式に王位継承権を得て、父王の補佐官を勤めていることが伝えられた。一方のアリスタフは、先ほど伝えた北方方面の外務官として働いている以外の情報は伝えなかった。帝国に苦しみられた事実が歴史として残る者たちに、帝国に仕えている自分の仕事内容を伝えるのは気が引けたからだ。

やがて、理学に明るいニカノールが、アリスタフが先程見せた不思議なフィンプルについて質問したところから、2人の理学談義が始まってしまった。魔力の少ない自分が一線で戦えるようになるために、魔法陣に組み込む式を一部変更していることや予め陣を魔石に覚えさせておくことなど、アリスタフによる理学講座に、きらきらと目を輝かせてニカノールは聞いた。

ふと、何らかの変異を感じたアリスタフは話すのをやめ、理学の話について行けず白目を剥きかけているミロスラヴの肩を揺らす。

「ミロスラヴ、起きてくれ。ー『せんせい』のお出ました」

アリスタフは聖墓の入口にある巨大な扉が開かれるのをじつと見つめている。開閉において轟音が伴ってもよいほどに巨大な扉が、音もなく開きゆく。その代わり、周辺の砂塵が舞い、魔石の光を反射してきらめく。

「後のことは……頼んだよ……」

今にも召されんとばかりに力なく声を発するミロスラヴ。アリスタフは彼の頬を数

回ぺちぺちと叩く。

「駄目だ。なんか、俺、動悸が止まらなくて……、こんなこと初めてなんだ。ミロスラヴに交渉役を任せたい」

仲間の不調を聞いてもなお呆けていられるほど、ミロスラヴは無責任な人間ではなかった。今までの様子が嘘のように刮目し、アリストルフに視線を向ける。

「……大丈夫かい？」

「……そつちこそ」

皮肉めいた言動をする余裕はあるようだが、額には冷や汗が浮かんでいる。

「まだ会つてもいないのに、心臓がうるさい……」

「ニカ。レストを」

言動からして、聖墓に彼の人が見れたことによつてもたらされたことを自覚しているようだ。ミロスラヴはアリストルフを一瞥して弟に指示を出した後、扉の砂塵の中の人影に注視する。

ニカノールはすぐさま身体の異常を取り除く白魔法レストを展開する。身体がその動悸を異常なものだと認識していれば、動悸は治まるはずである。

「恋煩いかしら。先生は美しい方だから……あら？」

砂塵は落ち、人影に色彩を与える。風薫る空のような翡翠色の髪と瞳を持ち、金と白

を基調とした聖職者の出立ち。中でも高貴な立場であることを、外套の裏地の紫が教えてくれる。すらりとした頭身の中に鍛えられた筋肉を感じる。淡白ながら端正な顔立ちは、4人の姿を認めてやや驚いた表情見せた。この世界の凶星、「せんせい」と呼ばれる人物である。

一方の三兄妹は、自分たちの知る先生と大きく異なる点があるため、ぽかんとしている。

「ええと、大司教殿下の御兄弟であらせられるお方、でしょうか」

口火を切ったのはミロ斯拉ヴ。質問の中の可能性は、首を横に振られることによって棄却された。

自分はフオドラ統一国家元首のベレトであり、兄弟はいない、と付け加えられた。

「国王陛下……なのですか？」

エリザヴェータの質問には、首は縦に振られた。その意味は、三兄妹たちにとってはアリスタフの存在並みに衝撃的であった。

「……どことなくベレス先生に似ているような……」

目の前の人物の肩書きに驚きつつも、アリスタフにレストを掛けながらニカノールはぼんやりと呟いた。ニカノールの呟いたベレス、の言葉に国王は首を傾げる。

「……言っただろ。異世界に来た、って」

レストが効いてきたのか、呼吸を整えながらアリスト Staf は言い放った。

「俺の世界の師は、深い海みたいな青い髪だった……」

それらの言葉で、ミロスラヴは得心がいったようだった。

「私たちは異世界から来た者です。『壊刃』ジェラルトの一人息子ーベレト殿。『ベレス』とは、私たちの世界の壊刃ジェラルトの一人娘にして、現在はセイロス聖教会の大司教殿下でございます。『天帝の剣』を操る、と言えばもう間違いはありませんか？」

国王は胸に手を当て、しばし考え込んだ後、理解した、と頷いてくれた。その返答を受け、ミロスラヴは質問を切り込んだ。

「さて、教えていただいてもよろしいでしょうか。私たちがこの世界に呼ばれた意味を」

彼の碧眼は、真実を見極めんと澄み切った光を帯びていた。・

1—3 「せんせい」

国王はこの世界のフォドラの時空と事情を話し始めた。現在は、大陸暦（旧帝国暦）の1191年、天馬の節。かつてフォドラを襲った戦乱は、セイロス聖教会とその騎士団を主体とした新生軍が帝国を打倒することで終結した。その後、新生軍の将であり炎の紋章と天帝の剣を持つ指導者ベレトのもと、戦乱によって荒れ果て、政治形態が崩壊した旧王国・旧同盟をもまとめて、フォドラ統一王刻が誕生したようだ。聞くに、大まかな時系列は三兄妹が生まれた世界と似ているようだった。

誕生からおよそ5年経ち、フォドラ内の統治も安定した頃合いである。今後はフォドラの外にも目を向けて、主にパルミラとの国交樹立に向けて準備を進めているようだ。しかし、ここで問題が発生しているらしい。

リーガン領とエドマンド領の間にある豊かだが深い森に、方向感覚を狂わせ、遭難やら迂回やらを発生させる領域があるらしい。地図上で領域を把握し、結界らしきものが張られていること、その魔力の痕跡などは判明したが、まず近づくことから難航するために手の付けようがない。森に眠る鉱脈や木資源の入手、パルミラとの交易に向けた行商路開拓などを考えている国としては、何としても解決させたい謎だと言う。

一方、誰も近づけない領域と言つても、そこに入ることのできる人間がいた。こともあろうに、国王その人である。王は静かに森の様子を見て回つたが、森は魔獣の巣となつており、中には大型かつ巨大な魔力を持つものもいた。討伐しようにも1人では太刀打ちできそうもなかつたようだ。

国王が森に入れた理由だが、王は炎の紋章の持ち主であり、およそ全ての紋章の代替ができるとされている。とすると、その領域に入るには特定の紋章を持つ人間が必要ではないか、と理由付けができる。そこで、確認できる紋章持ちたちを片っ端から向かわせたが、誰も彼も同じ。大紋章でも小紋章でも関係が無かつた。

確認できる分は試し尽くして、さてどうするかと思案しているうちに、女神に聖墓に向かうように言われた気がしてやって来た、という。この時、国王が女神の真名を言いかけたのは、全員が首を傾げて聞かなかつたことにした。

国王は問うた。君たちは紋章を持つか、持つならば何の紋章か、と。

「オレはブレードダッドの小紋章でー」

「あたしはその大紋章です」

「私はモーリスの小紋章です」

王国の3人が答えると、ブレードダッドの名に驚く一方、モーリスの名を呟いて国王は首を傾げた。聞いたことがない、といった様子だつた。モーリスを知らないのだろうか

判断したミロ斯拉ヴが説明をする。

「かつてフオドラを救ったとされる英雄は、12人いたのです。解放王ネメシス、フオドラの十傑、そして抹消された英雄モーリス。モーリスは英雄の遺産を手にしたまま、紋章石に取り込まれ魔獣となりました。そのため、モーリス自身は英雄としての名を消され、モーリスの紋章は獣の紋章と呼ばれ蔑まれ、最近まで世間では表に出てこないものでした」

この目で見た英雄の遺産や伝承史料を。この耳で聞いた父母らの話を。吟遊詩人の唄う物語のようにすらすると、その紋章を宿すミロ斯拉ヴは語る。国王は、最近では表に出ているのか、と現実感のある部分に質問をぶつけた。

「はい。私たちの世界では、彷徨えし獣となったモーリスを父上たちが討伐し、人の骨とモーリスが持っていた英雄の遺産を回収しました」

そう言つて、ミロ斯拉ヴは鞆からブルトガングを引き抜いた。論より証拠と言わんばかりに、力を込めて紋章石を赤く光らせ、英雄の遺産であることを証明する。

「モーリスは獣ではなくなり、モーリスの持つていた魔剣ブルトガングは先の戦争で人を助け、モーリスの紋章を宿す王妃が人々を癒したので――今ではモーリスも十傑の仲間として認識されつつありますね」

ミロ斯拉ヴの説明にありがとう、と礼を言い、国王は考え込む。もしかして――と小

さく呟いてその先は言わなかった。国王の意を汲み取り、ミロスラヴは首肯した。

「モーリスはエドモンド領南方にある森で1000年もの長い間、殺戮の衝動に苦しんでいたそうです。先生ー失礼、陛下の話と我々が呼ばれた理由を併せて考えるに、森にいる魔獣たちの頭領はモーリスで間違いないかと」

では、モーリスが結界を張って侵入者を防いでいるのだろうか、という疑問については、そのような情報を持たぬ故に結論は出なかった。

「とにかく、その森にある結界のような何かは、モーリスの紋章を持つ兄上なら入れるってことか」

「それと、持つ紋章が異なるとはいえ母上の血を宿すお前たちも入れる可能性が高い」

わざわざ主から啓示があったくらいだから、意味のない召喚などあってほしくない。弟と妹が危険な目に遭うかもしれないのだから、尚更。ミロスラヴはそう願っていた。

国王は、君たちの両親は何者なのか尋ねた。モーリスの血、ということでは母親のことが気になったようだ。

「もし私たちの世界と同じ年に教師を務められていたならば、恐らく『金鹿の学級』にマリアンヌⅡフォンⅡエドモンドという、大人しい生徒がいたかと思えます。覚えておいでですか？」

国王は頷く。担当学級の生徒ではなかったが、あの頃は大人しすぎてかえって気にな

る存在だった、と話す。そして、何か紋章を持っているような気がしていたが、と言って、ミロスラヴたちの反応を待った。

「はい。母上は当時、モーリスの……、獣の紋章を所持していることを秘匿していました。恐らくこの世界でもそうだったはずですよ」

ミロスラヴの説明に、国王はふむ、と頷いて頭の中の情報を整理した。兄のモーリスの紋章は母親から継いだもの。では弟と妹のブレーダッドの紋章は父親からーと、整理した上で目の前の青年たちに目をやると、驚愕の事実にぶち当たる。

「私たちは、王国が帝国を打倒し、レア様の跡にベレス様が大司教となられた世界の生まれ。国王の名はデイミトリアレクサンドルブレダッド。その妃は、マリアンヌ殿下。フォドラ屈指の弁論家としても名を馳せ、王と共にフォドラの治世を歩まれる方です」

国王は異世界の歴史や自分の分身のことも気になったが、それよりもデイミトリと結ばれ王国の統治をするマリアンヌの転換ぶりに驚いた。確かに、卒業が近づくにつれ明るくなっていったようだし、近年はエドマンド辺境伯のもとで領内経営や弁論を学んでいることは風の噂で耳にはいた。だが、そこまで変わるものなのかと驚嘆した。

「あ、そう言えばオレたちの世界は大陸暦1210年。この世界のおよそ20年後なので……まあ、そこは一つ参考までに」

驚くあまり化石状態になっている国王に向け、ニカノールが補足するが、それはそれで驚愕の事実であり、国王の頭はより混乱の渦に飲み込まれていった。

聖墓の静かな空気が降りてきた。沈黙を包み、思慮には熟成を、談話には温もりを与える。

「1191年……。確かに、ニカヤリーザはまだ産まれる前だね」

これ以上情報を与えるのは無益と判断し、国王の考えがまとまる、もとい国王が状況を飲み込めるまで、ミロ斯拉ヴとその仲間たちは雑談することを決め込んだ。

「俺は8つの年だなく義叔父上の鬼シゴキが始まる頃かあ。懐かしいやら恐ろしいやら……」

「ドミニク家でのことだよな？ とても気になる」

「ギユスタヴの実家だから王家の教育ともちよつと被っているかもな。ドミニク式訓練法？」

ドミニク式訓練法、の言葉に、アリストアフとミロ斯拉ヴは互いに鋭い視線を交差させた。しばらくの沈黙の後、アリストアフが静かに口火を切った。

「……秋口の夜中に」

「野山へ投げ出された！」

アリストアフが上の句を言うと、ミロ斯拉ヴは自身の受難を下の句として返す。やや

嬉々として。

「重装兵の鎧を」

「着込んで外周！」

今度はニカノールが返す。馬上の高さすら苦手な彼は、馬術や飛行術の代わりに重装兵の訓練を何倍もしたものだ。つた。

「荷馬車は乗るもの載せるものではないー」

まるで誰かの口ぶりを真似するかのように、低い声で台詞めいた言葉回しをするアリスタフ。

「背負って運ぶものだー」

今度は兄も弟も、全く同時に返答した。もはや笑っている。まさか自分たちと同じような地獄の訓練法をこなした人物がいるとは思わなかったため、様々な感情を超えて喜びが真つ先に顔を出したのだ。

男連中が楽しそうに合言葉を言い合う様子を、色んな意味で悔しそうに見上げるのはエリザヴェエータ。何やら不服のようだ。

「あたし、まだやってないわー」

「リーザはもう少し体が大きくなってからでないと負担になるからまださせられないよ」

仲間はすれにしたい訳ではないこと、今までそのような訓練をしてこなかったのは末妹だからではないことを、その微笑みと共に伝えるミロスラヴ。最も、彼らにとつても成長期に該当する期間に行うものではないのだが……。長兄が今後も何かと理由を付けて妹にだけは理不尽な訓練をさせまいと思惑を働かせていることは、その微笑みを見ただけでは分かるまい。

「まあリーザはあんなことしなくてもじゅ——ぶん過ぎるくらいの馬鹿ぢか——兄上痛いイタイ！——筋肉へ効率的に力を伝達できているようだから、まあやらんでもいいんじゃないか？」

「違うの。その何かをやり切った！ ドミニクスと言えばコレ！ みたいな一体感をね、兄様たちとやりたいの……！ アリスタフさんもいるし……みんなで、ね？」

どうやら意図せずとはいえ仲間はすれになってしまったことが寂しかったようだ。漢気迸る熱情への共感と、兄たちを慕う純粋な気持ち、そして母譲りの必殺上目遣いに、ミロスラヴの胸は穿たれた。

「……国王陛下からの要求に対し、返礼として野山を一日貸し切りにもらおう。一日中ドミニクス式訓練大会だ！」

「兄上?!」

「ダーヴア兄様、大好き！」

「ナンダコレ」

混沌を極める三兄妹への状況を素直かつ問題なく吐き出せる言葉を選んだら、アリスタフの発言はやたらとぎこちなくなってしまうた。

自分にも兄弟がいたらこうも盲目的に溺愛しただろうか。母の胎内には子どもがいたかもしれない、なんてたられればの噂に揺らいだ時期を思い出す。だが、そんな「もしも」など目の前の現実には即していなければ無用なものだ。たとえば、両親がまだ生きていたらーなどと考えても、事実いないのだから、現状を飲み込み未来を切り拓こうと、アリスタフは割り切って生きてきた。

「……フフ」

ただ、恣意的に「もしも」を手繰り寄せて望みを叶えて良いのなら、もう一人のダヴィードと同じ世界を望んだかもしれない。と、詩的で感傷的な自分に、気付いたら微笑んでいた。

「アリスタフ。他人事のようにしているようだが、君も参加するんだぞ」

「……分かってるよ……」

こうして、異世界からはるばるやってきた一行が閑話を繰り広げているうちに、国王の方は考えをまとめたようだった。

国王の意見ならば発言は端的なものだった。「謎の解明に協力してほしい」。協力の

範囲は明示されなかった。自分たちの裁量で決めて良いということだ。

三兄妹の代表者であるミロスラヴは沈黙ののち、答える。

「どの時空にしようとも、助けを求むる声があれば応える。それがブレード家の考え方」

長兄の意見に、弟も妹も同意見だと頷く。しかし、ただ、とミロスラヴは付け加える。「甚だ僭越ながら個人的な付与条件があります。私—ブレード—ミロスラヴ—ブレード—の弟と妹の身の安全が確保されるのであれば、です」

その条件に、こちらの力の可能な限り答える、と国王は約束した。これで三兄妹の意思は確認した。自然とアリストアフの方へ視線が移される。

「俺も、未知な力に自分の力が拮抗できるってなら、やりますよ」

本音を言えば、両親から貰い受け、多くの命に守られたこの身は、できることなら自分の世界でのみ働かせたい。だが、同じブレードがやると言って、自分はやらないと言うのは不義理なものだと思っただけだ。理性でなく情に流された、と言えばそうなるが、そのような「感情」だの「絆」だのに巡り会えることもそうそう無いと思い、流されることにしたのだ。

4人分の返答を受け、国王はありがとう、と礼を言った。一国の王は易々と頭を下げたものではない。それを理解している面々は、事の重大さを改めて受け入れた。

ふと、国王はアリストアフを見つめ、君はどちらかの紋章を持っているか尋ねた。

「俺の『血』はー」

「あたしたちと同じブレードダッドの紋章、ですよね、アリストアフさん！」

先の戦闘で見事にアラドヴァルを使いこなした様子を思い出しながら、きらきらした瞳でエリザヴェータが確認する。

「あ、ああ」

アリストアフはやや歯切れの悪い返事をしたが、それより国王はアリストアフと3人の関係性が気になるようだった。3人は兄妹のようだが、アリストアフは違うようで、ブレードダッドの紋章が共通しているなら親戚か何かか、と。だが、それだとモーリスの紋章の因子が結界を突破することに矛盾する、と指摘する。

「同じ両親を持つ異界の存在です」

迷いを断つようにミロスラヴははっきりと答えた。何となく、彼の存在を異なるものとして扱われそうな気がしたからだ。アリストアフの存在は否定されたくないー彼がダヴィードという名を共通して所持しているから尚更、アリストアフの存在はミロスラヴにとつてかけがえのないものだった。彼は、自分には無い「もしも」を持つから。ー

ミロスラヴの返答に対して国王はそうか、と頷き、色んな世界から連れて来たんだな、とひとりごちた。

こうして、
国王と4人は聖墓を出て地上へ向かい、
具体的な話し合いを進めること
になった。▪

血の功罪

2—1 紋章が謎

紋章が謎

ガルグⅡマク大修道院周辺は、フォドラ統一国家の中枢、つまり王都でもあった。フォドラの民の精神的な中心がセイロス教、統治的な中心が国家であるため、これらが近くに存在することは、大きな意味を持つていた。王都は政治を機能させる街として存在し、アンヴァル、フェルディア、デアドラなどのかつての国家の中枢は、大都市として経済の中心を担っていた。

ガルグⅡマク自体が峻険な山岳地帯であるために防衛戦に強く、そのため守備兵を少なく置ける。余剰分をフォドラ各地の治安維持のための兵として割くこともできるそうだ。政治形態や中枢機関が違えばやりようも変わると知ると、ダヴィードたちは底知れぬ可能性に嘆息することになった。

「確認しておきたいことがあります」

大広間二階の執務室に入室してすぐ、ニカノールが口火を切った。

なお、移動中は国王と彼に連れ立って歩く青年や少女の存在が周囲に少なからず影響

を与えていたため、国王による政治形態の説明を受けるに留まり、妙なことを口走ることとはできなかった。

「あの時オレたちが協力要請を呑まなかったら、あのまま帰れたのですか？」

協力を強いられたとは思っていない。だが、事を成した後に安全かつ元の世界に影響を与えないようになってきているのか、ニカノールは気にしていた。

国王はどちらでもあって、どちらでもあると答えた。

言うに、先日も同じようにある二人組が聖墓に現れたらしい。事情を話し協力を仰いだ。「自分たちの世界のこととは自分たちでどうにかするべきです」「自分たちには自分たちでやることがあるので」と突っぱねられたそうだ。その時はそのまま帰すことができだが、今回は予想外にも四人喚びだしてしまい、力を蓄えるのに一週間は力が欲しいとのことだった。もしくは、ミロスラヴとエリザヴェータの持つ英雄の遺産の力を借りればすぐに戻れるが、遺産は数日間使えなくなると伝えられた。曰く、国王の力はだいたい二人を行ったり来たりさせられる力だから、だそうだ。

「……それは確かにどつちもどつち、ね。あたしたちの世界の明日がどうなるか分からない以上、戻るために遺産の力は使いたくないわ」

アラドヴァルを握る腕に力を込めてエリザヴェータは呟いた。

また、今いる世界での時間は経過するが、戻る時は概ねもとの時間に戻れるそうだ。

これについては、時空を移動したところのあるアリストアフが保証した。ただし、朗報ではあるが、この世界で一年過ごして戻れば一瞬にして一年成長したことになる。なつてしまふと警告された。

「……まあ、どちらにせよ結界の謎は解かねばなりませんし、モーリスと戦うかもしれない。今はそちらに集中します。……地形や位置情報など、情報がもう少し欲しいですね」

モーリスについて知っているといつても、もちろん実際に戦ったことはないため、その力は伝聞情報でしか知らない。慎重な様子を見せるミロスラヴの発言に対し、国王は待っていましたと言わんばかりに、ある魔石を取り出した。

「件の、結界の魔力を取っておいたつてやつですか」

ニカノールは魔石を覗き込みながら訊ねると、国王は頷いた。

魔力を分析しても、暗号ばかりでなかなか解析できないとのことだ。だが、モーリスの紋章ならばその因子を持つミロスラヴたちならば解決の手がかりを持っているかもしれない、違う意味でも待っていましたと言った。

「しかし……私は理学が絡んだ途端に足し算からダメになってしまうのですが……」

魔法の話になった辺りから青く沈痛な顔をして周囲の顔色を探るミロスラヴ。弟たちに見えないように、アリストアフの外套の端を引っ張って握る。まるで助けを求めんば

かりの行動に、アリストーフはにやにやと笑う。

「モーリスの紋章を持つ者だけが手がかりに気付けるのかもしれないし、あるいは……」
兄の状態に気付いていないのか目の前の好奇心を満たす物体に夢中なのか、ニカノールは国王から魔石を受け取り、早速魔力の様子を観察し始めている。

ということ、アリストーフが助け船を出すことにした。

「……どちらにせよ、何かしらと交戦する可能性があるから、諸々の装備品を借りてきた方が良いかもなあ？」

魔石から話題を逸らす。国王に目線を遣ると、いくらでも借りていつてくれ、と大変頼もしい返事が返ってきた。

「……それなら私が適任だと思う。武器類の目利きには自信があるんだ」

「そっか。じゃあエリザヴェータと一緒に頼む。俺たちの足りない分も適当に頼むよ」

ミロスラヴやエリザヴェータは訓練着とはいえ武器類は装備していない。アリストーフとニカノールは今の装備でも戦えないこともないが、鎖帷子や手袋は欲しいところである。

ミロスラヴは自身の分、弟とアリストーフの分を。年頃のエリザヴェータには本人の分を。アリストーフが身内ではないからこそ、それら言外の意を含ませることができた。

「分かった。任せてくれ」

心底ほっとしたように顔を緩ませ、ミロ斯拉ヴは頷いた。国王は側用人を呼んでくると一時退席した。

「よし」

淡々とした所作でアリスト Staf は腰に帯びた短剣を取り出し、ダヴィードと名前が刻まれた鞘から抜き去る。美しい銀色が、傾き始めた陽光を反射している。

「ミロ斯拉ヴ。覚悟はいいな？」

左手を開いてミロ斯拉ヴへ差し出すアリスト Staf。反射光の輝きは、短剣の威力を表しているようだった。

「アアアアリスト Staf さん？」

「ああ。ひと思いにやってくれ」

アリスト Staf の手を取り、目を閉じるミロ斯拉ヴ。

「おおお兄様？」

二人のダヴィードによる訳の分からない行動に、弟たちは右往左往するしかできない。

「うーん……」

添えられたミロ斯拉ヴの手を観察して、アリスト Staf はひとり唸る。

「どうしたんだい？」

「王子様の綺麗な肌を疵物にするのも気が引けるし、これから戦おうつてのに手を切るのはいただけなよな……」

「フフ。なんだ、そんなことか」

アリストタフの思惑や思いやりやらを感じ取ったミロスラヴは、彼から短剣を奪い、慣れた手つきで己の左手の甲に一閃、切り傷を付けた。

フアーガス地方出身者に多い、白めの肌。彼もその特徴を身に宿している。赤い線のように、うつすらと血が滲んでいく。

「慣れているよ。傷もね、意外とすぐ消える」

その傷は痛みの中に入らないのだろう。ミロスラヴは微笑みながら、傷口周辺を圧迫し、血をある程度纏めている。

「はい」

手を魔石に向け、一滴垂らす、というよりは擦り付けた。

「モーリスの紋章持ちの血が、反応するといいね……」

丁度戻ってきた国王と側用人に連れられ、ミロスラヴとエリザヴェータは執務室から去って行った。

アリストタフは短剣の血を拭き取り、鞆と腰帯に戻して、次はお茶会携行品入れから蠟

板を取り出していた。

「兄上つて、本当は理学できるんじゃないのかなあ……」

既に出現していた魔法陣が血に反応し、モーリスの紋章が浮かび上がり、陣の一部が光っていた。それを見て、ニカノールは冗談とも本音とも取れない感想を洩らしていた。

ニカノールの疑問の答えは、アリストーフは分からない。何も言わないことにした。ニカノールの言葉をすり抜け、近寄って魔法陣を覗き込む。

「うーむ。反応して光った部分を読めばいいんだらうけど……でも、かなり古い言葉と言い回しだな……。重要な部分は図号式暗号になっている、と」

苦い顔をして暗号の暗号部分とにらめっこするアリストーフに対し、ニカノールは冷静に目の前の情報と己の知識を照らし合わせていた。

「これ、古い版のセイロス教の聖句にちよつと似ている気がする。その構文から推測してみよう」

「お願いできるか」

セイロス教にあまり親しくないアリストーフは、ニカノールに頼るしかない。もちろんだと言いたげにニカノールは頷き、既知の構文と単語の分かる範囲で読み上げていく。

「一、この……を知る者をお通しください」

「一、この……を標としてください」

「前半部分はこの二つだ」

構文から推測と言いつつ、暗号になっている部分を除き、ニカノールは見事に訳してみせた。セイロス教の信徒として、神聖王国の王族として、彼はセイロス教に関する史書や聖書をより深く理解するために古代語や神聖語を学んでいたのだ。

「結界に関する枠組み、方向性を示す命令文かな。暗号は……結界に入る云々だから紋章なり血なり入りそう。標は通る人間の判定方法？」

読み上げられた文を蠟板に書き付けつつ、得られた情報からアリストアフは推測を重ねてぶつぶつと呟っていた。

「……続きも読めそうです」

あつという間にニカノールが次を読むと言う。アリストアフはその速さの種となる深い知識に感嘆しつつ、読み上げを依頼する。

「一、人ならざるものを……してください」

「二、……の愛するもののため」

「……………」

光る部分を全て読み終わったニカノールは、深刻な顔つきで陣を見つめている。考えをまとめている、というよりは別のことを考えているようだった。

「おいおい、最後のボカした単語は暗号じゃないし、さすがの俺でも知って……おい？」はじめは茶化すつもりで指摘を入れたが、ニカノールの額に浮かぶ冷や汗を見て、彼の中の深刻性を受け止めることにした。

「聖句に似ているが、いやに腰の低い言葉遣いのようにも見えるんだ……」

ニカノールの言葉の真意は、事実を知らないアリストーフは推測しかできない。だが、それでも推論を述べて先へ進む。

「結界を張ったのはモーリスかどうか、か」

先程ちらりと話題に上がった内容。核心すれすれの言葉でニカノールの心の内を探る。そのことを考えていた、とニカノールは静かに頷き、護身用の短剣を取り出した。

「……オレの血を使ってみる」

「試す価値は大いにあると思うぜ。けど、……いいのか？」

身体を切るのは問題ないか、そして、この先を知る覚悟があるのか、という二つの意味だった。ニカノールは返事の代わりにナイフで指先を切り、魔石に血を垂らした。

……………

新たに得られた情報、新たな暗号、解説……、それらを繰り返し、アリストーフとニカ

ノールは結界の謎を紐解いていく。一方、進めれば進めるほどに、ニカノールの口元は固く閉ざされていく。

「……」

震えるニカノールの背中。アリストアフは彼の背負う青の外套をぽん、と軽く、音が鳴るように叩いた。

「いやあ、俺たち大手柄だな。もうこれはお役御免、解放されるぜ」

重い空気を弾き飛ばすように、アリストアフは努めて明るく言ってみたが、ニカノールは黙り込んだままである。やがて、魔法陣から目を逸らしてうつむいてしまう。再び重い空気が沈み、戻ってくる。

「もう十分つてなったら、帰れるぜ。望むなら、な」

「……アリストアフさんならどうする？ どうしたい？」

ニカノールからの思いがけない質問に、アリストアフはきよんとしてしばらく思考を巡らせた。

「……それ聞いてニカノールの考えは変わるのか？」

色々と考えて、質問で返した。ニカノールはしばし考えたのち、

「……………いや。変わらないと思う」

静かに首を横に振った。

「オレは結界に入ることが出来る。恐らく火種を潰すことも……可能だ。先生やアリストアフさんの助けになりたい」

直後、ただ……、と小さく呟く。

「兄上とリーザは巻き込みたくない、……です」

うつむいてはいたが、目線は先に向いていた。彼の行動指針は兄の剣として彼を守ること、そしてまだ心身共に成長しきっていない妹も守ることであった。

アリストアフは彼に問うた。兄と妹を巻き込みたくない理由は何か、と。先の言葉は、ニカノールにとっては普遍的かつ形容しがたい心持ちである。太陽が東から昇るのは何故か？ と問われたようにどう答えようか迷う。

「……オレのブレードダッドの小紋章は、父上と母上、兄上とリーザを守るために主が特別に与え賜ったのだと思ってる」

「……ほう」

セイロス教の信徒ではないアリストアフは、話の切り口はともかく規模感の大きさに興味を持った。

「家名とは異なる紋章を持つ兄上が紋章断絶の不安を抱かないように、リーザが将来の選択肢を狭めないように、ブレードダッドの紋章持ちが生まれるまで子を成したのではないかと両親が要らぬ噂に苦しまないように——兄妹の中では一番凡庸なオレに力を

……つて、根拠も無い理由を想像してきました」

ここまで話して、上手くまとめられないので少し長くなるけどいいですか、と焦った様子で訊ねるニカノール。飄々とはしているが、相手の状況を慮る誠実さも確かに在るようだ。

こりやあ間違いなくお兄さんの影響、デスネ〜とアリス Staf は少し口元を上げた。そのお兄さんの誠実さは、きつと父君の影響だろうとも想像した。

アリス Staf は、四半刻ほどなら問題ないだろうと答えた。ミロスラヴたちがどこまで行ったか、選ぶのにどれくらい時間を掛けるか予想してのことだった。

ニカノールは静かに語り始めた。

………

オレが武芸の類を始めた頃、兄上は何でもできるように見えた。子供の頃に三年と半年も違えば、そう見えるのは当たり前だけど。オレは高い所が怖くて、馬上すらも怖くて、兄上と狩りに行く時は走るか、兄上の後ろでしがみついて目を瞑っていたよ。……兄上は、オレの憧れなんだ。ずっと。

ある日、理学の先生が泣きながら「ニカノール様は天才です」って褒めた。今思えば、兄上が唯一全くできない理学だから、相対的にオレができるように見えたんだと思うけれど、それを分かってなお、オレは理学を深めた。祈りを捧げた。劣等感の慰めだつ

たかもしれない。でも、間違いなく兄上を助ける力だと信じている。

話が逸れましたね。

……兄上が王道を征くなら、オレはそれを助けたい。兄上は父上と同じで、優しくて全部飲み込もうとして苦しむ人だ。なら、少しでもオレが吐き出す手助けを、優しきにつけ込む悪に裁きを、兄上の代わりにオレが祈り、魔を阻む……。

きつと、紋章が無ければ、家督狙いだとか擦り寄りだとか揶揄され、対抗してリーザに王位をと言いつつ傀儡にしようとする輩も出て来て、政争が起きたかもしれない。だが、オレが紋章を持っていれば、全て逆の現象が起きる。ブレードットの紋章を以てしても敵わぬほどの王の器を皆に見せつけられる。それが、オレの役割でもある。

だから、兄上には揺らぐことなく王道を歩いてほしい。オレたちが今知ったことは、きつと、優しい兄上を悩ませる。王とは、国とは、家族とは……それを全部背負い込んで飲み込んで進む兄上に、毒を差し出す訳にはいかないんだ。次代の王の剣として……！

……………

ここまで話した後、リーザについては異世界に来たばかりの純心な少女にする話ではない、とさりりと言つてのけた。彼の兄が弟を守つたように、彼もまた妹を守りたいのだろう。そこには理由が必要ない。

「次代の王の剣……。うん……。なるほどね」

彼の半生の告白ともとれる回答を飲み込んだ返事をして、紋章や王家の立場に苦しみながら道を決めたニカノールの強さを認めた。

アリスタフは魔石の魔法陣の展開を解除する。モーリスとブレーダッドの紋章が立ち消える。

「手伝うよ。二人が戦わず、知らずにいられるように」

知ってしまった痛みを共有する同志として、アリスタフはニカノールの手を取った。

「ありがとう」

「ただ、二人が頑固……。いや、話の理屈が合ったら、傾くかもしれない。あと、気付かれたら嘘は吐かないでおきたい。そこだけ承知願いたい」

了承を得たと思ったら、突然の裏切り宣言。ニカノールは一瞬ぼかんとしたが、この数刻で知り得たダヴィードという青年の性質を改めて認識すると、納得のいく言動だった。

「ああ、不条理が嫌い……。逆に言えば、理屈に適っていればそちらを好む……」

論理的な思考や理学的な知見を共通して持っているからこそ、ニカノールはアリスタフの立場の在り方を理解した。よく分かっているじゃないか、とアリスタフはにやりと笑って喜んだ。

「あと、優先順位を聞いておきたい。戦わせたくない？ 知らせたくない？」

「……どちらかと言うと後者かな」

「わかった」

不安げな表情を見せるニカノールに、アリスタフはただ優しく明るく頷いてみせた。

やがて、件のミロスラヴとエリザヴェータが装備を抱えて戻って来た。国王は、側用人を二人に引き合わせた時点でセイロス教大司教の補佐官に連れて行かれてしまったそうだ。執務室にある山積された書類を見るに、なるほどご多忙であることは容易に推測できる。

「少し古い型ではあるが、私が士官学校の頃に使っていた武器と同種のものがあった。ニカやアリスタフにも馴染むと思うよ」

よほど武具の選定が楽しかったのか、ミロスラヴは少年のように瞳をきらきらと輝かせて語る。確かに、良質かつ使いやすそうな武具がその腕の中にある。

「既にいた天馬のかわいい子を貸してくださいさるそうなのよ！ 嬉しい！」

エリザヴェータも感動を抑え切れぬ様子で伝えてくる。手には既に天馬の毛並みを揃える櫛が収められている。

「もしも戦うことがあれば、ね」

喜ぶ妹の感情に水を差したくないが、それでも譲れない気持ちをとめ息と共に伝えるミロスラヴ。恐らく天馬を借りる借りないあたりでも似たようなやり取りをしたのだろう。

「まあ、機動力がある分には喜ばしいだろう。哨戒、攪乱、一撃離脱……戦略に幅が広がる」

アリストーフはあくまで情報に対して客観的な意見を述べて、二人の間の戦う戦わないの雰囲気を作り裂く。

「だが」

逆接の言葉をはっきりと言い放つ。

「天馬に乗るとしても、楽しい散策しかできないぜ」

「……どういふことだい？」

明らかに訝しむ表情を見せるミロスラヴ。アリストーフは自分に視線を集めさせる。

「兄上の血のおかげで分かったんだよ」

ニカノールはアリストーフの蠟板を取り、彼に渡す。アリストーフは黙って頷いて、この場における結論を述べる。

「結界の解呪方法が判明したんだ。ミロスラヴの血に反応して、有識者が見ればすぐにも解ける術式が隠されていた。だから、結界の謎は解けた」

「ああ。だからブルトガングとアラドヴァルの力を借りて帰るか、一週間待つて帰してもらうかのどちらかになったんだ」

アリスタフの援護射撃と言わんばかりに二の句を告げるニカノール。これで、彼らに取れる選択肢は二項のどちらかであるように錯覚させる。

「……………」

ミロ斯拉ヴは武具を持つ腕の力を僅かに緩めた。考えをまとめることに集中し、アリスタフとニカノールをぼんやりと見つめている。

「私はただ楽しく武具集めをしただけになってしまったんだね……？」

表情を変えず、武具類を床に並べる。そして、執務室の椅子に腰掛け、残りの三人にも座るように促す。

「適材適所さ。結果としてそうだっただけで……」

魔道の類はオレの領分だからさ、と言いながらニカノールが座る。

「でもね」

アリスタフとニカノールは、知らせないことに留意するあまり、ある計算違いを起こしていた。

「モーリスによって困っている人がいるならば、協力しなければ。何よりモーリス自身が殺戮の衝動に苦しんでいるのだから、私は最後までやり遂げるよ」

一つは、ミロ斯拉ヴの役割と責任を果たさんとする意思、正義感。ニカノールが次代の王の剣としての役割を全うしようとしたように、その強さは計り知れないものだった。

ミロ斯拉ヴは剣帯からブルトガングを取り外し、机に置いた。

「それが、ブルトガングを携えた私が、奇しくも呼ばれた意味だと思う」

お前たちを巻き込んでしまったことは申し訳なく思うよ、と眉根を下げて悔しそうに呟いた。

解呪できると言ってしまった以上、結界に入れるかどうか分からない、という理屈は通らなくなった。

そして、もう一つ。

「ニカ兄様、アリストアフさん」

純粹ゆえに不純物を排除して物事を考え、寡聞ゆえに疑問が浮かび、勇敢ゆえに切り込んで行く少女の存在を、アリストアフとニカノールは過小評価しすぎたのだ。

「謎、というより違和感……いいえ、疑問があるわ。結界は『誰が何のために』張ったの？」

「はて。私はモーリスが身を守るために張ったものとはかり」

理学の畑には無知でも、可能性を当てはめて仮説を立て、現状考えるべき内容を突き

詰めるのがミロ斯拉ヴの思考法の一つ。解説できると分かった以上、モーリスに考えが集中していたミロ斯拉ヴは首を傾げる。

「オレもアリスタフさんも、結界を張ったのは何者かまでは分からなかったよ。魔力の個人複数人の特定は難しく、流石のオレたちでも無理だ」

半ば事実で、半ば虚偽であった。実際、魔力を逆探知して個人の特定をするのは理学を究めた者でもなければできないほどの難易度である。だが、予想はできる。できた。命令式や術式には、術者の特徴が浮かび上がるからだ。

「モーリスって、人を食べていたんじゃないの？　なのに、人避けの結界を張るのは違和感なのよね。そういうのは分からなかったのかしら？」

半ば無意識に次兄を煽るエリザヴェータ。ニカノールはどうしたものかと逡巡する。「目的なら分かるぞ」

火花散りかねん兄妹の視線の交差を絶つように、アリスタフが言い放った。

「命令式の中にあつた。正直、不必要とも思えるような位置に……『わたしの愛するものため』」

「わたしのあいするものため……」

きよとんとした様子でその命令式の文言を復唱するエリザヴェータ。

「神聖語の一人称はたった一つしかないから、便宜上『わたし』と訳しただけだからな？」

命令式の翻訳をしたニカノールは、「わたし」を女性だと思わせないために、真実から遠ざけるために付け加えた。

ここで、ニカノールが遠ざけるために使った発言を、絡め取って捕まえる指摘が飛んで来た。

「古代語ではなく神聖語なのか。結界は白魔法に近いんだね」

「……ツ！」

理学もとい魔法に疎い兄から指摘が飛んで来るとは思わず、ぴくりと身体を反応させてしまった。

遠ざけた手を絡め捕って引き戻し、その手を離さず目を合わせて尋問するかのようだ。無意識なのか、気付いていたのか。ミロスラヴは表情を変えないまま尋ねる。

「どういう式だったんだらう。教えてくれないか？」

「え、でも……」

理学から絡むから理解できないかもしれない、という意味と、命令式から隠したのも明らかにされてしまうかもしれない、という意味で、ニカノールは言い淀んでしまった。

「白魔法の命令式は式というより文だから幾分は耐性はあるよ。何より、私の血がどう影響を与えたか知りたいのだよ」

兄の爽やかな笑顔に負けたニカノールは、頷き、アリストーフに目線を向ける。

「全部……、覚えていますか」

つまり、全て書いてくださいという意味だった。蠟板を持っていたアリストーフは意を汲んで頷き、改めて命令式を列挙した。

「一、この『血』を知る者をお通しくください」

「一、この『紋章』を標としてください」

「一、人ならざるものを『幽閉』してください」

「一、私の愛するもののため」

ミロスラヴは命令式をしばらく見つめた後、弟を直視した。

「ニカ。私たちは今、異世界にいる」

「そうだが……」

「私の血に反応した結界の示す『血』と『紋章』、そして『愛するもの』……そこから予測できることは、私も受け止めることはできる」

「……………」

聡明な兄がいずれ答えに辿り着くことは分かっていたが、こんなにも早いとは思わ

なかった。

「異父兄弟、か……」

ミロスラヴが呟いた言葉に、ニカノールは目を丸くさせた。が、それより後の兄の行動に驚き、それどころではなくなった。

「ニカノールヴィチ、覚えておきなさい」

ミロスラヴは立ち上がって机上のブルトガングを手に取り、ニカノールの肩に添える。ニカノールの剣が手近にない代わりにブルトガングを使った騎士の叙勲のようだった。

「複雑な思いがしないわけではないが、そのくらいで私の剣は曇らないということを」

「……………はい」

嘘は吐いていないが隠し事をしていた後ろめたさ、見戯のようなものであれ兄が自分を剣として信頼してくれている喜びから、ニカノールは複雑な感情を抱く。複雑さを噛み潰すように、絞り出すように返事をした。

物語のようなやりとりに目を輝かせていたエリザヴェータは、ふと、ある疑問に辿り着く。

「ねえ、お兄様方。この世界のお母様が他の殿方と結ばれていたとしたら、その方は結界に入れるのかしら」

ニカノールは俯いたままで表情を見せない。アリスタフは、答えの近いところ的確に切り込んで来る妹君の鋭さに驚嘆した。ミロ斯拉ヴは、大切な妹に非情な情報を伝えてしまった事実に行き当たり、ひどく狼狽している。

「あたしだって、もう子どもじゃないわ。だから、もう、隠さずに教えて？」

少し寂しそうに微笑する彼女の表情は、確かに子どもものではなかった。誰かの悔悟を受け止める慈母のようなそれは、母マリアンヌを思い起こさせる。

「……すみません、アリスタフさん。例の約束は一旦忘れてください」

「うん、分かったよ」

兄と妹を思いやる心と、隠し事をする己と、その兄妹のあまりに鋭い指摘に、ニカノールは白旗を揚げた。ただし、兄と妹が際どい指摘できたのは、ニカノールが普段使わないうまい回しを用いたり、表情が暗かったり、ただならぬ雰囲気を感じたからだ。

ミロ斯拉ヴは意識的に、エリザヴェータは無意識的に、その荷を共に負わんとして論を重ねたのであった。

そして、アリスタフによって結界の詳細が語られた。

件の結界は二重結界であること、結界の中央に大元となる魔法があること、強大で強力な魔力の根源は紋章石であること。それは、二つ目の命令式が裏付けてくれた。

何故二重結界だと判明したのか。最初の命令式群は、ミロ斯拉ヴの血によって判明し

た。その後、モーリスの紋章以外の紋章の血を試したニカノールの血に反応して、もう一つの命令式群と、詳細な術式が現れた。冒頭の命令式は――

一、「先の命令に同じ」

「……だから結界は二重だと分かった。二重というよりは任意条件って感じの論理構成だから条件を破る方法はむしろ倍であってそこが脆さと言えばそうなんだけどセスリーンの紋章ならともかくブレードダッドの紋章の希少性を考えたら――」

「アリストーフ、アリストーフ。私は理学が絡むと途端に理解が追いつかなくなるのだが……」

重要部分を話し終えたため、アリストーフの舌が勝手に理学知識を語り始めてしまったところに、ミロ斯拉ヴが慌てて制止する。

「聞いていると、何だかまるで……件の謎には、モーリスの紋章だけではなく、ブレードダッドの紋章も鍵かのような言い方ではないか？」

「うん」

迷い不在の質問に、迷いなく、容赦なく頷いた。

その首肯の意味と、この世界の歴史を照らし合わせると、矛盾や疑問が湧き上がって

止まらない。ミロスラヴは困惑した表情のままである。

「……そもそも不可解だったんだ。俺たちが呼ばれた理由」

「そ、それは、お母様からモーリスの紋章の因子を継いでいるからでしょう？」

「うん。ではなぜ、お前たちだけじゃなくて俺も呼ばれたのか。俺だけじゃなくて三人も呼ばれたのか。そして一番の謎。なぜ、モーリスだけではなく、ブレードダッドの紋章に呼応する結界もあるのか」

沈黙した一行に、アリストアフは静かに、そして淡々と仮説を述べた。

「俺の考えはこうだ。『この世界』も、父上と母上が結ばれた世界』だから」

この場にいる全ての者に、役割がある。アリストアフはどうしてかそのような予感を抱いた。

「女神は、この世界の謎を解き明かす、最小にして最大人数を呼び出したんだと思う」

「……あたしは、女神様によるご都合かと思っていたわ……」

「リーザ、メツタなことを言うもんじゃないぜ」

「ニカも大概だぞ！ やめなさい！」

閑話休題。

この世界の歴史や争乱の状態は、概ね三兄妹の生まれ育った世界に共通している。故に、この世界でもグロンダーズの会戦が行われたことは共有されていた。

「ちよつと待つてくれ。それだと、父上はグロンダーズの会戦後もご存命だったことにならないか？」

「なる」

相変わらず迷いなく頷いて、黒く塗りつぶされた事実を明らかにして照らして行く。

「俺の考えが合っているという確証もないから可能性として捉えてくれ。……もし、王国軍の旗頭を攫ったのか保護したのか分からんが、どちらにせよ王国にも同盟にもその存在を伝えず、おおよそ彼だけが入ることのできる空間を提供した。——国だのなんだのは関係ない、ただの人として生きる場所を与えた、というのは紛うことなき仁愛だと、俺は思う」

「そして、モリスが生きているということは、母上はかつての呪縛から解き放たれていない。父上は全てを失っている。魔術を施されたか絆されたか記憶を失ったか分からないが、2人は互いに必要としあつて……、つまり、あの結界はグロンダーズの会戦を生き延びた2人とその家族のための空間、ということか？」

アリスタフは両親の具体的な過去や想いは知らない。ミロスラヴから付け加えられた情報を受け入れつつ、自分の考えと同じであることを伝えるために静かに頷く。

「言い方を変えれば、戦地で敵將を拐い、王国軍に悼むこともさせず、同盟軍としては戦線を離れ、2人だけで平和に暮らす……『悪魔の所業』とも言えるがな……」

己の心臓部分を押さえつつ、非難するでなく同情するでなく、見たこともない2人の暮らしを想像しながらアリスタフはひとりごちた。

「……悪魔——?」

アリスタフに共鳴するように、ミロスラヴは胸元を押さええて、彼は未だ知らない紋章に刻まれた意味を呟いた。

アクマ、と呼ばれた胸が苦しい。ミロスラヴはこの世界の両親へと想いを馳せる。

「結界を張ったのがこの世界の母上で、目的が彼女の家族を守るため、ならば……」

ミロスラヴは苦悶の表情を浮かべながら言葉を紡ぐ。その表情を見て、ニカノールはああやっぱり聞かせるべきではなかったと唇を噛む。

「ならば……?」 その後にはあらゆる言葉が続くだろうけど、あえて聞きたい。ミロスラヴ、ならば、何だ?」

厳しい口調でアリスタフが問う。

ダヴィード・ミロスラヴという人間の本质を見たいからだ。

「私たちの正義はどこに在れば良い？」

「……………」

アリストルフは目を伏せた。舌打ちをしなかった自分自身を褒めたいくらいである。

「結界を壊すことで、誰かが悲しむなんて……。それがこの世界の——、というのは抜きにしても、だ……」

心優しく、そして優しさを実行する強さのある人間は、葛藤に苦しむ。古今東西の歴史書にも物語にもあらゆる記録がある。異世界に来てまで苦しみを甘受する青年に、同情するやら呆れるやらでアリストルフは何も返さなかった。

何よりも、苦しむあまり本人が何も考えない道を選びそうなのが気に食わなかった。

「か、帰るため、だ」

頬の筋肉が引き攣ったために、やや上ずった声で嘯みながら、ニカノールが言い放つ。

アリストルフと結界の術式を分析して分かったことから、結界にはおよそ二つの紋章石が使われていることが推測できる。それがあれば国王の力が戻らなくても、あるいは無くても帰れるだろう、と。自分たちで帰る力を取り戻すのは十分な大義だと主張した。

「お兄様。モーリスの存在がスッポリ抜けてしまっているわよ。苦しむご先祖様を救わ

なきや！」

あくまで自分の手で始末をつけたいと申し出たのはモリスの存在があったからだ。もつとも、このような真実が隠れているとは思ひもしなかつたが。

「ああ……、そうか。結界を張る以上はモリスも……」

苦しみを終わらせることもまた慈悲である。ミロ斯拉ヴは俯いて黙り込む。

「あとは、フォドラの発展のためだ」

ミロ斯拉ヴの状態をよそに、不機嫌な様子で吐き捨てるように言うのはアリスタフ。

「パルミラとの国交における交易路の要所に、魔獣入りの、いつ壊れるかも分からん空間なんて在っちゃいけねえ。——そもそも！ 助けて、つて言われたから助ける」

それでいいだろ、とぶつきらぼうに言う。

突如として不機嫌になった彼が何を求めているのか、ミロ斯拉ヴは何の気なしに思い当たった。二人は互いに魂の双子のような存在だからだろうか。

「……すまない。何だかんだ言つて、この世界の両親の存在に冷静さを欠いた」

ミロ斯拉ヴは一つ息を吐いた。次に顔を上げた時は、精悍な顔つきで目に濁りはなかった。

「我々の目的は結界の消滅であつて術者の打倒ではない。そして、私は他でもない、私の家族のために戦う……。それが、この世界の両親と刃を交えることに繋がるとしても、

私は譲らない」

これでどうだろう、とミロ斯拉ヴはアリスタフに笑顔を寄越す。アリスタフは当てつけかよ、と悪態を吐いたが、悪態と共に不満も発散させた。

「お前の信念はお前のために使うもんだ——決めたのなら手伝うまでだ。それがこつちの事情だから」

「事情とは君の信念のことかい？」

からかうように笑うと、アリスタフはぎろりとミロ斯拉ヴを睨み付けた。

「うるせー。具体的な話をしようぜ」

まるで子どものような反応、いつぞやのニカノールにもあつた反応に、ミロ斯拉ヴは苦笑しつつもそれを受け入れた。

一つ咳払いをし、問い掛ける。

「では、結界を消したい我々に対して、術者は行動してくるだろうか？」

問いに対して、挙手し発言するはニカノール。

「間違いなく何らかの接触はあると読む。モーリスの紋章石が結界内にある分には何もして来ないだろうけれど、結界の解呪なり大元の破壊となれば話は変わってくるだろう」

「もし戦闘になったら、個人的にやりづらいつらいということもあるけれど、何よりお強い、わ

よね」

「そうだね……」

仮想的に置いた敵ではなく、ほぼ確実に判明した敵だとすると、少なくとも三人は上手く立ち回れない可能性も出てくる。

「父上がグロンダーズでの戦いの傷が残っていない状態なら——」

そこまで言つて、自然災害とただ真つ正面から戦うような恐ろしさに、かの人の強さを知る者は戦慄する。

「……せめて、なぜ彼らが結界内で暮らしているのか分かれれば——」

蜘蛛の糸を手繰るように、戦わずに済む方法を考えるアリストフだが、とにかく情報が足りない。

結界の現れた時期は最近だと判明している以上、尚更謎は深まるばかりだ。

「最近になって作った、やつとできた、とかじゃないかしら？」

エリザヴェータは蠟板に記された「この血を知る者をお通しください」を指差す。

「子どもが生まれたから、か……？」

ニカノールがぼかんとしながらも言う。お二人の子煩悩っぷりはその身がよく知っている。子どものためなら何でもやりかねん二人、しかもグロンダーズの会戦を乗り切った二人だ。モーリスを使つて結界を張るくらいやりそうである。

「だとしたら、陛下に一筆頼んで、国で保護する体制を整えていただく……というのも交戦を回避することに繋がるかもしれないね」

「むしろそれが最適解な気さえするな、兄上」

光明が見えてきた面々は、国王を説得するための準備を始めることにした。

正解かどうか、正義がどこにあるか、それは誰も分からない。望む未来を拓くために足掻いて、その過程と結果がどうだったか、それをどう振り返るかしか、彼らにはできない。それしかできないが、その行為こそが——拓こうとする意志こそが尊いものだ。

「……」

アリスト Staf は話し合いの中で、そんなことを考えていた。

2—2 迷いを断つ刃は

やがて国王が会議を終えて戻って来ると、何か分かったことはあるか、自分にできることはないかと尋ねてきた。多忙な日々の中で、ここまで心を砕いてくれる国王の器の大きさに、ミロ斯拉ヴはただただ感謝した。

一行は、結界について判明した重要な事実をかい摘んで説明した。結界の術者とその目的を。無用な交戦を避けるために、どうかマリアンヌ卿とその家族にご容赦とお慈悲をと嘆願した。

彼らの願いと、結界による不利益、彼らが明らかにした情報とその褒賞、マリアンヌたちを保護する利益など、総合して国王は結論を下した。国王は「エドマンド家のマリアンヌとその家族を保護ならびに家族の存在を秘匿するためにできる限りのことをする」ことを承諾した。

彼女はエドマンド辺境伯のもとで教育を受けているという噂もあるため、辺境伯と連絡は取っているだろうとし、急ぎ辺境伯へ早馬を送った。

国王の寛大さに心打たれ、仕事の俊敏性に驚きつつも、一行は結界について他にも判明したこと、モーリス戦での情報、この段階で取れる戦法などを話した。どの世界でも

指揮官として並ぶものなしと称される「せんせい」に、戦略の幅を広げていただきたいからだ。

まず、結界について。アリストアフとニカノールの分析による仔細が伝えられた。

結界の仕組みは紋章石の力を借りた魔力循環型あること。結界は、魔法の次元にあたる拝石もしくは魔法陣、それぞれの紋章石の二つから成されていること。魔法が紋章石に介入し、その魔力で結界を展開、介入、維持を繰り返していること。

国王が見たとされる強力な魔力を帯びた魔獣はかつての十傑の仲間モーリスがブルトガングに取り込まれた姿であること。結界のうち一つは、魔獣モーリスの中の紋章石に作用し、その魔力を借用もとい奪っているために強力かつ半永久的に結界が形成されていること。

ここで重要なのは、モーリスの紋章石の力が結界に奪われていること、つまり、モーリスの力は本来よりも弱まっているということだ。結界に使われる魔力の概算、紋章石の力の概算から、生命力は通常の魔獣とさほど変わらないと試算されたことから、少数精鋭でもモーリスと戦える可能性が非常に高いことである。

もちろん、結界の解呪をしてから一軍を率いて攻め込むことも可能だが、結界の介入を受けないモーリスとその影響下に置かれた魔獣たちと戦うのと、モーリスを討った後で統率の取れない野生の魔獣たちを各個撃破するのでは被害が段違いだとアリスト

フは主張した。

また、結界はブレードダッドの紋章石を用いた結界と合わせて二重にかけられてはいるが、それぞれの中心は離れており、重なっている部分はそこまで広くないこと。件の家族はその部分で暮らしている可能性が高いこと。

ブレードダッドの紋章によって形成された結界は、モーリスのそれよりも範囲が狭い。恐らく、この世界のデイミトリが持つていたアラドヴァルが使われているだろうと予想されている。国王の証言から、ブレードダッド側には魔獣は居ない。恐らく、件の家族の住まいにモーリスの結界側から魔獣を寄せ付けないために形成されたもので、今回の作戦では解呪の有無も含めて優先度は低いことが示された。

次に、モーリスもとい彷徨えし獣について。モーリスを討伐した本人から話を聞いているミロスラヴが説明する。

彷徨えし獣の特徴については、四つに分けて説明できる。

一つ、頭部にブルトガングの鴈部分のような細く湾曲した角があり、体表面はブルトガングの刀身が鎧のように覆われていること。

二つ、彷徨えし獣は魔獣の攻撃によくあるブレスの類は使わず、後ろ脚で立ち上がり、前脚もとい豪腕を振るって攻撃をすること。腕で直接攻撃したり、地面を揺らして混乱を招いたり、近くの岩や木々を投げつけたり、人間の腕のように器用に使うそうだ。

三つ、生命力は魔獣の倍はあると見積もられたこと。さらにはブルトガングが魔剣であつた影響か、魔法装甲を備えており、障壁を崩さない限り魔法の類を受け付けなかつたこと。

ただし、三つ目については、結界の影響を受けていることから弱まっている、あるいは魔法装甲は無効になっている可能性も示唆された。

四つ、モーリスは長い間殺戮の衝動に苦しんでいたこと。解放王ネメシスが使つた天帝の剣を覚えており、それを見て安堵の念を唱えたこと、自身の子孫もといモーリスの紋章を持つ人間を判別した上で魔剣を託したことからそう結論付けられた。

以上、結界の仕組みと彷徨えし獣の情報を得た上で、国王は更に知りたい情報を彼らに尋ねた。

君たちは、戦えるのか、と。

これは二重の意味だった。そも戦力になるのか、そして、異世界のために力を尽くせるのか、と。

心を決めていた四人は頷いたが、ミロスラヴが客観的な力について補足する。

「個人の適性や能力には差がありますので、それについてはお話いたしましょう」

国王は一目見ると相手の強さが何となく分かるそうだが、本人たちの武器や特性については把握しきれておらず、ぜひ頼むと続きを促した。

「はい。我等三兄妹につきましては、不遜ではありませんが、最も強いのは私です。英雄の遺産である魔劍ブルトガングを持ちます。白黒問わず魔法が使えるのが次兄ニカノール。武器は剣や斧が使えます。末妹のエリザヴェータは実戦こそ先程の聖墓での戦いのみですが、天馬の扱いに心得があり、アラドヴアルの後継者でもあります」

ミロスラヴが簡単な説明を終えると、国王は自然とアリスタフに目を配る。

「俺は……、巷で言うところの魔劍士というヤツです。けど、回復魔法はてんでダメで、基本的に剣や槍を使うことが多い……です」

珍しく、アリスタフが言い淀んでいる。自分のことを語るのが苦手なのか、何かを隠しているのか、一見すると分からない。

国王は暫く考え込み、先程武器の類を選んだかもしれないが、良ければ国と教会で管理している英雄の遺産を使つてはどうかと提案した。もちろん、紋章は一致しないし、同一紋章のモーリスが吞まれた話をした後で言うのも気が引けるが、力ある武器に変わりはない、と。

「オレは遠慮させていただきませう」

ニカノールははつきりと述べた。遺産の負の面を恐れたのではなく、魔法を使う役割を全うするためである。

そもそも魔法を用いる兵種が護身のために武器を持つことはあっても、武器を用いる

兵種が魔法を使えないのは、それだけ魔法を展開するのに時間や労力が掛かるからである。

魔法陣を展開し、魔力を注入し、暴発を防ぎ、確実に敵陣に人知を超えた力を放つ。それは、武器を持ったまま、集中できないまま、時間に追われながら、その他多くの理由で、片手間の魔法は完璧ではないのだ。剣を握ったとて、雑念があつては真つ直ぐ切ることができないことに通じている。

ニカノールの言葉に、国王はむしろよろしく頼むと頷いた。そしてやはり、アリスタフに目線が行く。

「……………」

アリスタフは暫く黙っていた。国王は、教会管轄の英雄の遺産には、剣はないが槍はルーンと呼ばれるものがあると付け加えた。

「ダフネルの紋章……。イングリット様の……………」

エリザヴェエータが小さく呟く。勇ましく空駆け、魔槍を振るう聖天馬騎士の物語は、全ての天馬騎士の憧れである。

ダフネルの名を聞いて、アリスタフは唇を噛んだ。

「……………ッ！」

アリスタフは迷いを振り払うようにかぶりを振り、意を決してお茶会携行品からある

ものを取り出した。

長細い、牛革に包まれた何か。

アリストーフはそれを紐解く。

そこに在ったのは、ある部分を除いてミロスラヴが持つブルトガングと瓜二つの剣——アリストーフの世界のブルトガングであった。

ミロスラヴのものと違う点——そのブルトガングは、紋章石があるはずの部分にぽっかりと空間があつた。

「……母上が亡くなった——殺された時、紋章石だけ奪われたんだ」
背を向け俯くアリストーフの表情は、誰にも見えない。

「王都が陥落し、王家所有の英雄の遺産は帝国預かりになった……」
アリストーフはブルトガングを手に取り、その刀身に顔を近付ける。どこか愛おしそうに。

「母上の形見であり、父上が取り返したかったものの一つ……俺が人生を懸けて、手に入れたかったものだ。俺にはこれがあり、これしかない」

「……差し出がましいようだが、紋章石が無い英雄の遺産は、ただのなまくらだと聞か
が」

怖ず怖ずとしたミロ斯拉ヴの指摘に、くるりと振り返ってアリスタフはいたずらに笑った。

「うん。正しくは、紋章石を返してもらうことが人生の目標だったんだけど……」

アリスタフは少し寂しそうに笑い、空のブルトガングを掲げ、握りこんだ。

紋章石があるべき部分は空洞のまま、ブルトガングは赤く柔らかな光を放った。

驚く面々に、アリスタフは悲しみを湛えたり顔で言ってみせた。

「詳しくは省くが、『せんせい』とだいたい同じさ」

国王はなるほど、と納得している。

一方、国王の事情もよく知らない三兄妹は、目の前の摩訶不思議な現象に驚いたままである。

「俺も詳しくは知らないんだが、いつの間にか紋章石が俺の心臓付近にあって……それが反応してくれるみたいだ」

「いやいやいや………空間転移の類にしても、そんな技術が………」

ニカノールは身体を暴いて紋章石を入れた可能性を排除しても、白魔法の限界や教義に背かぬ事象に、全力で理解を拒否している。

「理屈や過程はともあれ、事実、ブルトガングは力を発揮してくれる。ですので、国王陛下。俺もわざわざ紋章不一致の英雄の遺産を借りる必要はありませんよ」

「アリストーフの言葉、何よりも目の前で光を放つ英雄の遺産を見て、戦力として申し分ないと判断した国王は、よろしく、とだけ言った。

「紋章不一致？ ……アリストーフさんが持つているのは、ブレーダットの紋章じゃないの？」

エリザヴェータは、アリストーフの発言に疑問を呈する。聖墓での戦いで見せたアラドヴァルの「無惨」。あれは、ブレーダットの紋章を持たねば使えない力のはずである。

「……」

どう答えたものか、アリストーフはしばし黙る。

「あつ、分かったぞ。魔道具、だろう？」

沈黙に耐えかねたニカノールが訊ねるも、首を横に振られてしまう。

再び、しばしの沈黙。次にそれを破ったのはミロスラヴだった。

「君の『血』はブレーダットの紋章を持ち、心臓付近のモーリスの紋章石がモーリスの紋章を与えている……とりあえずこれで納得してもいいかな？」

優しく、論ずようにミロスラヴが言う。そもそも紋章石が体内にあることすら納得できないニカノールは地団駄を踏んでいるが、兄に倣いここは事態を飲み込むことにした。

「……ありがとう」

アリストタフは、頷くと共に小さく礼を言った。

こうして、四人は戦力として認められた。国王は予定してあったデアドラ慰問の日程を前倒しにして、慰問と作戦実行を同時期に進めることにした。

前倒すための仕事の調整、実際の日程などを鑑みて、出立は三日後の朝方と決まった。出立までの間、一行は修道院の仕事を手伝ったり、剣術槍術や魔法の訓練をしたり、各自のできることを積み重ねた。全ては、助けを求めるもののために。自分たちの世界に、自分たちの力で帰るために。

秋嵐立ち込めて、夢現。

3—1 デアドラの街にて

一行は国王率いる作戦部隊と共に大修道院を出立し、数日後の昼前に旧同盟領の都市デアドラへ足を踏み入れた。

国王のデアドラ慰問、部隊の兵士たちの士気向上のために、本日はデアドラに留まり、翌日に件の森へ向かう手筈となった。

兵士たちはデアドラの街に隣接する野営地にて宿泊、国王周辺の人員とダヴィードたちはデアドラ領主の客用宿泊施設にお邪魔することになった。

野営地を好むニカノールは兵士たちと共にいたいと要望を唱えてみたが、儂くも兄の笑顔にかき消されてしまった。

「確かにもつたいないくらいの手厚い歓待だが、それは私たちが国賓扱いだからだ。権利を行使しないことは、義務を履行しないことに等しい。つまり、礼を失するようなことはしてはいけない」

なおも引き下がろうとしたニカノールに、ミロスラヴは釘を刺す。寝床があるだけでもありがたいのに、壁と天井があり、夜警まで付けてくれるほどの優待っぷりである。

清貧を好むファーガスの王子たちとほぼ平民出のアリスタフは正直なところ、戸惑っていた。

「お兄様、あたしたちのお部屋はあちらとその向かいですって」

「ありがとう。行こうか」

割り振られた部屋を聞いてきたリーザが道案内をする。海が見える方と街が見える方とで分かれるわね、とリーザは楽しそうにしている。

「……？」

部屋を覗くと、客用の立派な寝台が二つずつ。部屋は二つ。一行は四人。簡単な数合わせに、アリスタフは首を傾げる。

アリスタフはミロ斯拉ヴに視線を配る。ミロ斯拉ヴはハツとして、その瞬間からあらゆる手あらゆる可能性を巡らせた。

「ニカ」

要求を蹴った時以上の笑顔に向けて、ニカノールの肩に手を置く。

「兄上？」

得体の知れない何かを感じ取り、じりじりと後ずさるニカノール。

「兵士の皆さんと交流してきなさい。ただし、くれぐれも身分は明かさなないように。そして、朝一番に戻って来てほしい」

「えっ嬉しいけど何で……」

「頼む」

有無を言わせぬ気迫に、ニカノールはただただ頷くしかなかった。

ミロ斯拉ヴが部屋割りを考えに考えた結果である。いくら兄妹とはいえ王侯貴族にあたる自分たちが男女で一晩明かす訳にはいかず、アリストアフと同じはもつてのほかかといって立派な寝台を動かそうにも手間が掛かる上、見つかったら間が悪い。そうは言ってもこれ以上部屋をくださいと頼むのも、他に宿を取るのも、先程自らが述べた礼を失するに値しそうだった。

そこで「うちの弟は野営が好きなんです。すみません」を伝えれば、全て丸く収まる。心配ではあるが、ニカノールの要望も叶えてやれる。アリストアフが床や椅子で眠れると豪語していたが、明日に備えて休養は摂るべきである。

要するに、ミロ斯拉ヴも焦って混乱していたのだ。そんなこんなで、一行の部屋割りは無事決まったのであった。

デアドラの到着は昼頃で、一行は領主に挨拶をした後、デアドラの街に繰り出した。子ども頃の頃の一時期、エドモンド領の中心部で暮らしていたアリストアフは、デアドラの街にも親しかった。

「俺が暮らし始める二年前の時間軸だから、あるとは思うけど……」

時空が異なる世界でも、同じ店が見つかるかどうか、アリストーフは懸念していた。

「キジの揚げ焼きデアドラ風って、大修道院の食堂でも出て来ると思うんだけどさ、本場の味はもつと美味いんだよ！」

曰く、揚げ焼き料理は肉に乾酪（チーズ）を挟むのが定番だが、その店は乾酪に加えてパルミラから流通する香辛料を用いており、揚げ油と肉の脂が乾酪に絡んで旨味を出し、そこに香辛料の刺激と風味が口いっぱいに広がるそのお味たるや、デアドラの名を冠する名物料理に相応しいとのこと。

アリストーフの熱弁を聞いた兄妹たちも、どんなものかと気になってそわそわとし始める。店は雰囲気は違えども無事に存在した。一行は名物料理を注文し、楽しく食事を共にした。

「——やっぱし、結界が交易路に掛かっちゃってるからかな……」

アリストーフが熱弁した乾酪と香辛料の組み合わせは、流通路の関係で現在品切れ。代わりに香りの強い香草が混ぜ込まれていた。それはそれで爽やかな風味がして美味しいが、知っている味を紹介できずにアリストーフは少し落ち込む。

「まあまあ。これからその元凶を叩くと思えば鬪志が湧くじゃないか」

「この香草……ファーガスの名産の……。うん、よく馴染んでいて美味しいぜ」

「あらっ。そう言えば、温室でドウドゥーが香草の一面を作っていたわね。それと同種

のやつかしら？」

「たぶんな」

「今度作つてもらいましょ」

「おう」

比べるもののない下の兄弟たちは、純粹に味の感想と料理の得意な父の従者の姿を思ひ浮かべてほのぼのしていた。

「……香草も美味いことを知つた、それは喜ばしい。でもあの刺激が恋しい……」

アリスト Staf を元氣付けつつ、何気ないおしゃべりをして昼の時間を過ぎす一行。一部の裝飾品を除いて一般のそれを身に着けている彼らは、若い旅人たちが道の途中で立ち寄つただけに見える。

士官学校での食事やお忍びで城下町に行くことで庶民の味や暮らしぶりを経験している、とは言つても、彼らの肩書きは変えられない。王族であることを認知されてもされていなくても、形容しがたく走る緊張感はどこへ行つても拭うことはできなかつた。だが、今ここにいる彼らはただの若者だつた。

昼食を終え、デアドラの街でも武器の類を見たいミロ斯拉ヴと裝飾品の類を見て回りたいエリザヴェータとで意見が割れたが、分かれればよくない？というニカノールの冷静な指摘によつて、一行は国王の招集を受けている夕暮れまで二手に分かれることに

なった。

異世界かつ十数年前とはいえ町並みはそこまで変わらないことから、訪問経験のあるミロスラヴはニカノールと武具の店へと足早に去って行った。

一方、初めて見るデアドラ市街の露店街を、きらきらした瞳で見渡すのはエリザヴェータ。エドモンド領への道すがら訪れたことはあっても、馬車からあまり離れられず、王族扱いもされている状態で、露店など見て回ることなどできなかったのだ。

「市民が買う食材、旅行者向けの調理品、土産品、武器や呪いのお店も少しあるのね……そして……流通路の交差点ならではの、多文化な装飾品たち！ 素敵ね！ 一日中見ていられそうだわ！」

露店に並ぶは、只今エリザヴェータが述べた通りの物品である。旧レスター諸侯同盟の盟主リーガン家お抱えの領都デアドラは、同盟の文化の中心地、そしてフォドラ内外の文化の交流地点でもある。ここに集まるは物だけではなく、それに伴う人、金、情報などなど、多岐に亘るのである。

中でもエリザヴェータは装飾品に目を輝かせている。あちらこちらと見て回り、耳飾りや首飾り、指輪、髪飾り……とどんなものにも飛びついた。

ある指輪に対し、少し古い意匠だけど味があつていいわね、の一言に、流行最先端の品だよお嬢ちゃんと商人は苦笑いしていた。

「紋章意匠芸術はまだ栄えるには早い、か。特にセイロス教が覇権を持つ世界だと……」
装飾品の中に聖セイロスの紋章が彫り込まれた指輪を見て、アリスタフは何となしに
呟いた。

「紋章意匠？　なあに、それ」

「ええと。ちよつと歩きながら話すよ」

立ち止まって露天商らに聞かれては、この世界の美術史を改ざんしかねない。と、
も言われぬ不安感から、アリスタフは露店街を抜けつつ話し始めた。

アリスタフの世界では、紋章主義や貴族主義は崩壊し、また、魔道具の発明により紋
章は身近な存在となっている。

そこで登場した流行が「各紋章に意味や暗示を与えた紋章意匠芸術」である。

そもそもこの流行は、血に由来する同種の紋章持ち同士はどことなく似た性格性質を
帯びているのではないか、という仮説が一因となっている。仮説は立証こそされていない
いが、任意の紋章を身に纏う気軽さが後押しし、占いや民間止まりのお呪いに普及。そ
して現在は、紋章に与えられた意味などを身に着けたり、贈り物に込めたり、装飾品の
意匠に用いたり、芸術分野にも影響を与えている、とのことだ。

あくまで紋章の重要性が薄くなった世界だからできて、紋章が主より授か
りしものと捉えられている世界では恐れ多くてなかなか流行らないだろうと述べた。

実際、アリスト Staf の世界の流行も、セイロス教への信仰心が比較的根強かった頃の影響力は弱かったらしい。最初は四聖人の紋章が比較的受け入れやすかったため、そこから間口が広がった、と聞いている。

「聖セスリーンの紋章持ちが比較的多くて、与えられた意味が『恋』とかそういう若い連中が好きそうな内容で——」

ここまで話して、アレこれは異世界の人間のエリザヴェータに話しても大丈夫だろうか？と首を捻るアリスト Staf だったが、楽しそうに聴く彼女の笑顔を見無駄にするのは野暮だよな、と訊かれたことには答えることにした。

「素敵ね。人が、自分の目標に向かってガンバローって気持ちとか、相手へ想う心を紋章に委ねた、って感じかしら？」

「おー、そうそう。今はそういう感じで使われているかな」

「花言葉みたいなものかしら。……うーん、でも確かに、ブレードットの紋章を持つあたしが、たとえばセイロス様の紋章を身に纏うのは畏れ多いわね」

逆に、王家たるブレードット家の象徴とも言える紋章をいそれと身に着ける人間もなかなかいないだろう。

つと、エリザヴェータがブレードットの紋章にはどんな意味があるのか訊ねた。

「ああ。聞いて驚け……『力』なんだぜ」

アリストタフの期待通り、エリザヴェータは頭を抱えた。

「そのまんまじゃない！」

「ハツハツハツ。もちろん、物理的な力という意味もあるけど、何かを為し遂げようとする強さっていう意味合いの方が強いから安心してくれよ」

二人は露店街を抜け、海を臨む湾港近くに来ていた。丁度、日傘を備えた机と椅子のある茶屋があつたため、海を見ながら話を続けることになった。

「じゃあ、お母様やお兄様の、モーリスの紋章はどうかしら？」

「おう。こつちだとまだまだモーリスの名前は普及していなくて獣の紋章って呼ばれがちだけど……そのせいもあってか意味は「悪魔」で総称されているかな」

モーリスの名前が未だ獣扱いなのは心が痛むが、エリザヴェータは耳慣れぬ単語に首を傾げる。

「そう言えば、あの時は聞きそびれてしまったんだけど『アクマ』って何かしら？」

アリストタフは目を丸くする。そう言えば、この世界の両親の行いを「悪魔の所業」と言った時、異世界とはいえ二人を貶すな！ などと非難されると思いきや、流されてしまっていた。悪魔、についての言及はセイロス教の教典の中にもないのだろう。アリストタフ自身、紋章に割り振られた意味を読み解く中で、民間伝承などから単語を拾ったに過ぎない。

「……概念みたいなものなだけども、分かりやすく言うと『邪なるもの』『人を悪い方向へ導くもの』……かな？ ある地域の伝承では、神を否定するもの、とかなんとか……」

アリストフは獣の紋章に与えられてしまった意味、伝承を伝える。それを聞いたエリザヴェータは口をへの字に曲げてわなわなと震えている。どうした、と思わず声を掛ける。

「異世界とはいえ……ッ、お母様やお兄様、アリストフさんの紋章が悪く言われているのは……ッ、どこに怒りをぶつけていいのか分からないわ……！」

家族想いでお人好しの少女は、眉睡な迷信で形作られた風評に共に怒ってくれる。アリストフは一周回って笑ってしまった。

「何で笑うのよお！」

「ハハハッ。いやいや、色々言いたいことはあるんだけど、兄妹揃って良いヤツらばっかだなと思って」

笑ってしまった非礼を詫げる代わりに、アリストフは少女の嘆きを失わせる情報を伝える。

——意匠芸術の話は続きがある。占いや装飾に使われるようになると、意味に幅を持たせたくなる。そこで、紋章を逆向きにすることで、逆あるいは異なる方向へ意味が変

わるようになる、としたのが最近の主流である。

アクマの意味するところは「欲望、誘惑、拘束、停滞」など。だから逆転すると「打開、覚醒、原点、…」などの意味を持つのだ。

「だから、悪い意味だけじゃないんだ。それに、物事には均整が必要だから、悪い役も必要だし。あと……、モーリスの紋章自体が珍しいからあんまり不吉な目で見られないんだよ」

「そうなの？」

「おう。人によつては『邪なる力を借りてでも為し遂げたいことがある……！』つてモーリスの紋章を身に着ける人もいるぜ」

「何事も受け取り方次第、つてことかしら」

アリストタフは頷き、エリザヴェータは聡いな、と教師のように褒めてみせる。その笑みは、どこことなく両親のどちらにも似ていた。両親のどちらにも褒められたような気がして、そしてアリストタフに褒められたことで、エリザヴェータは頬を少し染める。

目の前の少女の心持ちはさて置いてしまつて、アリストタフはあつ、と声を上げる。

「悪い、内容が内容だから露店街から離れちまつたんだが。戻るか？」

露店街を見て回る、というもともとの目的が達成できていないことに気付いたアリストタフは、急いで席を立とうとする。エリザヴェータはそれを制止した。

「ううん。おもしろいお話を伺えて良かったわ。それを聞いた後だと、どうしても紋章意匠の何かが欲しくなってしまうそうなもの」

もとの世界に戻る時に置いていかなくてはならないため、そもそも買物目的ではなかった。好奇心を満たすために歩いたのだから、エリザヴェータは満足だった。

「それよりも、今聴いたお話を書き留めたいわ。それで、早めにお屋敷に戻ってみんなを待つのも悪くないかなあ、って」

「それもそうだな！　じゃあ、屋敷で俺の知る範囲での意味を教えるよ」

「ありがとう、アリスタフさん！」

エリザヴェータは快活に笑い、アリスタフと共に領主の館への帰途を進むことにした。

向けられた笑顔を反芻し、アリスタフは何やら懐かしい気持ちがしていた。

「なあ。エリザヴェータはどちらかと言うと母君似……でいいよな？」

「え？　そうね、同性だし髪の色も同じだし、お母様に似てるってよく言われるわ」

大好きな母に似ていると言われる誇らしきから、微笑みを絶やさずにいる。そんな笑顔、アリスタフはじっと観察している。

「そっか。母上が笑うとそんな感じなのか」

「アリスタフさん……」

少し寂しそうに笑って、もう会えぬ母の面影を追う青年に、同情の気持ちが出れる。「あ、でも母上ってお淑やかな方だって聞くからちよつと違うか」

寂しそうな表情を見せたと思ったら、からつと笑って茶化してみせるアリストルフに、エリザヴェエータは頬を膨らませる。

「ちよつと！ お祖父様もお母様の少女時代を思い出すつておつしやるわよ。それに——……ふふつ」

脈略なく笑うエリザヴェエータに、アリストルフは何か思い出したのか、とつられて笑いながら問いかける。

「うふふ。ええ。お父様とお母様はね、とっても仲良しなんだけど、ごくたまに夫婦喧嘩をなさるのね」

「吟遊詩人に糧を与えて二十幾年……なのになの？」

いつかニカノールが言っていた夫婦の仲の良さを表す詩人たちの言葉を復唱すると、エリザヴェエータは頷いた。

「あたしが髪を初めて二つ縛りにした日のこと、お父様があたしを見て『マリアンヌがその髪型をするならそんな感じなのか……』って仰つたの。二つ縛りはね、お母様のご親友の髪型と同じで、お母様は纏め髪が多かったから、お父様からしたら新鮮だったんでしょうね」

くすくすと笑うエリザヴェータに、その後続く母君の行動が気になって仕方ないアリスタフは続きを急かす。

「子どものあたしたちには分からなかったんだけど、お母様は拗ねちゃったらしくてね。お父様と二人になった時に『リーザは確かに可愛らしい愛娘です。でも、私には無理だったんです……!』って言ったらしいの。お母様は昔、引つ込み思案な性格だったらしいから、派手な髪型は出来なかったんでしようね。上手く言えないけれど、お父様の期待に添えなかつたこと、これからも添えないことが悔しくて、ちよつと拗ねちゃつたみたい。ふふ。侍女から聞いたの。お母様の乙女な部分が見られて良かったわ」

目の前の少女からは、彼女を包む家族への愛が溢れて見える。アリスタフは微笑ましい気持ちができる一方、話の中の母親の心中を探りきれないでいた。

「乙女心は分かんないなあ……。要するに、父君も母君も、エリザヴェータが可愛いことで空回っちゃつたんだな?」

「か、かわつ……あたし?」

予想外の地点から褒め言葉が飛んできて、エリザヴェータは動揺を見せる。それに氣付いているのかいないのか、アリスタフは自分の推察を述べていく。

「父君は可愛い娘の中に愛する妻の少女時代を思い浮かべてしまい……、母君は可愛い娘の中に自分はいないんだよ、というか何だその妄想は……って照れちゃつたのかな?」

て

場面を想像し、考え得る両人の考え。エリザヴェータが感じたよりも的確な言葉が場面を捉えている。

「アリスタフさん……」

「え、なに？」

「誰よりも乙女心が分かって、誰よりも鈍いのね……」

褒め言葉が向けられていなかった肩透かし感から、エリザヴェータは低い声で言う。

「俺？」

「ええ」

「ええ……」

褒められたんだか貶されたんだかよく分からないままに、ただただ異世界の両親の微笑ましい話題を得るに留まるアリスタフであった。

3—2 嵐を孕む外伝 〔蒼月2 & amp ; 紅花0. 5〕

夕刻に再集結した一行は、国王と作戦前夜の打ち合わせを行った。アリストアフの提唱した戦略を採ることになった。結界がモーリスの紋章石から力を奪っている間に少数精鋭で撃破、その後、結界を解呪もしくは破壊し、控えの作戦部隊が残る魔獣を一掃する手筈となった。基本的にアリストアフとミロ斯拉ヴが前衛、ニカノールは中衛で回復や援護、エリザヴェータは上空から周囲の警戒や牽制を行う。国王は後衛に控えるようにと、ミロ斯拉ヴがその陣容を推した。国王陛下自らが手を下すのは流石に畏れ多いので、同じ王族だからこそ、ミロ斯拉ヴは頑として譲らなかつた。

夕餉を馳走になった後、ニカノールが「オレ ヤエイチ イク」、ミロ斯拉ヴが「コラ カツテナコト スルナ」と噴飯ものの茶番劇を繰り広げ、作戦通り領主に非礼を詫びていた。アリストアフは先に客室へ向かい、そのやり取りを思い返しては寝具を叩いて大笑いしていたとかなんとか……。

さて、同室のミロ斯拉ヴ戻ってきたところでアリストアフは正気を取り戻しかけたが、やはりあの棒読みの演技は駄目だろう、と笑いの渦に吞まれていった。

「仕方ないだろう。何だかんだ言つて、僕も二カも嘘を吐くのが苦手なんだよ」

いつまでも笑われて流石に羞恥心を煽られたのか、顔を紅くしてミロスラヴは口を尖らせる。

真面目な王子様の意外な表情が窺えて、アリスタフは別の意味でにやにやした。

ひとしきり笑つた後、急に真面目な顔をしてアリスタフは切り出す。

「なあ……、聞かぬーの？」

「何を？」

「……………」

アリスタフは黙り込んだまま、何か思いつめたような顔で考え込んでいた。どこにも遣れない気持ちを持って余した様子の彼に、ミロスラヴは明るい声を掛ける。

「そりゃあ、君に聞きたいことなんて、それこそ尽きぬほどあるさ」

「そうなの？」

「その中でも君が『聞かれない』ことは、こつちで勝手に理由を作り上げて納得した訳だけど……本当のこと、当てようか？」

しばしの沈黙を肯定と捉え、では前置きから、と言つてからミロスラヴは語り始めた。「学生時代に我々がガルグⅡマクで会つた時からね、不思議だつたんだ。紋章を宿していることは分かるし、諸々突き詰めて考えたら異界の両親の子だつて分かつたから。で

もー僕と同じ紋章も、父上たちと同じ紋章の雰囲気も、どちらも感じたから。とても不思議だった」

懐かしい思い出話に、二人はその時のことを思い出していた。暖かくて、不思議な気持ちにする。一方、紋章について、そこまで観察されていたことに、アリストーフは内心驚いていた。

「そして、先日の聖墓での戦いの時。ブルトガングが僕の魔力以上の力を発揮したのは、単に相手の魔防が低かったからではない。君の紋章の力も作用していたんじゃないかな」

冷静になって思い返してみれば、自分の魔力量だけでゴーレム兵の装甲に攻撃以上の切り口ができるとは考えにくい状況ではあった。

「それについては……分からない」

常に冷静に思考し、自分についての余計な情報を落とさないように発言しているはずのアリストーフが、無自覚なのか実質答えのような発言をしたことに、心許された気持ちと意外な面が見られて嬉しい気持ちとがして、ミロスラヴは微笑する。

「話が飛ぶが、かの女帝エーデルガルトの紋章石改造武器には、モリスの紋章石が使われていたらしい。同じ紋様の紋章石は複数あるとされているから、特段驚くような話ではない。だが、君の世界の母上は『先生』が目覚めるよりも前に戦死されていて、君の

世界のブルトガングには紋章石が無い。恐らく、その紋章石は女帝の武器に使われた後、次代を担う期待から――」

ゆうるりと人差し指を宙で廻らせた後、その指でアリスタフの心臓部分を指し示した。

「魔術か何かで移動されー今は君の胸の中に在る。比喻じゃなくてね」

「だから、君の『血』はもともとブレードダッドの小紋章を、君の『肉体』は新たにモーリスの大紋章を持つている。ーどうだろう、私の妄想は」

先日述べた内容と帰着点が同じであった。それについては、語彙が無くてすまないねと苦笑していた。

「……今すぐ王子を辞めて寓話作家か吟遊詩人を目指した方がいいな」

半分本気、半分冗談でアリスタフは呟く。それほどに、分かり易く、優しい言葉たちだった。ミロ斯拉ヴは笑って誤魔化す。

「いやいや。このくらい詩吟は、王侯貴族としての嗜みの一つだよ。私は次代の王だから詩人では役不足かな」

もちろん人々の日々に癒しをもたらす吟遊詩人たちの生業を卑下している訳ではない。彼は、次期国王としての自覚がしかと芽生えているのだ。詩吟で暮らそうという気持ちにはならない。

「えー……、ホラ、兼業してさ、お忍びで城下に出て腕前披露くらいならできるだろ？」
「なるほど、その手があったか」

思わぬ提案に、膝を鳴らす。2人はしばらく無言で次の言葉を探していたが、

「……くくく」

アリストアフが腹の底から湧き上がる感情を抑えきれなくなり、笑みを洩らした。

「ふ、あはは！」

それにつられて、ミロスラヴも声を出して笑った。

「ハハハ！」

「あはは！」

しばし2人で腹がよじれるほどに笑ったが、ふと平静を取り戻したミロスラヴが、笑みを湛えたまま言う。

「君がどんな紋章をどんな経緯で持っていようと、いくつ持っていていても全く持っていないくても、君は君だ。それは自分が一番分かっているだろう？」

アリストアフは頷く。首肯を受けて、ミロスラヴもまた頷いた。

「僕も同じ気持ちだ。共通点があろうとなかろうと、君は仲間だよ。それに、君と話すのは楽しい」

「うん。俺も」

「もう迷いはないかい？ 信頼しているからこそ、万全の態勢で臨んでほしいからね」
「迷い……ね。無い。ミロスラヴ、お前はすげーヤツだよ」

たった一つの質問から、心の中の後ろ暗い部分を見つけ、相手に何も語らせずして、陰を照らした。あり得ないとされる二重紋章、セイロス教では激しく禁じられているという身体の暴露。それらを踏まえてなおも仲間だと臆面なく言つてのける純真な強さ。その強い光は、今後どれだけの人を救うだろう。

それらを可能にする洞察力と話術、いわゆる「カリスマ」と呼ばれる能力に類する能力は、自分とは比べ物になりそうもなかった。

「……買い被りだよ。誰にでも苦手なことがあるように、誰にでも得意なことだってあるものさ」

「理学とか？」

アリストタフが得意で、ミロスラヴが苦手なことの名をいたずらっぽく笑って提示する。ミロスラヴは苦笑した。

「やめてくれ。足し算からダメになってしまう」

そんなこんなで柔らかない雰囲気のまま、もう少し話そう、ということになり、二人はお茶を淹れることにした。

しかし、茶葉の類を持っていないミロスラヴは厨房から分けてもらうか思案していた

が、アリストアフがお茶会携行品入れの中から大量に余っている茶葉の一部を押し付けた。

「これはこれは……、不思議な匂いがするね」

いい香りだ、と茶袋をくんくんと嗅ぐ。聞けば、ラヴアンドラティーとカミツレの茶葉の香りを、互いに存在で打ち消さない程度に調合した品らしい。うっかり大量に買い付けてしまったそうだ。

「好きそうな匂いだと思って。多めにやる。もとの世界に帰る時に返してくればいよ」

「うん。ありがとう」

紅茶を淹れるのが好きだというミロスラヴは、椀やお湯やらを準備して、作戦前夜のダヴィードたちのお茶会が始まった。

剣術、馬術、話術、交渉術……彼らの共通の話題は尽きなかったが、ここで、ミロスラヴが互いの世界の話を口にし始めた。

「君の来た世界では、ガルグllマク大修道院は帝国の手に落ちた後、その後も帝国軍が駐屯していたんだよね？」

「ああ。修道院を奪われた教団は王国に身を寄せ、国教がセイロス教のファーガス神聖王国もそれを受け入れた、って……」

「なるほど。レア様を匿ったからこそ、国家転覆を狙った者どもが動けず、そのまま国王に即位なされたのか」

「……え？」

そちらの世界ではファールガスで政変でもあったのか、という視線を向ける。しかしデIMITRI王は即位して目の前の王子はしかと存在している……混乱の表情を見せるアリスタフに、ミロスラヴは彼の世界での歴史を語った。帝国による大司教の身柄確保、公国による反乱、処断から逃れた王子デIMITRIの所業、道を見失った王子と仲間たち、ファルダリウス公の死……そして帝国を倒すまでの話を。

「そうか。ただ帝国と戦っただけではないんだな。王都奪還、同盟の救出、帝国の打倒、大司教の救出……とんでもない道のりだ」

下手な騎士道物語よりもよほど正道かつ大胆で斬新で、いつそ王道とすら思える冒険譚に、アリスタフは息を呑んだ。

「ああ。だからこそ救国の王と呼ばれるんだ」

「なるほどな。ニカノールが帝国に嫌悪感を示したのも訳があるもんだ」

「……と、前提は承知いただいた上で、ここから君の好きな話をしよう」

好む話題、と言いながらも、その表情はどことなく昏い。

「両親の、話、か？」

「ああ。3年前に君に話した時は、結婚後の話ばかりしたよね」

「まあ、その前提期間の話はできないよな。色んな意味で」

アリスタフが苦笑すると、ミロ斯拉ヴもまた困ったように眉根を下げて、頷いた。

「王位継承権を正式に得た数節後のある夜……父上から告解を受けた。母上についてだ。……何でかな、君に聞いてほしいんだ……」

声色はどこか哀しみを帯びて響く。

「……うん」

できるだけ彼に寄り添えるように、ダヴィードは優しく頷いた。

そして静かに、次代の王は語り始めた。話し始めの切り口の巧きは、やはり、どこか吟遊詩人を思わせるものだった。

「父上が道を見失い、破滅へ進んでいた頃。僕が生まれる丁度4年前だから……孤月の節のことだ。大聖堂でぼんやりと突っ立っているだけの父上を、誰もが見放した頃、母上が差し入れを持ってきたそうだ」

それだけ聴くとそこから心解き放たれて純愛を育む……、といった、吟遊詩人すら歯が浮くような筋書きになるかと思われた。しかし、きつとそうではないことを、それを語る青年の表情の暗さが物語っている。

「その際、……父は、母上を犯した……」

ミロ斯拉ヴは消え入りそうな声を絞り出して伝えた。その苦悶な表情は、当人すらも自覚せぬほどに鬼気迫るものだった。つられて同じ顔をしてみれば、その様子は伝えられるかもしれないが、とても真似できるものではなかった。

「父上の告解自体はここまでだ。翌節のグロンダーズの会戦後、フラルダリウス公の死を契機に、父上は自分の信念を貫くことを決め、王都奪還に乗り出した。言わば正気を取り戻した父上は、母上にしてしまったことを先生に告白した。先生からは、吹っ飛ばされるほどの一撃を頬に喰らったらしい。まあ、こればかりは当然の報いだと思う。その後ねー」

前提と前前提を踏まえた上で、両親の真の馴れ初めを、長兄たるダヴィードは語り始めた。

くくくく

豎琴の節。血を血で洗うグロンダーズの会戦後、フラルダリウス公ロドリグの遺体はガルグマク大修道院の墓地に埋葬された。痛みと悲しみと、だが新たな希望に向かつて進むと決めた王国軍は、以前とは異なり活気に満ちていた。

新たな希望、新たな指針を示したのは王子のデイミトリ。彼の旗の下、王国軍は一つにまとまろうとしていた。

同節、執務室。簡易な応接間の腰掛け椅子に座る令嬢に対し、深々と頭を下げる者が

いた。王国軍の希望、王子のデイミトリである。

「本当に、すまなかつた。いや、謝罪してもしきれないことをした。どんな罰でも受けよう。許せとは言えない。だが、王都奪還までは、どうか待ってくれないか」

「それは、はい。貴方は軍の将ですから……」

「すまない……」

力なく返された言葉に、謝罪の言葉を重ねる。申し訳なさから噛み締めた唇は、血が滲み出ていた。

「でも、……私は貴方を罰することなんてできません」

弱々しい声に顔を上げる。眉根を下げ、苦しそうに目を伏せている。心優しい彼女は、誰かを罰することはできないのだろう。

「だ、だが」

「デイミトリさんは、どうけじめを付けるのか、教えてください」

「せ、責任を取らせてもらう。必ず！」

叫ぶようにデイミトリは言い放った。

「王都を奪還し、即位したならば必ず、お前を妻として迎え入れる！」

実のところ、マリアンヌが予想し、覚悟してきた内容と同様だった。だが、実際に言われてみると、思っていたよりも心は悲しみに覆い尽くされ、喜びといった明るい気持ち

ちは湧いてこなかった。

「頼む……！」

再び頭を下げる。しばらくしてから降ってきた言葉はひんやりと悲しく尖っていた。「罪を理由に、私を娶るのですか？　それが貴方への罰、なのですか？」

「……そういうことになる、な……」

相手から言葉を換えて伝えられる内容は、そうではないと反論したくても、事実それを述べているのだから頷くしかない。一方、自分の発言の更なる愚かさに気付いてしまった。自分を犯した相手と結ばれてくれ、と犯した本人から頼まれるなど、絶望以外の何物でもないだろう。デイミトリも考えはそう至った。

デイミトリは、まだ気付いていない。己の罪深さに押さえ込まれ、申し訳なさで心を覆わされている彼は、彼女の真の気持ちに辿り着くことができているのだ。

『私と結ばれこと』は、貴方にとっての『罰』なのですか……☒」

その言葉と声の気迫に思わず顔を上げると、涙を溢すまいと唇を噛んで瞳を潤わせている表情がそこにあった。目が合った途端、溜めに溜めた大粒の涙が頬を伝って零れ落ちた。ああ、何て酷いことを言ってしまったのだろう。彼女の生まれも境遇も知っているはずなのに。彼女の悲しみを肯定するようなことを今の今まで言い続けてきたのだ。

マリアン又は涙に溢れる顔を覆ってしまい、それ以上の顔は見えなくなつた。

「私……。私はあの時、怖くて、痛くて、苦しくて、悲しかった……」

「す、すまな——」

「でも」

懺悔の言葉すら遮って、マリアンヌは誰にも言えなかったことを口にした。

「……嬉しかったんです。たとえ嘘でも、貴方が、夫婦になろうと言ってくれて。私の初めてを……、恋し、慕った貴方に捧げられて」

犯されたことで、懸想する相手とたとえ一晩だけでも結ばれることができた。それが、嬉しかったのだ。自らの処女性を否定するようなことは、誰にも言えなかった。迂遠な言い回しをしても、とどのつまり、彼女が一途であることを隠すことはできないのだ。

「だから、私とのあの時間を、すべて罪だなんて言わないでください。私は貴方を満たしたかった。それは叶ったんですから」

顔を覆うのをやめ、手を膝に置き、泣きながら笑う彼女は、どのような言葉を尽くしても足らぬほど美しかった。

「だから、罰なんてないんです。貴方が贖う罪の中に、私のことは入れないでください」
彼女は、許すと言ったのだ。

だが、それでもなお、ならば別の形で謝罪させてほしいと言うデイミトリに、マリア

ンヌはしばらく思索したのち、

「デイミトリさん。約束してください。貴方は、あの時の偽りの契りを忘れて、真に想う人と結ばれてください」

やはり許す、と言ったのだった。

「それまで私、許しません。……どうですか？」

「あ、……あああ……」

喉の気管から漏れ出すような声が、息が、出た。崩れ落ちてしまいそうになる。敵わない。己の罪深さと軽薄さ。一相手の度量の深さ、覚悟の重さ。今すぐそのか細い手を取って、求愛したい。抱き締めて、あの時間に俺は救われたと伝えたい。だが、今の彼には、その資格と度胸がなかった。この状況では、罪を贖いたいがために彼女を求めているようで。それを凌ぐほどの行動ができそうになかった。それほどまでに、マリアンヌが提示した約束は重く強大で、デイミトリがマリアンヌを想う気持ちは真摯たるものだったのだ。

マリアンヌは、約束を交わす代わりにデイミトリの手を取った。デイミトリが顔を上げると、涙の跡が残った顔で、晴れやかに笑った。

以降の彼の功績は、蒼月の歴史が語る通りである。帝国を打倒し、フォドラを統一し、救国王として即位し、民のため臣下たちのために、デイミトリは多くのものと戦い続け

た。

その間、千の蒼い空と千の月が巡っても、デイミトリはマリアンヌを想い続けていた。これは贖罪ではなく、真に君を想うからだと言って跪いた彼の言葉に、弁論家として名を馳せていたはずのマリアンヌは一言も言葉を発せず、言葉の代わりに涙を流しながら、大きく頷いたという。

くくくく

半分父からの伝聞情報、半分は縁者の証言をまとめたものであるから、事実と異なる部分もあるかもしれないが……、とミロスラヴは補足した。アリスタフは絶句している。

流石に父の罪、母の罰は重い話だったか、かとミロスラヴは心配したが、アリスタフは全く異なる点において言葉を失っていた。

「……なるほど、暦の上ではオレたちが六歳違いな訳だぜ」

終戦の三年前には生まれていたアリスタフと、終戦後三年後に生まれたミロスラヴ。この差を生んだ理由をひしひしと感じていたのだ。

「……どういふことだい？」

怪訝な顔でミロスラヴは問う。

「父上と母上が、結婚前に、やりとりした手紙を読めば分かる」

「そんな大切な品……！持ち歩いていていいのか？」

戦闘に巻き込まれかねない状態で、手紙のよう脆いものを持ち歩いたら、すぐに傷んでしまう。違う、とすぐさまアリス Staf は否定して、お茶会携行品入れから手帳を取り出した。

「エドマンドのおやつさんの屋敷にあつた手紙の、写し、だよ」

ほら、と手渡された手帳には、手紙の文字列が緻密に並べられていた。

~~~~~

《left》「デイミトリⅡアレクサンドルⅡブレード国王陛下からマリアンヌⅡフオンⅡエドマンド嬢へ送られた手紙の写し」《left》

《left》親愛なるマリアンヌへ《left》

健やかに過ごしているか。ファーガスほどでないにせよ、この時期はエドマンド領もきつと寒い。身体を冷やすことないよう努めてほしい。

こちらは、戴冠式やら聖教会の保護やら帝国の戦線やらで、とにかく忙（せわ）しく日々を過ごしていた。

君への手紙は真剣に書きたいと思い、時間を作れたかった。だが、それが結果として君を蔑ろにってしまったように思う。心から謝罪する。赦してくれ、マリアンヌ。

フォドラの情勢として、エドマンド家が反帝国派でいてくれて心からほつとしてい

る。君と敵対などしたくない。先の戦線では、辺境伯は経済的な支援さえしてくれた。感謝している。君と君の義父君のためにも、決して負けない。どうか見守っていてほしい。

(拇印ほどのインク溜まりができていた)

本音を言おう。俺は君が好きだ。

士官学校に居た頃、真夜中に踊りの練習をしたことを覚えているだろうか？ 月光に照らされた君の髪が、月光を反射して輝く君の瞳が、小さな手のひらから伝わる優しい熱が、何度も互いの足を踏みつけた感覚が、俺の心を完全に奪ってしまった。

ああ、あの時俺が君を抱き締めるほどの度量があればと、人生で最も後悔する出来事の一つだ。同時に、人生で最も尊くうつくしい時間だった。ありがとう。マリアンヌのおかげで、俺は大切なものを実感できたんだ。だから、君には幸せになつてほしい。俺の心から 愛した人だから。

だから、この戦争を終わらせたなら、君に会いに行く。その時までどうか無事でいてほしい。

俺の、一方的な想いだが、せめてマリアンヌだけは無事でいてほしい。

俺の愛の向かう先だから、それを失いたくない。

どうかこの願いを受け取ってほしい。

それでは、御身を大切に。

(写しのため、署名と王印略)

《left》「マリアン嬢からデイミトリ王へ送られたと思われる手紙の写し、の写し」  
(第一の写しの時点で時候の挨拶等が省かれている) 《left》

私は、貴方に後悔してほしくありません。

フオドラを取り巻く事情がどうなるか、など誰にも分かりません。明日、どちらの身に何が起こるなど、誰が予測できませんか。

「円舞曲の練習の時に私を抱き締めておけば」だなんて、こちらの胸が締め付けられるような後悔を抱いた貴方に、もう二度と後悔なんてさせたくありません。

おこがましいようですが、私は、私も、貴方のことをお慕いしているからです。

だから、私はフェルディアに参ります。

使者殿にこのお手紙を渡したらすぐに準備を始めます。数日後には発てるでしょう。フェルディアの王城には「スレン貿易商の取次<sup>×</sup>」として参ります。どうか、お迎え入れてください。

このことは、義父にだけ伝えます。それ以外の者には内密に、慎重に参ります。

それでは、御身を大切に。



(第一の写しの時点で署名は略されていた)

《left》「マリアンヌ嬢からエドモンド辺境伯に送られた置き手紙の写し」

お義父様《left》

抜粋ですが、およそ上記の内容をファーガス国王デIMITリ様へと送りました。

この数日の間、もしもお会いできなかった場合に備え、この手紙を書き置きます。

上記の通り「スレン貿易商の取次」として参ります。関所では、昨年末に急遽姿を消した商家×の名を使います。通行証の期限は来節末ですから、以降は登録帳簿から抹消していただければ、王国へ消えた商家になりますので、除籍の理由もできましよう。

お義父様には説明するまでもないですが、これからのことは同盟のどの立場の方々にも気取られぬよう努めます。

私が王国へ渡ることは、親帝国派の方々には「反帝国派が王国と結んだ」と指摘するきつかけ、もとい同盟が瓦解するきつかけにもなり得ます。それこそ帝国の思う壺。避けねばなりません。

また、反帝国派にとつても要らぬ期待を持たせるかもしれません。王国が同盟と結び気が無かったり連携が取れなかったり、これらの可能性を考慮すると、王国と結びつきが出来たと思うのは時期尚早です。

最も、私が個人的にデイミトリさんに会いに行くのですから、政治的な思惑が入る余地がありません。

ただし、お義父様が必要だと判断した場合は、盟主クロードさんに情報としてお伝えください。駒は多い方が良いですから。

以下は私個人の気持ちです。

士官学校に居た頃、私の心を繋ぎ止め、満たしてくれる人がいました。その人が私を、愛してくれているのならば、私はその愛に応えたいのです。いてもたってもいられませぬ。成人の儀を迎えてもなお、恋に恋する小娘のようだと、きつと笑われてしまいますね。

両親が失踪してから、天涯孤独な身になった私を引き取り、士官学校にまで入れてくださってありがとうございます。

最近では領内経営や弁論術などを教えていただき始めたにも関わらず、家名を隠して王国へ行く不孝を、どうかお許しく下さい。

どうか、御身を大切に。私の師、私のお父様。

マリアンヌⅡフォンⅡエドマンド

~~~~~

アリスタフと同じく、ミロ斯拉ヴもまた絶句した。

「な?」

ミロ斯拉ヴから聞いた父の様子と、手紙の内容の積極性を改めて比べ、アリスタフは尋ねる。

「ああ……、状況が違えば父上はこんなにも積極的に愛を述べるのだな……」

歯が浮きそう、と溢すように言ったミロ斯拉ヴに、アリスタフは思わず嘖き出して笑った。

「それに応じて馬一頭だけ引き連れて出奔した母上も、大したお方だよな」

「うん。なるほど。同じ両親と同じ名前を持ちながら、境遇はともかく性格が異なる私たちというのも、納得がいくね」

「全くなー」

互いに、互いが知らない両親の話ができた。異世界の「もしも」を想像の中でも感じることができて、二人はむず痒くも暖かい気持ちに包まれた。

夜半の鐘が鳴る。

いよいよ迫る決戦に向け、夜更かしはできない。二人は寢床へ向かい、微睡の向こうの明日を目指した。

3—3 秋嵐立ち込めて。

気付くと、俺はひとつの家の前にいた。周囲は森で霧靄に包まれて遠くまでは見えな
いが、近くに小川が流れていることは音で分かる。

もう作戦が始まったんだった。森の中だし、霧もすんごく立ち込めているし、例の結
界の近くかな。危険ですから避難してください、って言いに来たんだっけ。

あやふやな記憶をよそに、そもそもこの辺りに人がいるのかを考える。

家の壁に沿って、割った薪が集積されている。少し離れた所に小さな納屋。冬が近い
からか、煙突からは灰色の煙がたなびいていた。近隣に村があるような雰囲気ではな
い。そのため山の管理小屋や小領主の避暑地のような立地と佇まいだが、いやに生活感
のある家だった。うーん、これは居るよなあ……。

この類の家を見たことがない訳ではない。帝都アンヴァルからゴージェ領まで、北
へ南へ行ったり来たりしたのは、柚人の家やら村八分にされた家やらを訪れたり、それこ
そ管理小屋に滞在したりなんてこともしよつちゆうだ。だが、目の前の家は、記憶に、無
い。だからここに住む人のことも知らない。

腕の中には、懐かしい匂い、特にラヴァンドラの香りがするものが抱えられていた。

その匂いのせいか、記憶に無い家に妙に郷愁の念を感じずにはいられない。立ち上る煙をぼんやりと見ていた。

「ダヴィードおにいちゃん？」

ふと、足下から小さな声がした。驚く心身を抑えつけて恐るおそる下を見ると、いや大変驚くことに、何とも可愛らしい幼女が俺を見上げていた。柔らかな黄金の髪を持つその子は、透き通る碧眼を宝石のようになりくりとさせてこちらを見つめている。お人形さんみたいに愛らしいその姿、と表現してもまるで問題ないほどの子であった。

かわいらしさ讃辞はさておき、この子と目が合った瞬間、俺はミロスラヴの方のダヴィードのことを思い出した。厳密には、初めてアイツの出会った時に脳裏に過った、父上と母上の面影である。

お二方の姿は、自分の脳みそだけで覚えている範囲では細かい部分まで再現できない。今は帝国の官庁舎となったフェルディアの王城がまだ総督府だった頃に、当時のゴージェイエ辺境伯やドミニク男爵が手を回して何とか引き取ってくれた夫婦の肖像画が、記憶を辿る唯一の手がかりだった。

ちなみに、母上の存在は隠されていたらしいから、王国作の彼女の肖像画が見つければ王妃や嫡子の存在が公にされて、帝国からの干渉は実際以上だっただろう。ともかく、そういう背景もあったため、両親の肖像画はその一枚しか存在しないのである。

切れ長の双眸、顔料では再現しきれないであろう豊かな麦の金の色、晴れた日の朝に見る空の色、優しく笑う豊穡の大地の瞳——、寄り添うお二人の姿、姿勢の良さ——。その大切な肖像画すら、最後に見たのは8年も前になるため細部はあやふやだが、両親の姿、特徴を覚える分には十分すぎるほどだった。ゴージェイエ元辺境伯様、お義祖父様にはこの先もずっと感謝し続けるだろうな。つと、閑話休題。

そも、ひとつの言葉では説明しきれない感情や思い出が突如として巡ったのは、先の少女に話しかけられたからである。意識を彼女に向け直す。彼女は俺の返答を待っているのか、じつと俺の目を見て離してくれないし、続きを話してもくれない。

「おかあさん、おとうさん。ダヴィードおにいちゃんがかえってきたー!」

まず視線を合わせようと膝を曲げた途端、踵を返して彼女は裏口と思われる部分から家の中へと入って行った。

その直後、玄関が勢い良く開かれ、中からは女性が飛び出てきた。こちらを見るや否や、麗しいお顔は今にも泣きそうな表情へと変貌し、そのまま俺を抱き締めた。俺はラヴァンドラの香りを抱えているので、抱き返すことはできない。

「もう二度と、目にする……とすらできないと思っていたわ……ダヴィード……!」

空色の髪は水晶のようにきらきらしている。涙で赤く染まった瞳も、潤んでいて庇護欲をそそる。俺の知る母上の情報と、この女性が持っているであろう紋章を考えれば、

疑いようもなくこの人は俺の母だった。

「会いたかった……」

心の底からの言葉は、温情と寂寥が混ざって俺の心を揺さぶった。

うん、俺もだよ、母上。

最後に母上に会ってから、もうすぐ二十年という長い月日が経とうとしている。母の代わりを懸命に務めてくれたメーチェもその一年と半年後にはいなくなつたから、俺にとつて母親というものはよく分からないものだった。包み込まれる温もり、掛けられる愛のことば。印象は記憶の残滓に残っているが、実感はとても覚えていない。

けれど、今このとき目の前にいる女性は、紛れもなく母の愛情を俺に教えてくれる。身の震える思いだ。

母の抱擁を受けている俺は、母より若つつ干背が高いため、視界は自由だった。そのため、玄関口から現れたその人にもすぐに気が付き、目も合った。

「ダヴィード？」

金の髪、隻眼の碧。色素が薄いために表現される美しい金の色は、大変珍しく、懐かしく、憧れる。背丈は俺の頭ふたつ分ほど高く、体格はがっしりとして頼もしい印象を受ける。そして感じる紋章の気配。俺が憧れ続け、追いつけていた父の姿がそこにあった。

色素の薄い金の髪を持つ父よりもずっと色素の薄い、ほぼ白色の髪を持つ俺を見て、父は息を呑んだ。父は俺を母の抱擁から引き剥がし、潰れんばかりの勢いで抱き締めてきた。俺の抱えていたものは、母が代わりに抱き締めていた。

「その髪……。痛い思いはしていないか？ 辛い思いはしていないか……？」

子に対する愛と、人として最大限の心遣いをその言葉の中に見た。

風の噂で聞いた眉睡な話に、ファーストガス王には白髪はくはつの親戚がいたとかいないとか、そんな話があった。その親戚が俺でも他人でも、こうなつた経緯を知っているのではないかと俺は勘繰つてしまった。

その真相はともあれ、心の底からの言葉は愛憐と同情を含み、俺を包み込んでいた。今はその事実で十分だ。それより。

「そちら……こそ」

父の威厳を前にした緊張もあつてか、少しばかり上ずつた声で、彼の右目を覆う眼帯について指摘した。最後に会つた時には無かつたはずのそれは、何だか彼の受けた辛苦や災禍を表現しているかのように、見るに堪えないくらいの気持ちになる。

「ああ、これが。大したことはない。こんなもの、ただの過去だからな」

大変驚くことに、父は、あまりに軽やかな口調で漆黒の眼帯についてのあれやこれやを吹き飛ばした。こんなに軽快で晴れやかな声で話す人だとは思っていなかったのだ、

俺は目をぱちくりとさせてしまい、返事をするのが一拍遅れた。

「……だとしたら、俺のこの髪も、過去だ。とうの昔に、今まさに」

この髪の色になつてから、早いもので十数年経っている。完全な白ではないため、老けて見えるわけでもないし、珍しい方の部類に入るだけで奇異な目で見てくる人間も少ない。それに俺自身、暁の空の、蒼と茜が混ざる境界線のようなこの色を気に入っている。だから過去なのだ。

ただし、この髪色になる経緯の際、人生で最も、両親に会いたい気持ち爆発していたのも事実。だが、父がこの髪色について言及してくれたおかげで、過去になったのだ。今まさに。

「そうか」

父は微笑んで、俺の後頭部をわしゃわしゃと撫でた。後ろに結った三つ編みは、間違ひなく崩れた。でも、そんなことどうでも良いくらいにくすぐったくて、誇らしくて、何だか照れてしまう。

「ありがとう。ダヴィード、帰ってきてくれて」

背後から、母の声がした。父の腕にがっちりと挟まれているのでそちらを向くことはできないが、涙ぐんだ様子は伝わってくる。ダヴィードの帰還を待ち望みながらも叶わぬ夢と思っていた母は、何度も礼を言っていた。父は俺を放ち、母を後ろから抱き締め

た。

「ダヴィード」

「良かった、また会えて、本当によかった……」

「アリストフ」

俺の心は、愛と慈しみを以て寄り添うふたりを見て、喜びと悲しみを爆発させていた。心臓がばくばく言うほどに、喜怒哀楽含むありとあらゆる感情が飛び回って、どれが俺の気持ちか分からなくなっていた。言葉に出来ない心を、涙がスウッと頬を駆けて行った。

「アリストフ！」

さつきから、ここには相応しくない声で名前を呼ぶのが聞こえてくる。頭の中から反響したり、空間のあちこちからぼわぼわと轟いたり。それに応えたら、俺はここから離れなければならなくなる。

それは、嫌だ。

せつかくお二人に会えたのに。色々話したいのに。お二人と同じで剣術と槍術が得意で、でも理学も修めて武勲や功績を上げられるように頑張って、ドミニク式訓練法を乗り越えて、エドモンドのおやつさんに師事して、士官学校を出て、今は外交官をやつて、そのうちダスカーとの折衝も任されるんだよ、って。きつと褒めてくださるだろ

う。偉いわね、ダヴィード。すごいな、ダヴィード。ダヴィード。……って。

「ダヴィード、ダヴィード」

母上が俺の名前を呼んでいる。愛おしそうに。父も俺を見つめている。隻眼の分、倍の愛情を込めて。

「アリスタフ!!」

まだ聞こえる。さつきよりも大きな声で聞こえてくる。いつもは明瞭で爽やかな声
が、焦つてその名を呼ぶ。

とづくに分かつていたんだ、ここがやたらと現実感のあるだけの夢だつてことは。予
知夢とか予言だとか言われている時代もあったが、「疲れている時に見やすい、夢だと分
かつて見ている夢」って『俺の世界』では仮説が立てられている。

異世界に来て、戦つて、頭を使って、遠征をして、異世界の両親の話を聞いて……、つ
てそりゃあ疲れる。だからこんな夢を見たのだろう。けれど、こんなにも幸せで哀しい
夢だから、もう少し見ていたっていいだろう？

「アリスタフ!! 頼むから返事をしてくれ」

必死に俺を呼ぶ声が響く。同時に、赤ん坊が泣く声が、家の中からした。俺の泣き声
だったのかもしれない。ミロスラヴの叫びが夢に反映されてしまったのかもしれない。
本当に赤子がいるのかもしれない。

「僕の魂の兄弟……ダヴィードIIアリスタフ！」

全ての音を掻き消して、恩情の青年は俺の名を再び呼んだ。

俺のもう一つの名を。

途端にお二人が動かなくなった。赤子は泣き止んだ。風を感じない。煙が動かない。川のせせらぎが聞こえない。まるで絵画の中のように、景色も動いていない。

俺はこの光景を目に焼き付けて、目を閉じて、もう一度、開けた。

「アリスタフ！」

眼前いっぱい、金の髮碧の瞳を持つ青年の顔が現れる。両目のある碧が。

「良かった、目が覚めたか」

景色は二階建て寝台の一階に移っている。まだ夜中なのだろう。燭台に乗せられた一本の蠟燭がゆらゆらと揺れて、部屋をやわらかく照らしていた。

「何度呼びかけても、掻きぶつても起きないから。もう少しで二カを呼びに行くところだった」

ふう、と安心したようにため息を吐くミロスラヴ。俺はぽかんとしたままだった。

「何かあったのか？」

敵襲なり火事なり火急の用件だったなら、ニカノールを呼ぶだのする前にミロスラヴの膂力で運ばれていただろうから、俺の具合が悪そうだった、とかだろうな、と思いつ

つ、聞く。なら、そこはニカノールじゃなくて侍医か軍医じゃないのか？と聞きたかったが、ここは異世界だから頼みにくいのか、ニカノールの治療に絶対の信頼を置いてるんだな、とか、勝手に疑問に思って勝手に結論付けてしまった。

「何、つて……君がひどくうなされていて」

「俺が？」

まだ夢のことを覚えている。うなされるような事象も、あるとすれば父上に抱き締められた時に背骨が折れるかとも思っっちゃったところだけだ。でも、呻くほどの痛みではなかったはずだ。

「今だつてほら、泣いているじゃないか」

「えっ？」

やたらと冷ややかな風が吹いているなど思っていたら、それは夜だからではなく、俺の涙が空気に当たって熱を奪っていたからだ。それは夜だからではなく、俺

「怖い夢でも見たのかい？」

俺の手を取り、いつも以上に優しい声で問いかけるミロスラヴは、半分父上で半分母上みたいだった。心遣いは嬉しいが、俺はもう子供ではないので、首を振って違うと答える。まあこの動作が子供っぽいけど。

「どちらかと言うと、良い方に入りそうだけど……」

「どんな夢？」

優しく訊いてくるミロスラヴの声色は、部屋の蠟燭の優しい明るさも相まってより優しく聞こえた。

「……初めて……ほぼ生まれて初めて、顔のある両親とお話した」

ミロスラヴの手がほんの少し力を込めた。コイツにとつてのほぼ毎日、俺にとつて物心付く前に立ち消えた日常である。持つ者は持たない者にうまい言葉をかけられない。俺は知っている。べつに、うまいことを言つてほしい訳でもないけれど。

「……そうか。さつきお二人の話をしたからだろうか……。お茶でも淹れてくるよ。さつきの茶葉は安眠に良いだろうし……。眠かったら寝ても良いからね」

俺の見た夢について、ミロスラヴは何も言わなかった。言えないって覚悟していたのかもしれない。そして、彼がかつてそうしてもらったように、そうしてきたように、優しい香りのお茶を淹れてくるのだろう。

ぼうつと残る眠気に身を委ねれば、また夢の続きを見るかもしれない。それも良い気がするが、今は同じダヴィードの淹れたお茶の匂いや味、湯気の気配を感じるまでは夢と現の間を薄く延ばすことにした。

嵐の対峙

4—1 嵐を斃す①

作戦実行の朝になった。一行は作戦実行部隊と共にデアドラの街を出立。街道を抜け、結界の待つ森へと歩みを進めた。

森に潜入して歩くこと暫く。辺りは秋嵐が立ち込めており、靄が掛かった視界は良好とは言えなかった。

つと、王の従者がある地点で足踏みをし始めた。これ以上は進めません、と悔しそうに言う彼の言葉通り、そこからは結界の領域だった。

結界内に入れない者は結界に沿って各小隊ごと待機と命ぜられた。既に森に展開している別動隊も結界に沿って索敵を行っているだろう。

国王、アリストフ、ミロスラヴ、ニカノール、エリザヴェータとその肌に触れている天馬は違和感なく結界内に侵入した。待機している兵たちは、霧靄のせいもあるが、たった十数歩で彼らの姿が見えなくなったらしい。

いよいよモーリスと対峙すると思うと、各位は震えを抑えることができなかつた。ある者は、恐怖による震え。ある者は、責任感による震え。ある者は、武者震い。ある者

は、悲しみによって震えていた。

先頭は本人きつての希望でミロスラヴが。次を結界の術式解説を進めながら歩くニカノールと、魔力探知に優れたアリスタフが互いの状況を確認しながら進んでいる。その後ろにエリザヴェータ。殿を国王が務めてくれている。

現在は結界の中心方向へ八時の方向から進んでいる。拝石がほぼ中心として、モーリスもそこまで離れることはできないためにその周辺にいるだろう。一行は、結界の境界から中心の丁度中間あたりまで無事に進むことができた。

木々の密集地点で、一度休息を取る。その間も、ニカノールとアリスタフはモーリスの位置と他の魔獣の位置取りを確認している。

「——時折結界の術式の方が変わっている。魔獣たちの移動にも反応しているようだ」
木の枝で地面に式を書いて見せるニカノール。式を見て、アリスタフは目を閉じ、魔力の分布を確認する。

「この式と探知含めると……、普通の魔獣は拝石から見て四時から六時の遠方と、十時から十一時の方向へ集中しているみたいだな。九時方向に数匹いるけど、動きはないみたいだし、とりあえずこの進路は問題なさそうだ」

「問題のモーリスは……どこか分からない。もはや動けないのか……？」

「……大元の式見せて」

「どうぞ？」

理学に明るい二人のおかげで索敵には問題なさそうだが、二人の会話を耳にするとミロスラヴが目を白くしてしまつたため、エリザヴェータは耳を塞いでやつている。国王はそれを微笑ましく見守りつつ、指揮を立てるために情報は洩らさず聞いていた。

つと、風が強く吹き抜け、霧が薄くなつていった。突然の変化に驚く一行だが、国王が落ち着こうと声を掛けてくれたために平静を取り戻す。

「霧は双方の目を奪うから遣りようによつては有利にも不利にもなるが……霧が晴れるなら開けた場所の旧街道は選択肢になくなつてくるかな。それはセンチにお任せするけど」

苦い顔をしながら本格的に具体的な魔獣探知を始めるアリストアフ。一方、吹き抜ける風に思い当たる節のあるミロスラヴは、風と空の動きを観察する。

「……この南風の冷たさ……！ 今は飛竜の節……少し遅い野分、か？」

次期国王として民の暮らしを守るためにいかにすべきか——民の食べるものを確保すること——、つまり、自然災害には注意しなければならぬ。

リーガン領やエドモンド領が豊かな湾港を保有する理由の一つは、その天候の安定性にあつた。晴れの日が多く、降水が少ない。

ただし、季節性の嵐が勢いを衰えないまま北上、煉獄の谷ア ril の熱でむしろ勢力を

増して暴れることが、ごく稀にある。その際は、嵐への耐性が少ない港町に被害が傾くことが多いのだ。そして、その状況は必ず記録に残される。

それを知らない次代の王は、蒼月の世界のファーガスにはいない。

「私の知る史実と年と節は違うが、嵐が来る！」

ミロスラヴの叫びに、各位が構える。

「それはそれは……どっちの目も潰れるなあ……！」

霧が晴れたら嵐が来る。どのみち視界が悪いことには変わりない。状況が良い訳ではないが、それは相手も同じこと。アリストアフは焦りを見せぬよう、苦笑交じりに揶揄してみせた。

国王は雨風で体力を消耗しないよう、早めに決着をつけようと提案する。そこに、一度ニカノールとアリストアフによる索敵が終了した。

「拝石から七時の方向、地図だと森林地帯と街道の際、岩場のあたり……」

「近い、わね」

地図を覗き込み、強敵が近くまで迫っている実感をエリザヴェータは声を震わせる。

確かに、天馬騎士なら一息でその位置まで行ける地点である。

「やっと思つかった、って感じ。それは近いからこそ分かった、つてのもあるよ」

怯えた様子を見せるエリザヴェータの気持ちを少しでも和らげようと、アリストアフは

優しい声色で話しかけた。

「そうね……。一人がいなければ行き当たりばつたりになるところだったから……。こつちから仕掛けられることを喜ばなきゃ！」

アリストアフの声に導かれ、エリザヴェータは微笑んだ。そして、臨戦態勢に移るため、天馬の装備を最終確認し始める。ニカノールは剣を鞘から抜く。

「では、陛下。指示を」

ミロスラヴもブルトガングを抜き、頭上で横向きに掲げ、指揮官である国王に頭を下げる。以降の戦いでは無礼をお許しくださいの意も含め、礼をしたのだ。

ミロスラヴの声に答え、国王は静かに頷いた。

昨晩説明した作戦の通り。二人のダヴィードは先陣を切り、ニカノールは援護射撃や回復、エリザヴェータは上方から遊撃と周囲の警戒を担当すること。適宜細かい指示は出すが、喧噪や嵐の到来で音による指示はできなくなるかもしれないため、最低限の陣形は守ること。撤退する時は前もって決めた合図を出し、殿は後ろから自分、ニカノールの順で務める。以上。ここまで協力してくれる君たちは強く、優しい。だから死んではいけない、と。

国王の指示と号令と共に、一行は休息の地を離れ、作戦を開始した。エリザヴェータは空の開けた場所で天馬と飛翔した。

街道を横切った先の森の中、黒い影が確認できる。頭にある角の形がブルトガングと同じで細く湾曲している。モーリス——彷徨えし獣だ。

じつとして動いてはいないが、人の気配を感じ取り、その目が久しぶりの生き餌を凝視していることははっきり分かる。

「死ぬなよ、ダヴィード！」

「当たり前だろう、ダヴィード！」

二人のダヴィードの掛け合いの後、二人を目隠しに魔法陣を展開させていたニカノールが「トロン」を放ち牽制。戦いが始まった。

獣は「トロン」に驚いたのか痛みを感じたのか、身を仰け反らせる。事前予測の通り、結界の影響で魔法装甲が効力を発揮せず、魔法攻撃が効いているように見える。

本当に効いているかどうか、仰け反って見えた腹に、ミロスラヴが魔剣ブルトガングによる斬撃を入れる。魔獣だけあり硬いが、腹部という差し引きによって、切り傷が広がった。

その傷を確認し、国王は作戦続行を宣言した。

指示の声をかき消さんばかりの獣の悲鳴が響き渡る。獣は腹部を左腕で隠し、ミロス

ラヴの二撃目、アリストアフの黒魔法アローを封じる。体勢を立て直しながら、右腕は平手で地を叩き付ける。二人のダヴィードは風圧に思わず後ずさる。

獣は二人に向けて咆吼、威嚇する。

開けた口にアリストアフは小さな「ウインド」を放つ。腹部同様、粘膜は弱いと踏んでの攻撃だ。獣は口を閉ざす。見せた額、弱点の紋章石に、すかさずミロスラヴが剣撃を与える。が、はたくような右腕の攻撃に弾かれてしまう。

「……………？」

ミロスラヴは僅かな違和感を、剣の中に覚える。しかし、臨戦の危機感が上回り、違和感を払拭して弾かれた剣を翻す。二撃目は口元に撫で斬り。手応えは無い。ただでさえ硬い魔獣が、ブルトガングを鎧として身に纏っているのだ。攻撃は思うように届かないと思った方が良くと再認識する。

ミロスラヴの攻撃の合間に、アリストアフは左翼より鎧の隙間を狙って彼のブルトガングで攻撃を加える。少しでも動きが止まれば、と考えてのことだ。獣は少し動きを鈍くしながら動きを止めるに至らない。それどころか、獣は後ろ足で立ち上がる。獣自体を足場に使っていたアリストアフはよろめく。そこに、獣の左腕がアリストアフを掴もうと伸びて来る。

「……………チイッ！」

払い落とされて怪我するより、捕まって握り潰されるくらいならば剣を突き立ててやると切っ先を向けて飛び込もうとするアリスタフだったが、左腕は飛んでこなかった。間を見つけたアリスタフは身をひねって着地し、状況を把握する。

獣が立ち上がった瞬間を狙い、エリザヴェータが牽制攻撃を行ったのだ。獣の標的は天馬に乗った少女へと移る。両腕をびゅんと伸ばし、強風によつて空に散らばる木の葉を掻き集めるような無造作な動きで攪乱してくる。エリザヴェータは天馬と滑空し、攻撃を躲す。

再び見せた腹部、それも先程与えた傷に、ニカノールの「サンダー」が放たれる。「サンダー」の電撃は塞ぎかかった傷の修復を妨害し、そこにミロ斯拉ヴは剣を突き立てようと近づく。が、完全に立ち上がった獣の傷の位置は高くなっており、後退までしたため、剣が届かない。

四足歩行の体勢に戻る前に、ミロ斯拉ヴは後退したが、突風が吹き、距離が稼げない。獣の右腕が下りてくる。

「……………くっ、ぐ、ううッ！」

ブルトガングを横に構え、衝撃を和らげる。鍛えられた身体と英雄の遺産の力により、押し潰されることはなかった。しかし、剛腕による重さは確かに身体を痛めつけて自由を奪う。そのため、眼前に迫る獣の牙、もう一方の腕の追撃が来る前に抜け出すこ

とはできそうもない。

しやらん、と鎖のようなものが動く音がした。音が導いた切っ先は獣の右手に突き刺さる。

「ゴ、オ……ギヤアアアア！」

引き裂かんばかりの叫びが広がる。ミロスラヴは轟音に耳を痛めながらも、力の弱まった右腕から脱出すると同時に、霞のような何かを感じ取った。

獣の叫びの正体。国王の持つ天帝の覇剣が真の力を発揮し、戦技「霸天」の力を帯びて獣の右腕に刺さったのだ。英雄の遺産は女神の眷属と呼ばれるもの、たとえば竜の類に有効な一撃を与えることができる。後衛の国王は中衛地点まで前進し、ミロスラヴの救出と戦技を放つ機会を同時に持つてきたのだ。まるでミロスラヴの窮地を予測したかのように。

国王は剣を戻し、後衛位置に戻る。左翼から前衛に戻ったアリストアフが、今は睨みを利かせている。

「兄上、少し」

獣と距離を取ったミロスラヴに近寄り、白魔法ライブを展開する。先程の攻撃を受けた際に出来た傷や筋肉の痛みを和らげるためだ。いつもなら大したことない、と言うところだが、僅かな消耗が命取りという状況で遠慮などしてられない。

「……ありがとう、ニカ」

優しい光はミロスラヴへと注がれ、直ちに回復の力を与える。柔らかい光に包まれて、ミロスラヴに思考の余裕が生まれる。

「……………」

生暖かい風が吹き抜ける。嵐が迫る。

嵐竜の名を冠する紋章石を持つ青年と、同じく嵐竜の紋章石に取り込まれた獣が対峙している。

ぽつり。雨粒が一つ、落ちる。

「センセイ！ 後方から魔獣が二匹、来ているわ！」

周囲の警戒を怠らないエリザヴェータが、旧街道側から突き進む敵影を知らせる。国王は、私が対処する、君たちはミロスラヴの指揮で無理せず戦え、と伝え、迎撃に向かう。

ぽつり、ぽつり。雨粒が目視できるほどに落ちてくる。

——わしの獣の血が騒ぐ……。

エリザヴェータが空中から攪乱を仕掛け、獣の注意が逸れた。瞬間、アリストフは駆け、戦技「獣牙」で紋章石を守る障壁を打ち破った。壊れた障壁から獣の力が溢れて行き場を失い、獣はしばし混乱する。

ぼた、ぼたぼたぼた——。一粒目、二粒目たちを追うように、雨粒が落ちてくる。

——ああ……おぬしが、わしを解放してくれるのか！

一語一句違えずに覚えた物語。その再現にならないことが、小さな違和感だった。やがて、違和感は疑問に変わる。

やがて、大粒の雨が一行を襲う。痛みすら伴う激しい雨は、うねるような風と共に襲来する。目も開けられないほどの暴風雨である。状況を確認するのにも精一杯だ。

「……この世界の母上は、モーリスを完全な獣にしてまで結界を張りたかつたのだろうか？」

疑問の言葉は、雷が落ちた轟音によってかき消された。

「終わりにしようぜ！ ぐ先祖様あー！」

剥き出しになった紋章石に、必殺の「トロン」を放とうと魔法陣を展開するアリスタフ。魔力を通そうとした瞬間、とてつもない危険を感じた彼は陣を消した。

「……………!!」

彼は突如として魔力の動きを思うように使えなくなった。そのため、魔法の暴発の危険を考え、制御できた本当に僅かな魔力で陣を消したのだ。

本人はもちろん、この場に居る誰もがアリスタフの魔法の消滅に驚いている。

「アリスタフさん、あたしが！ 『無惨』を……」

魔法を放てない彼を援護しようと、エリザヴェータはこの風雨の中上空へ向かい、勢いをつけて突撃の構えを見せる。魔力が使えないアリストアフは、魔法とブルトガングの代わりに短剣を構えて獣との距離を詰めていた。

ここで、ニカノールはある特定の魔力を検知した。聖墓で感じたものに大変似ていたため、ニカノールはすぐに気が付くことができた。

「リーザ、ダメだ。止まれ！」

その声を聞いたアリストアフは剣を引き、エリザヴェータに突撃を止めるよう伝える。周囲をよく見ていたエリザヴェータは戸惑いながらも突撃の構えを止め、旋回に戻る。

「何故だ……ッ！」

疑惑と焦燥を明らかに示したその態度に、ミロ斯拉ヴは振り返って問う。

「ニカ……？ 一体何が……」

『ワープ』。来る」

端的にこれからの状況を伝えた。彼らが危惧していたことの一つが、今迫っていた。

4—2 嵐を斃す②

ニカノールが今から起こりうる状況を言うが早いかな、獣の前に人影が現れた。獣を庇うように両手を広げ、アリストアフと対峙している。

清潔感のある白と紺の聖衣に身を包んだ女性だった。下半身はグレモリイと呼ばれる兵種のように腰部分に金属の装飾兼鎧があり、そこから裾が広がって厚みがある。顔は、紹紗布とこの雨によってよく見えない。

「お願い。どうか殺さないで……結界なら壊してもいい……。あなたたちのためにも……どうか……」

こちらに敵意を向けているようではない。それは傍目にも分かった。今にも泣き出しそうな細かい声は、アリストアフにしか聞こえなかった。

アリストアフは目の前の女性の訴えより、彼女の身の危険を感じている。今にも噛みつかん飛びかからんとしている獣に背を向けるとは、正気の沙汰とは思えない。

ミロスラヴはニカノールから離れ、女性へ向かって駆け出していた。

「私たちはただ、家族で平穩に、生きて、笑って、幸せに暮らしたいだけなんです」

——この獣を飼い慣らしてまで？

アリストアフもミロスラヴもこの問いを感じた。答えは分からない。

「やめて……殺さないで……」

ミロスラヴの接近により、再び懇願する女性。

「いやいや、そのまえにアンタが——ッ！」

女性を説得する前に、やるべきことができてしまったアリストアフ。なおも走るミロスラヴ。

二人のダヴィード、アリストアフは獣の右腕を押さえつけ、ミロスラヴは女性の身の安全を確保し——ようとした。

が、それらは全て為されていた。暗雲の下の黒い森から、突如として現れた全身に黒の鎧兜を身に纏った謎の騎士によって。

「ギャオアアア!!」

獣は叫ぶ。騎士の銀の槍が獣の右手を地面へと縫い付けているからだ。アリストアフの剣は空を切る。

「サーシャ……」

騎士の腕の中で、女性は愛する人の名を呟く。騎士は女性の救出も同時に行ったのだ。ミロスラヴは地に転がり込む。

「アーニヤを傷付けるものは、何であつても許せない。口惜しいが……逃げよう」
「……………ッ」

騎士の言葉に、やや時間を置いたあと、女性は頷いた。地面に転がるミロスラヴは、紹紗から僅かに見える隙間から涙のようなものを見た。

謎の騎士は振り返り、ダヴィードたちを視界に入れる。

「すまない……………」

二人は声が出ない。出したとしても獣の声でかき消されて届かなかつただろう。騎士は呟くように言つたのに、なぜか二人にはよく聞こえた。

「『ダヴィード』……………」

二人の名も。

騎士と女性は森の闇の中へと消えた。最初から何もなかつたかのように。

「……………」

二人のダヴィードは言葉を発せなかつた。アリストフは愛憐の欠片を、ミロスラヴは現実の一片を、飲み込もうとして飲み込めないままだつたからだ。

闖入者が現れたことを示すのは、獣と地面を貫く槍一本、それだけだつた。

獣はひとしきり鳴き叫んだ後、獣は左腕で周囲の地面を叩き、揺らし、削り、右腕を

解放した。しかし槍は刺さったままだ。

再び、咆吼。嵐の中だからか、鳴いているというより泣いているようだった。

力を溜め、猛撃を放とうとしている。思えば、今まで猛撃の備えを見せなかったことも不思議だとミロスラヴは感じた。

アリストーフは、己の鼓動が速くなつていくのを感じる。獣の中の紋章石と共鳴したからだろうか。苦しいよりも悲しみが強く、終わらせたいと頭も心も言っている。

「終わらせましょう……」先祖様……」

ミロスラヴは雨を降らせた主に感謝した。ふと流れ出した涙を誤魔化することができなくなるからだ。

二人のダヴィードは跳躍する。雨が視界を妨げているからか、啼くことに懸命だからか、獣は防御姿勢も取らない。何も反応しない。

二振りのブルトガングは、未だ障壁が復活しない紋章石から力を奪った。

「ゴガア……ガ……ウ……」

断末魔もなく、獣は静まりかえった。

「終わった……の？」

獣の倒壊と風雨の強さにより、エリザヴェータは天馬と共に地上へと舞い戻った。

「主よ……」

ニカノールは鎮魂を込めて祈りを捧げる。

「リーザ、陛下は？」

落ちていた様子を保って訊ねるミロ斯拉ヴ。無自覚な悲しみを無意識に感じ取ったエリザヴェータは、暗雲にすぐわぬ明るい笑みを湛えてにこっとしてみせた。

「怪我はなくて、あと一体を倒すだけみたい。さつき、作戦続行の手信号を見せてくれたわ」

「そうか。ならば……あとは結界の本体、拜石の破壊に動こう。ここから一時の方向に弓砲台のある砦があるから、とりあえずはそこを目指そう。道中見つければいいんだが……——アリストアフ？」

「なあ、さっきの人たちって——」

見覚えのあるような二人組のことを言っているのだろう。正体はともかく、なぜ俺たちの名前を知っていたのか分かるか、と言いたげだった。ミロ斯拉ヴは首を横に振る。

「君らしくないな。今やるべきことに、その答えは要らないだろう？」

「それも、そうか」

今は嵐の中。頭領を倒したとはいえ、魔獣もそこらじゅうにいる状態。アリストアフはぎこちなく頷く。

「ニカ、どうした？」

祈りを終えたニカノールが、黙りこくって兄に見るべきものを指差す。

「……兄上と違つて全部覚えてる訳じゃない。けど、あれは変……だろ？」

ニカノールの指差す先、そこには、先程倒した獣が横たわっている。

——彷徨えし獣の体がみるみる風化して——

「……………何故？」

疑問を口にしたミロスラヴは、次の瞬間には別の疑問を呈することになってしまった。

空から一塊の魔力が飛来。ミロスラヴを貫く。

左手に、今は振るう必要のないブルトガング。

ブルトガングの紋章石は、赤黒い光を放ち、蚯蚓のようにうねうねと動く怖気の走る物質をいくつも放出し、持ち主の左手を包み込む。

「……………！」

「兄上！」

ほぼ反射的に白魔法「レスト」を展開するニカノール。それでも謎の物質の侵食は止まらず、左肘まで迫る。

「な、んなの……………これ……………」

目の前の理解不能な光景に、恐怖が何よりも上回って膝をついてしまいうエリザヴェータ。

そんな中、アリスタフは迷うことなくブルトガングを振り上げた。

「覚悟はいいか、ミロスラヴ」

「ああ、一思いにやってくれ！」

目を閉じ、微笑するミロスラヴ。言葉を交わさずして意図を汲み合う彼らの行動は、弟ならびに次代の王の剣にとっては、意図こそ分かるが納得いかないものだ。

「いくら何でも切——」

無情にもブルトガングは振るわれる。が、黒い物質に当たる直前、アリスタフは手の力を抜き、紋章の力の伝達も止めた。

ガチン、という硬いもの同士がぶつかる音がする。

「ブルトガングよ、今だけ」紋章石はどこにもない……もう一振りから奪って力を取り戻せ！」

アリスタフの言葉に反応したのか、アリスタフのブルトガングの鱗部分が僅かに震える。すると、ミロスラヴの左腕を覆う黒い物質は引き下がり、赤黒い光は明滅する。どちらへ行くべきか迷うかのよう。

「お、おに、お兄様……手放……せない……の………う？」

震えが止まらぬエリザヴェータは、へたり込んだまま兄に尋ねる。ミロスラヴは妹を安心させたくて、微笑みながら頷いた。

「結界、かな？」

「ああ。解釈違えだ！ 『標』は紋章石でも『モーリスの』持っている『紋章石』だと思っていた。だが、この状況。『モーリスの紋章石』の力で結界を保とうとしてやがる」

「じゃあ、どう……、どうして」

「どうして魔獣化しそうなのか……」。

「『標』にしやすくするためだろうな！」

魔獣の方が巨躯であり、紋章石の判別もしやすい。外敵に襲われた際、石も身も守りやすい。おそらく、術者も予想しきれていない——よもやモーリスの紋章石を持った人間が異世界から現れるなど誰が予期できようか——結界の暴走だった。

「……………くそッ!!」

術式を探りきれなかった悔しき、展開を読み切れなかった苛立ち、目の前の焦りから、アリストフは気が立っていた。

腰帯から短剣、お茶会携行品の中から小瓶を取り出し、小瓶に短剣の先を入れ、ある液体を付着させる。

「——モーリスを倒して紋章石の力を奪った今、最も活動している紋章石を新たな標に

しようとしてんだらうよ！」

アリストタフは己の左腕下腕に短剣を刺し、横に線を入れた。

「アリストタフ……君は何を……」

血を払い、小瓶や剣を戻してアリストタフはその場で軽く足踏みをする。今からひとつ走りしそうなくらいだ。

『『最も活動している紋章石』を用意してる。勝負だぜ、ミロスラヴ』

「液体は毒、か……」

アリストタフはにやりと笑う。

運動量に応じて心拍は上昇する。毒を排出するために心臓はより活動する。アリストタフは、己の心臓に負荷を与え、心臓に連動するモーリスの紋章石を活動させることで、結界の侵略を感わすことにしたのだ。

しかし、最も確実なのは——

「結界の破壊……」

震える声でその可能性を呟くのは、エリザヴェータ。未だ震え、動けない。

しかし、魔獣化に抗うミロスラヴ、その横で結界を感わせるために毒を入れたアリストタフ、彼らに白魔法を掛けるニカノール、彼らから魔獣を遠ざける国王。彼らはどうあつても動けない。

「リーザ！ 頼む、お前だけが頼りなんだ！」

「！」

その名で呼んだのは、アリストルフ。心の底からの願い共に、叫んだ。

「弓砲台の砦から南方。馬十頭から十五頭分くらい在所にあるはずだ、頼む！」

エリザヴェータは弾かれたように立ち上がり、頷いた。

「待っていてね、お兄様」

「……うん」

見えない何かと戦っているかのように、ミロスラヴの目は虚ろであった。

「早く行け！ 頼むぞ！」

胡乱な兄の瞳に眉を下げる妹を発破し、己も魔力を注ぎ続けるニカノール。

エリザヴェータははつきりと頷き、この風雨を顧みずに天馬に跨がり飛翔した。

嵐の中、こうして四人の戦いが始まった。

4—3 嵐を纏う

——リーザ！ 頼む、お前だけが頼りなんだ！

さつきまであたしを硬直させていたナニカは、アリスタフさんの言葉で爆ぜ散った。

あたしは突き動かされるように天馬に飛び乗って空を駆けた。木々の高さギリギリを飛び、弓砲台を備える砦か、魔力を帯びた拝石を探す。

霧は晴れたけれど、嵐の激しさで視界は相変わらず絶不調。ニカ兄様たちの分析によると、モーリスと拝石にそれほどの距離は無いはずだから、そろそろ見つかると思うけれど——

遠雷が聞こえる。そろそろ見つけて降りないと、この子が避雷針になってしまう。

危惧しているうちに、弓砲台の砦を見つけた。途中で拝石が見つけられなかったから、森の木々の中に在るんだわ。

あたしは天馬に砦で待機するようお願いし、アラドヴアルを手にしてまっすぐ南方へ駆けた。馬十頭から十五頭分ほど……、つてあたしにも分かりやすく説明してくれたんですもの。すぐに見つけてみせるわ！

一、二、三……十を数える前に、光を放つ乳白色の巨石を見つけた。ニカ兄様が寝っ転がっても余裕で余るほどの大きな円形の石。高さ、つまり厚みも、あたしの膝くらいはある。魔道に疎いあたしでも、あれが多大な魔力を持っていることは分かる。

石に向かつて一直線に走るあたしに、不穏な影が二つ近づく。

「……ッ！」

あたしは跳んで後退。あたしのいた所には、毒液が撒き散らされていた。

「ギャオオッ！」

「グルル……ッ、ガァ！」

魔獣が二匹現れて、あたしの道を阻む。命令があるのか本能的に拝石を守っているのか、明らかにあたしに敵意を向けている。強い獣を見た後だからそこまで怖くないけれど、やはり二匹もいると圧が凄い。

迂回しようにも二匹分の道のりは長い。嵐で視界も悪いから巨石を見失ったり、他の魔獣に見つかる可能性もある。かと言って、二匹の間を突破するのは、足元が悪いせいでかなり無理がある。天馬に手伝ってもらっていいが、結局迂回するのと同じだ。

「だつたら……！」

「あたしの邪魔しないで！」

アラドヴァルで横薙ぎ一閃。あたしの中の血が、アラドヴァルに力を与え、アラド

ヴァルはその破壊力を顕現する。二匹の目を潰すような軌道は、二匹の混乱状態をもたらしした。

「……………え……………」

アラドヴァル、いや、英雄の遺産は恐ろしい武器だと思う。ただの槍ならここまでならなかっただろう。魔獣の顔はほとんど潰れている。武術師範に敵わないこの細腕が、ここまでの惨劇を生む。生んでしまう。お兄様が、遺産の使い方はお兄様たちと一緒に学びなさいと仰った意味が、魔獣の骨と肉を砕く感覚と共に伝わってくる。一歩間違えば、砕かれる骨や肉はあたし自身やあたしの大切な仲間たちかもしれないからだ。

「ごめんね……………すぐ楽にしてあげるから……………」

魔獣であれ人であれ、命を奪うに、変わりはない。だが、終わらない激痛に苦しませたままにするのはあんまりだ。だから、終わらせる。

あたしは魔獣たちの額にある紋章部分をかち割り、その命の灯火を消した。

「……………グルツ……………」

「……………ガ……………」

「……………お兄様……………ッ！」

思うことがないことはないけれど、今は急がなくてはならない。間に合わなければ、お兄様にも同じことをしなければならなくなる。お兄様の顔を潰す？ お兄様に潰さ

れる？ 今度はその恐怖が、あたしを動かしていた。

あたしは拜石まで辿り着いた。あの魔獣たち以外に気配はない。拜石は白靄のような魔力を放出し続けている。時折脈打つように魔力らしきものが急に飛び出ていく時もあるが、その理由は分からない。とにかく、やらなきや。

本来なら、結界を解除する魔法を掛けるのが安全かつ確実かもしれない。けれど、そんな神業はあたしにはできない。安全ではないかもしれないけれど、ある意味確実なのは、大変全くもって不徳で悪徳で無礼で不敬、それこそアクマの所業だけど、この石を破壊すること！

よし！

「ええええ——っい！」

掛け声と共にアラドヴアルを振るう。

轟音。そして激痛。

「あああああつ?!」

靄を裂き、石を叩く手応えは確かにあった。同時に、あたしの腕を起点に、身体全体に激痛が走る。ただの反動じゃない。まるで天馬から落ちて地に叩き付けられたみたい。骨や肉を痛めつける明らかな「破壊」の痛みだ。

アラドヴアルに身体を預けて何とか立つ。拜石には、先の攻撃によりヒビが入って

る。挿石が色の通りの岩と仮定すると、あたしの身体は、そのヒビが入るか入らないかくらいの痛みを感じている。

いつかニカ兄様が言っていた。魔力を帯びるモノには、受けた攻撃の半分の力を返す能力を持つものがあると。結果とか紋章石とか、そういう人知の力を超えたものを相手にしているのだから、この挿石もそうなのかもしれない。

たとえ相手が石だとしても、力を使ってニカを破壊せんとするのは、あたしだ。力の矛先が石でも魔獣でも人でも、あたしは力がもたらすものを知らなくてはならない。痛みはそれを教えるかのようだ。

たとえば、この石を壊したら、さっきの男女の平穏を壊すことになるかもしれない。あたしが直接手を下さずとも、あたしの力で彼らの世界は綻びる。

「……………」

じゃあやらないのか、と言われたら、そうじゃない。あたしにも大切なものがある。守りたい人がいる。

「…………お兄様……………」

ブルトガングに吞まれそうになったお兄様を、あたしは確かに見たでしょう。お兄様が魔獣になる可能性の元凶は、あたしが壊すしかない！ あたしはアラドヴァルを天に掲げた。

……掲げた槍は、静かに地に下りてしまう。

その前にあたしの身体が痛みに負けたら？　あたしのもたらす力に、あたしが耐えきれなかつたら？

あたしは一族の中で最もブレードの紋章の力が強い。こともあろうに、お父様よりも。理由は単純。大紋章だからだ。

けれど、あたし自身は……、あたしの心身は、最も弱い。強大な力を持つ自覚が無い。力を扱う覚悟が無い。矛盾した力と器だから。ちぐはぐで、あべこべよ。いつまでも守られていたくないなんて言つて、本当はずっとみんなの腕の中で守られていたんだわ。

……自分に腹が立つ。自分の甘さ、弱さに。持て余す程の力を持ちながら、それを扱う覚悟を持ってない自分に。お兄様を救えないあたしに。

身体はまだ痛む。半ばあたし自身もたらした痛みが消えない。たぶん、あたしがこの痛みを受け入れていないから。

戦う意思が、ここで割れてしまいそう。怖い。実戦は初めてでも、お兄様たちがいたから怖くなかった。優しくて強いダーヴァ兄様。賢くて強かなニカ兄様。世界は違えども先生。そして「あたしたちみたい」アリスタフさん。みんながいたから、怖くなかった。

ニカ兄様とは、どっちがダーヴァ兄様の力になれるか、なんて軽口を叩いていたけれど、ニカ兄様の方がずっとずっと先を歩いていたんだ。大紋章なんて、驕りだ。飾りだ。言い訳だ。

いくら作戦でも、基本は後詰めでモーリス戦は主力ではなかった。ああ、その真の意味が分かる。今こそあたししか動けないのに、戦士になれていないもの。

相手はただの石なのに。石だからかしら。ひとりぼっちのあたしは、怖くて刃すら向けられない。

風雨があたしの身体を叩く。寒気がする。震えが止まらない。やらなきや。痛い。怖い。心細い。

雷鳴がこの辺りまで来ている。怖い。お兄様が魔獣になるのが怖い。でも、あたしの身体がバラバラになるのも怖い。痛い、怖い、弱い……。

頬に熱い涙が走る。その涙は、柔らかい何かが舐めるように触れて拭う。

「あら……?」

気付けば、天馬があたしの所まで来ており、鼻先をあたしの顔に寄せたのだ。

あたしはダーヴァ兄様ほどではないけれど、天馬だけなら気持ちは何となく分かる。

——あなたなら大丈夫——

この子は、怖じ気づくあたしに、勇気をくれた。

「そうよね。結局どっちも怖いのなら、やってみる、くらいの気持ちじゃなくちゃね！」
——リーザ！ 頼む、お前だけが頼りなんだ！

お兄様ではないお兄様の声が、あたしの中で反響する。もう一人の「あたしたち」の
声が、あたしに温かい気持ちをくれる。

あたしは天馬の力を借りて近くの木のてっぺんまで昇った。
雷鳴がすぐそこまで来ている。

風が強く吹いている。雨が顔を濡らす。あたしは唾を飲み込む。

左腕は木を掴み、右腕でアラドヴァルを天に掲げる。あたしの中のブレーダッドの大
紋章の力が、紋章石に伝わり、アラドヴァルは仄かに光る。

瞬間——、アラドヴァルが光った。正しくは、雷がアラドヴァル目掛けて飛んできた。
その光だ。光った時には、あたしも雷を受けている。でも、そんな関係ないの！ ど
うせこの後も受ける痛みなのだから！

「あ、あああああ!!!」

拝石が受けた力の半分を返すなら——返す能力を使えないほどに叩き割ればいい!!!

お父様、お母様。お兄様。女神様。あたしに力を——！

あたしは木から飛び下りながら、アラドヴァルの矛先に弧を描かせ、同時に戦技「無
惨」を発動させた。どのような物質にも、どのような命にも、等しく届く破壊の力。も

たらず結果は、その名の通り、無惨。

突風が吹き、あたしの滞空時間を延ばす。空にいる間、あたしは最も美しく弧を描き、槍に紋章の力を与え続け、槍と拝石が一直線上に並んだ瞬間、アラドヴァルを投げ飛ばした。

弧を描いたアラドヴァルは遠心力によって威力を増し、雷によって力を高め、あたしの投擲によって無惨はより深く刺さった。

「……………けほつ……………」

あたしは雷に打たれた。でも、結局のところ雷撃はアラドヴァルに流れ、あたしに留まらなかつたからあたしは命どころか身体すら無事だった。

そして読み通り、拝石も一撃で壊れたため、反撃を受けなかつた。嵐を味方につけなかつたら、あたしの身体かアラドヴァルか、あるいはどちらも壊れていたかもしれない。

「いつまでも、守られてばかりのあたしじゃない、わ……………」

嵐を纏った攻撃、最大出力の無惨、疲労の蓄積、緊張の途切れにより——、あたしは天馬に寄りかかつて少し意識を飛ばしてしまった。

でも——これで——。

「お兄様……………ダヴィード、さん……………」

雷鳴が遠く聞こえたのは、実際遠かつたからか、あたしの意識が遠ざかつていたから

かは——分からない。

4—4 嵐を払う

…「主よ、天上に御座す我等が主よ」

「どうか私に力をお貸しください」

「我が同胞を苛む痛みを、苦しみを、悲しみを、弱みを、それら全てを取り除く力を」

「我が同胞を勇敢なる戦士にお戻しください」

「痛むは心、痛むは力。痛みは毒、痛みは軍靴」

「取り払いて、我等を苦しみからお救いください」

「主よ、我等をお導きください」

「その奇跡の力をおもちまして」…

…：オレの目の前の魔法陣の中には、神聖語で書かれた主への祈りが羅列されている。
る。

主たる女神——神祖ソティスが魔の力を人々にもたらされた、と聖典には記されている。
る。

魔法には黒魔法と白魔法があるため、そのどちらも主の加護に依るところがあるはず

だ。

かつて、聖マクイルは剣と魔法を使って戦ったとされ、史書の記述から推測するにそれらは黒魔法と呼ばれるもので、白魔法を使った回復は聖スリーンが担っていたようだ。

純粋な魔力を出そうとすると、白魔法と同じ魔法陣が現れる。一方の黒魔法は、自然界に干渉してその力を具現化させるために魔法陣の色は赤く染まる。また、白魔法は対象の内部に作用することで奇跡のような効果を生むが、黒魔法は理学知識を元に自然界から力を借りて、対象にその力をぶつけるものだ。

史書や實際を照らし合わせると、つまり、魔の力とはもともと白魔法を示し、派生として黒魔法ができたのではないか、という学説が存在する。

具体例を出す。回復魔法は対象の生命力を増幅させて治癒を促す。白魔法の攻撃魔法「エンジェル」は、対象の内部に干渉してその魔力を浄化する仕組みで、浄化された魔力は羽根のように舞い散る。黒魔法の一般的な初級魔法「ファイアー」は、炎の起る流れを理学知識や術式で魔法陣に説明し、己の魔力を魔法陣を通して変換して出現させる。「ファイアー」の炎は自然界の火と同じ作用をもたらす。要するに、仕組みが違っただ。

実際、信仰としての白魔法は、聖典や聖句、神聖語を学べば学ぶほど深まり、扱える

奇跡の数が増えていく。

この仕組みと黒魔法の理学を組み合わせて、結果として白魔法になった回復魔法や、白魔法に属する攻撃魔法・空間転移などを行う者もいる。白魔法の特徴を神聖語の少しと理学の術式を用いて再現しているようだ。

信仰、主への祈りに理学を混ぜることについて酷く批判する信徒もいる。オレとしても、主から授かりし奇跡はその祈りによつて顕現させたい。だが、同じ魔の力であり、それを正しく行使するなら同じ人として共に力を発揮したい、とも思う。

アリスタフさんが良い例だ。彼はセイロス教には熱心に触れずに生きてきて、「セイロスの書」やセイロス様による主の啓示の伝承も驚くことに暗記していない。だが、魔法陣の中に僅かに知っている祈りの言葉を置き、その周りに理学術式を並べて、起こしたい奇跡を顕現させているようだ。

アリスタフさんはセイロス教の信徒ではないが、セイロス教を否定することもなく、正しく力を使っていると思う。この人と一緒なら、オレも更に魔道に磨きをかけたつていいな、とすら思う。

ところで、なぜオレが魔法についてここまで語っているかは、現在の兄上の異常事態を解決させるための方略を見つけるために最大限に思考を巡らせているからだ。

そして、そのための手がかりをアリスタフさんが教えてくれたのだ。

アリスタフさんは兄上と同様に、結界から魔力の一塊を打たれてしまった。「俺の紋章石が俺の心臓として機能している以上、魔獣にはならないから大丈夫——」とは言いつつ気を失った。

その前にこう言っていた。——祈りの言葉の中に、お前の血と、心、つまり言葉を入れろ、と。

詳しく訊きたかったがその時には既に意識を飛ばして聞いてなかった。というか、アリスタフさんも危険な状態である。

しかし、それ以上に、紋章石に吞まれようとしている兄上の方がよほど危険であることも事実。

そして、それを救えるのはもうオレかりーザだけで、りーザの方が成功するかも分からない以上、オレがやるしかない。

先の祈りの言葉は、一般に「レスト」と呼ばれる回復魔法である。体内の毒の排除や動揺状態にある精神などを万全な状態に戻す作用がある。これも、聖典などから最も主に届くとされる言葉を組み合わせ作り上げたものだ。

……そこに、オレの言葉や血——？ を入れるとはどういうことだろうか。オレの言葉はこうあってほしいという願いだから、祈りの言葉と重なる。言葉は重ねれば良いと

いう訳ではない。偏りが生じたり、祈りが届きにくくなったりするからだ。

オレの血は、父上と母上の子である情報を持つらしいこと、ブレードダッドの小紋章の力を持つこと、身体が大きいから全体量が多い、のかな……それくらいしか分からない。

ブレードダッドの小紋章に適合するアラドヴァルの力が必要なら、アリストフさんはリーザに行けとは言わなかっただろうから、英雄の遺産は関係ないのだろう——……本当か？

そもそも、紋章を身体に持たない人間が英雄の遺産を使えないのは、紋章という力を持たぬ者が遺産という過ぎた力を使おうとすることに対して、主が罰を下すから。結果、遺産に呑まれる。もし、遺産に呑まれることを承知で遺産を使ったら、力を発揮できるかというところではないのも悲しいところだが……。

紋章に選ばれたから遺産には呑まれない——ならば何故に兄上は呑まれそうになっているのか。伝承のモーリスほどブルトガングを使ったとは思えない。邪に染まったような気配も感じない。

主は何故兄上を罰しようとしているのか——主より賜りし力に疑問を持つのは、普段なら絶対にしてはならないことだが——それについては、兄上を救ってから懺悔しよう。

結界の作用にしても違和感がある。結界は紋章石の力が欲しいのだったら魔獣化さ

せる前に完全に制御権を奪うはず……だが、それは高等すぎて暴走結界には無理か。

では、〃結果が兄上から紋章の力を奪っている〃ならどうだ。それなら「レスト」が効かない理由も、呑まれかかっている現状にも納得できるかもしれない。

与えられた状態異常を払うのが「レスト」だ。遺産に呑まれている状態異常のみを「レスト」が打ち消しているだけで、〃奪われていること〃には効いていない。恐らく、奪う力は兄上の外側にあるから。それと、純粹に、遺産の力にオレの魔法が負けている――だとすれば……。

「血と、言葉、か……」

オレの言葉は、雨風に攫われてどこかへ行つて、雷鳴にかき消されてしまった。

現状を打破するには、オレの紋章の力で遺産の力に対抗する力を兄上に与え、より強い祈りの言葉で英雄の遺産の力を取っ払うこと！

…「主よ、天上に御座す我等が主よ」

「私の力を我が兄に貸すことを赦し給え」

「この血に宿る、邪に打ち勝つ力を」

「我が兄を苛む痛みを、苦しみを、悲しみを、弱みを、それら全てを取り除く力を」

「兄上を苦しみからお救いください」

「主よ、私たちをお導きください」

「その奇跡の力を私にも」

「ブレードットの血の力を、兄上に！」……

子どもが司祭様の真似をしたかのような、てんでバラバラで見るに堪えない祈りの言葉の羅列。これで普段は敬虔な信徒と呼ばれているから呆れるもんだ。

でも、兄上を救いたい気持ちは、純粋な言葉によつて届くと信じる。

女神ソテイスよ、私に力を。

オレは短剣で指先を切り、その指で魔法陣に触れた。

魔法陣は黒魔法のように薄く赤く染まり、魔力は僅かに赤い光を帯びて兄上を包む。ブレードットの紋章の力が、オレにも兄上にも力を与える。——本来なら兄上に与えられているべき紋章。そうでないから、家督騒乱目当ての強欲なヤツにオレらが巻き込まれて、兄上に要らん心配をかけることも……、なかつたのに。こんなところで兄上に力を与えてくれるとは……！

ぱんっ、と何かが弾ける音がして、兄上の左肩まで上つていたおぞましい物質が弾けて崩れた。

よし、祈りが届いた！——と思った。

「あに、う……ええ？」

だが、赤黒い物質から解き放たれても兄上はまだ俯き、黙り込んだままである。目は空虚で、オレを見ない。

魔獣化は止まった。あとは……、兄上次第なのか……？

「……何でだよ……、兄上……ッ！」

揺さぶるのも危険な気がして、オレは齒噛みした。

けれど、心身共に屈強な兄上ならば必ず戻ってくると信じて、今はアリスタフさんの治療を優先させた。

困難の嵐は払っても、兄上がそれを拒みきらねば、晴れは来ない。

オレは祈った。主に。兄上に。オレが、兄上にとつての困難を断ち切る剣になれるように――。

4—5 嵐を拒む

「兄上！」

私は執務室で西部地方の食糧事情の嘆願書に目を通していた。ふと、弟が私を呼ぶ声があった。顔を上げたら、老臣が私の傍らにいたが、弟の姿は見えなかった。

私の空耳をよそに、老臣は掠れた低い声で訃げる。

「陛下が……身罷られました」

その言葉は、数日前から約束されていた父王の死が遂にやって来てしまったことを教えてくれた。

父上。二十余年に亘る王の務め、お見事でした……。

すぐにでも父上のもとへ行きたいが、きつと今は母上やドウドウ、危篤の報を受け駿馬で駆けつけたフラルダリウス公が、父上の傍にいるだろう。私が向かえば彼らは譲ってくれるだろうが、譲ってしまうのだ。彼らの別れを惜しむ時間を、私は奪いたくない。

だから、私はいつも通り仕事をこなすことにした。ここ数年は父上の補佐官と称して、討伐や渉外などの身体の移動が付くものはほとんど私が担っていた。変わらない。

政務も行うようになるだけだ。何も、変わらない。変わらないでほしい。

「では、手筈通り諸侯と大司教殿下に訃報を知らせて、秘匿に葬儀を行う。民への公表は翌節。戴冠の儀は翌々節か、せつかくだから雪解けの頃でも、聖教会との折り合いの良
い時に……——」

私は執務室に来る人去る者に淡々と指示を出していく。

「——父上の予定されていた会議の類は一週から最短でも一節延期してほしい。それと、退官を望む者を募つて、その分だけの雇用や所属異動を……——」

執務室を訪れる者の中には、泣いている者もいる。悲しみを隠しきれない者も少なくない。一方の私は——、取り乱すなんてとんでもない。私は正式に王になるのは後となくれども、事実上の彼らの王なのだから。

悲しくないのではない。私は、父上の望むことをしているだけだ。これからは、これからも、父の跡を継ぎ、皆が日々を紡げるように働く。これが私の役割。生きる方法。それだけを考えて生きていけばいい——

ぱんっ。

何かが弾ける音がした。

その音は驚くことに私の頬から鳴っていた。厳密には、私の右頬を平手で叩く音だった。

音のわりに痛みはなくて、ほんの少しぴりぴりする頬を押さえ、音を鳴らした人間を探す。

もちろんその者は目の前にいた。私より背が低い。母上より少し高いくらいのも、やや青い白髪はくはつの少年が私を睨み付けていた。私と同じ碧の瞳で。

「お前、まだこんな所にいたのかよ！」

私が執務室にいることは何も問題ないはずだ。父上のもとへ行くには早すぎるくらいだ。あまりにも理不尽な言われように、私は僅かに苛立つ。そもそも、君は誰だ。王城に出入りする人間は、尖塔の門番や厩舎の下女まで知っている。この私が知らないということは、この者は部外者だ。どうやってこの場にやってきたんだ。

私が黙ったまま彼を見下ろしていると、少年は私の手を取り引つ張って先導する。思いのほか力が強い。私も力に自信のある方だが、僅かにこの者の方が上回っているようだ。

執務室にいる人間たちは彼を止めようとしめない。それどころか、動きが止まっている。人形劇の黒子が、人形を動かす棒を放り出したかのように。何の表情もなくそこにいるだけだった。

さて、彼と執務室の扉を抜けると、王都を一望する小高い丘に着いた。彼は私の手を離すと、丘の淵に座って王都を眺めていた。

「ほら、座れよ」

私の状況や感情を知ってか知らずか、この礼儀知らずは彼の横の地面をぼんぼんと叩く。

「いや、私は戻つて政務を続けなければ……みな困るだろうし」

「王子がひとりいなくなつただけでポロポロになるような政治でもやってんのか？」

私たちの築いてきたものを挑発するように言われ、流石の僕も頭に來た。

「そんな訳ないだろう。武官も文官もみな優秀な者ばかりだ。少しくらい長がいなくらいで立ち行かぬ訳ないだろう」

「じゃあ、ちよつとくらい良いだろ」

少年は未だ王都を眺めている。我が故郷は、城や街の白い壁が昼過ぎの陽光を反射して輝いて見えた。

その情景が美しく、僕は彼の横に座つた。

「もしかして、君も私が王になるべきではないと言うのか？」

幼い頃に抱いた不安は、いつだったか誰かに背を押されて消したはずだった。

それなのに、こんな愚問を口にしていた。拭いきれなかつたのか、ここに來て不安が再來したのか、僕には分からない。

「はあ？」

僕だって意外な発言に、少年も意外を超えて呆れたように聞き返してきた。

「だって。僕の紋章は、昔……人を不幸にするって言われてきたんだよ。僕が王になったら、国の人々を不幸にしてしまうかもしれない……」

何でこんなことを言っているんだろう。でも、今言わないと、いつの間にか根付いて取り返しがつかないことになっていたような気もして、僕の口はするすると言葉を吐いていく。

「飢饉が起きたり、暴動や戦争が起きるかもしれない……」

みんなが悲しむことは、歴史書の中で学んだ。それをさせないために、父上がどれだけ尽力したか、知っている。それを……僕は無駄にしてしまうかもしれない。

「なるほど。自他問わない不幸な事象を、自分のせいにするんだな」

半ば馬鹿にするような物言いに、僕も反論する。

「君に何が分かるって言うんだ！ 皆の悲しみを背負い、贖罪のために生きる苦しさを……ッ」

両親の半生を聞いた日、僕は眠れなかった。苦しみを負いながら、それでも戦うお二人の強さと辛さを知った。尊敬する気持ちと、二人のようになれるか不安な気持ちと、弟や妹にそんな気持ちをさせたくないって決意と、いろんなことが思い浮かんで、眠る

ことなんて許されなかった。

「飢饉が起きるのは紋章のせい、戦争が起きるのも紋章のせい……？」

少年は確認するように聞いてきた。そうやって言葉にされると、論理性がない気もするが、実際に僕が言ったことだ。頷くしかない。

「なぜ民草の食べるものが無くなったか調べもせず、新たな道を拓かず……争いの種に目を光らせず、不満を拾いきれず、大義を掲げて人を死なせる……」

「な……」

少年は冷たい表情で淡々と語る。何でそんな酷いことを言えるんだろう。

「それは全て自分のせい、苦しみを負えば良い。……何てラクな道だろう、とって」

「……………」

悔しいけれど、彼の言うとおりだ。

「雁字搦めの思考に拘束され、俯いて現実を見る努力をせずに停滞する」

続けられた言葉は、僕の生き方や考え方を捉えていた。

厳密には、昔の僕の考え方。ブレーダッドの紋章を持った弟が生まれたなら、彼が継いだ方が王家としての体面が保てる——と言いながら、僕は王の位から逃げようとしていた。

そんな迷いを抱えたまま生きていた。でも、確か……。

「気付いた？」

あの時も、この少年に諭されて、自問自答し続けて、僕は——私は、答えを出したのだった。

「……ごめん。また囚われるところだったよ」

少年は僕の言動を赦すように首を横に振った。

「未来を拓けよ。留まって、抑えつけるだけじゃ進めない」

言いたいことは分かるが、彼の望むことは分からなかった。僕は首を傾げる。

「だー！ 臣下や兄妹の前じゃ泣きたくないから我慢してたんじゃないのか？ 泣くなら今しかないぜ？」

——僕すらも無意識に閉ざした思考を、彼は開けて照らした。

彼みたいな存在は、何と呼ぶんだっけ。物語の中で、新たな展開を生むために立ち回る、少し悪戯好きな仕掛け人のこと。まるで昔の僕の考え方と真逆な存在だ。

と、その前に——。

「……父上……っ……」

彼の存在の答えを見つける前に、僕は父を失った悲しみに心と身体を委ねることにした。悲しみは涙になって溢れて止まらない。もつと話したかった。もつと剣を交わしたかった。共に歩みたかった。また抱きしめてほしかった……——。

少年は僕を見ていなかった。未だ輝く王都を見つめていた。

「誰も見てないから、いっぱい泣けばいいんだ」

優しい声が僕の心を満たしていく。

そして。

「お前には立派な剣と翼があるじゃんか。ダヴィード……」

彼は私の名を呼んだ。呼ばれた瞬間、全ての道が繋がったように、全て思い出した。全て分かった。

私の涙は雨となり、私の嗚咽は風となり、やがて風景は嵐の中の森へと移る。雷の鳴る音が遠くで聞こえる。

私は全てが分かった驚きと安堵と、心身の疲弊から、身体力が抜けた。からんと私の剣が手から落ちる。

がくりと膝をついた私の横には、倒れ込み意識を失っているダヴィードと、彼に回復魔法を掛ける二カがいた。

「兄上が……！ ブルトガングを離した！」

そうだ、私は結界の干渉を受けて魔獣に身を落とすところだったのだ。

「心配をかけた。本当に、危なかった……ありがとう、二カ」

ブレードダッドの家を継ぐ夢現を見たことは、偶然ではないだろう。私は理学や魔法の

類には疎いが、確かにニカの存在を感じた。だから、弟にはどれだけ感謝しても足りないだろう。

そして、そこから抜け出す最後の手助けをしてくれた――

「……ダヴィードも、ありがとう」

私は、嵐にのみ身を委ねることは拒む。持つ力も持たぬ力も、私そのものだから。足掻けるだけ足掻いてみせる。ニカやリーザの力も借りながら。

それを教えてくれたダヴィードに、感謝を述べた。

と、ほのぼのしている訳にはいかなかった。ニカが青い顔して現状を伝える。

「アリストフさんにも結界から魔力が飛んできて、気絶して、時々……脈が途切れる」

「そんな……」

殺しても死ななそうな、不敵な笑みを浮かべるダヴィードの命が途絶えんとしていることは、私にとっては信じられないことだった。

狼狽える私たちを叱るかのように、近くに雷が落ちて雷鳴が響いた。

4—6 嵐を救う①

俺はある家の前にいた。周囲は森で霧靄に包まれて遠くまでは見えないが、近くに小川が流れていることは音で分かる。家の壁に沿って、割った薪が集積されている。少し離れた所に小さな納屋。冬が近いからか、煙突からは灰色の煙がたなびいていた。近隣に村があるような雰囲気ではない。そのため山の管理小屋や小領主の避暑地のような立地と佇まいだが、いやに生活感のある家だった。

そして、目の前の家は、実際に見たことはないが、知っている。

俺は届けに来たのだ。真実と、それを失わせた事実を——。

くくく

俺が意識を取り戻したのは、ミロスラヴの方のダヴィードが目を覚ましてすぐだったらしい。

気絶していた俺は、はたと気が付くと、重苦しい鼠色の雲はあれど荒れ狂う風雨が消え去った空を見ていた。

「アリストタフさん！」

空を遮るように視界に割り込んで来たのは、ニカノールとミロスラヴの方のダヴィー

ド。二人は俺を見て心底ほっとしたような表情を見せる。

「時折脈が止まっていたので……心配しました」

半身を起き上げた俺に、立ち上がらないようにとニカノールは制しながら説明してくれた。

「脈……」

そう言われて、俺は自分の心臓あたりを手で押さえた。どくんどくと普段通りの規則正しい脈打ちを感じる。

俺の心臓は少し特殊である。

特徴的なのは、この世界の先生のように紋章石が心臓部分にあること。ただ、紋章石が心臓の代わりとなった先生とは異なる。俺の身体の中の紋章石はあくまで心臓の動きを補佐し、心臓は紋章石の力を常に使い続けている。言わば一心同体の関係であるということだ。俺の心臓が止まれば紋章石は力を失う。逆に、紋章石が力を失っても、俺の心臓は動き続ける。もちろん、それ以前の力に劣りはするけれど。

これは、かつて心臓が動かなくなつた俺に組み込まれた応急処置の名残だ。心臓が普通に動くようになった今、紋章石は心臓のお供として俺の体力を支えてくれている。

ところで、紋章石は女神の眷属の心臓だった、とされている。俺の紋章石は嵐竜と呼ばれた眷属の元心臓らしい。嵐竜どのの影響もあつてか、俺は相手の持つ紋章が何とな

く分かる。紋章が分かるというよりは紋章特有の雰囲気を感じる。その雰囲気の種類から、相手の紋章を推察できるといった具合だ。

便利ではあるが、時折困ることもある。たとえば、聖墓でこの世界のせんせいに会った時。彼は神祖の心臓を持っているようで、この神祖を真の主としていた嵐竜どのが、主に会えた喜びやら何やらで俺の気持ちそつちのけで心臓をばくばく言わせていた。俺の世界の師の心臓は人間のそれなので、なかなか体験しない動悸に焦ったものだ。

そして、ブルトガングが三振りあるこの現場は、自分のそっくりさんに会ったようなものだから、驚き動揺し、自分の力で自分を叩き壊す感覚に悲しんでいた。

脈が云々というのは、おそらく、紋章石がそこに倒れている獣へ力を貸そうと俺の心臓の支配下から抜けようとして、心臓は脈打つどころでなくて、しばし動けなかった……といったところだろう。

目の前の獣からは、力を感じない。俺の心臓は失敗したようだ。
つと、遠くから声がした。

「ダーヴァ兄様〜!!」

エリザヴェエータの声だった。結界の気配が消え、周囲から喧噪も聞こえてきた。控えの作戦部隊が突入し始めて、他の魔獣の討伐を始めたのだろう。エリザヴェエータは結界の破壊に成功したのだ。

迎えに行つてやりたいが、心身ともにボロボロの俺たちは、待つしかできなかった。それにしても、あの女性——もとい、この世界の母上は結界の消滅を阻止しようとはせず、あろうことか獣を「殺さないで」と言つていたことは疑問に残る。また、モーリスと思しき獣も、自分を取り込んだ英雄の遺産を、それも二振りも見て何も反応を示さなかつたのも、不思議なことである。

「彷徨えし獣は、普通の魔獣より少し大きかつたそうだけど……」

俺の考えを読んでいたかのように、ダヴィードは呟いた。

「普通の魔獣……より、何なら少し小さいくらいに見える、オレには……」
「……」

ニカノールの返事に、俺たちは黙り込んだ。真実は、俺たちの想像を超えるもので、それを俺たちは乗り越えられるだろうか——そんな胸騒ぎがした。俺の勘か、嵐竜どのの警告かは、知らん。

「お兄様！」

無事な兄を見つけたエリザヴェータは、天馬を連れてこちらへ駆け寄ろうとしていた。

その時だった。獣がその身体を風化させ始めた。

身を覆う黒い物質はさあつと粉となり、風に乗って消え去つて行く。

「——！」
座り込んでいた俺は、真つ先に「核」になった「それ」を見た。瞬間、エリザヴェータに魔力で作った軽い衝撃波を放つ。本来は牽制に使う、殺傷性のないものだ。

「ダヴィード！ リーザに何をするんだ！」

ミロスラヴの方のダヴィードが俺を批難するが、説明している時間が無い。

立ち上がってエリザヴェータの元へ向かおうとする俺は、ニカノールに制止されて動けなかった。代わりに、ニカノールは妹の元へ駆け、彼女の顔を自分の背中に押さえ付け、後ろ手で彼女を拘束した。

「ニカ兄様？ なにするの？」

「……………」

批難と困惑の声を、ニカノールは無視して飲み込んだ。彼は、俺の意を汲んでくれたのか、エリザヴェータに残酷な現実を見せるのを阻止したのだ。

一方のダヴィードは、獣が残したのを見て、しばし絶句していた。

「——」結果はいくらでも壊して良いが、殺さないで、私たちのためにも——」

あの女性の言葉を掻い摘まんで復唱するダヴィード。俺たちは、彼女の言葉の真意をこの目で確かに見た。

「私は、異世界に来て、助けを呼ぶ声に導かれ、ここまで来た。得たものも多い。だが」

獣の居た所には、一振りのブルトガングと、一人の小さな子ども……三、四才くらいの男の子が横たわっていた。

その身に命が宿っていないことは、その子の土気色の肌が語っていた。獣の中で生きていたその子は、獣の動きが止まった時点で――。

「私は、私は……私は人を……子どもを……！ この世界の『ダヴィード』を！ 私を！
こ、ころし、殺してしまった……この手で！」

恐らく、ダヴィードⅡミロスラヴは人殺しの経験はないだろう。……あつたとしても、大義を掲げた賊討伐くらいだろうか。

喩え人が獣となり、もう人の姿に戻してやれない、助けられないモノになっていたとしても。戦士や騎士でもない、罪もない、まして小さな子どもの命を奪ったこと、そして何より――この世界の母上の子ども、つまり同じ「ダヴィード」をこの手にかけて彼の絶望は、同じダヴィードの俺とて、計り知れない。

「う、う、う……うあああああああ……」

曇天の下、ダヴィードの号哭が響いて止まなかった。

くくく

俺の腕の中には、モーリスと思われていた魔獣から出てきた男の子――ダヴィード君の亡骸が収まっていた。彼からは、懐かしい匂い、特にラヴァンドラの香りがする。

あの時の夢は、およそ予知夢の類だったのではないかとすら思う。予知夢の可能性を否定するフオドラから来た俺がそう思うほどに。

俺がこの家に来ることは、最初から決まっていたかのようだった。

だから、あの時と同じように、立ち上る煙をぼんやりと見ていた。

「ダヴィードおにいちゃん？」

ふと、足下から小さな声があった。見ると、何とも可愛らしい幼女が俺を見上げていた。柔らかなような黄金の髪を持つその子は、透き通る碧眼を宝石のようになりくりとさせてこちらを見つめている。お人形さんみたいに愛らしいその姿、と表現してもまるで問題ないほどの子であった。おそらく、この男の子の妹にあたる子だろう。

この子を見ていると、ミロスラヴが弟と妹を何かと甘やかしている理由が、何となく分かる気がしてくる。大変可愛らしい妹だ。命に懸けても守りたいと思ってしまうくらい。いつまでも見つめていたい。

彼女は俺の返答を待っているのか、じつと俺の目を見て離しはしないが、続きを話してもくれなかった。

しばらく無言で見つめ合っていた。この幼子にいきなり兄の亡骸を見せたくなくて、俺は屈まなかった。

「おかあさん、おとうさん。ダヴィードおにいちゃんがかえってきた！」

彼女は踵を返して裏口と思われる部分から家の中へと入って行った。

その直後、玄関が勢い良く開かれ、中からは女性が飛び出てきた。先程と装いは違うが、獣の前に立ち塞がった女性だ。

彼女は、こちらを見るや否や、麗しいお顔は今にも泣きそうな表情へと変貌し、そのまま「俺ごと」抱き締めた。絶望の中から小さな希望を拾った彼女にとって、俺は何にあたるのか、分からなくて、震えがした。

「もう二度と、目にするこすうでできないと思っていたわ……」
「ダヴィード」……」

俺の名前は、俺のために呼ばれなかった。俺と彼女の腕の中にあるダヴィード君に対して使われたんだ。

……獣の身体が風化する前から、そう、もともと、予感があったんだ。あの時、謎の騎士が俺たちの名を呼んだ時、いやに優しく切なかった。妻を助けた者に向けたにしている、やけに哀しみを帯びていたから。あれは、自分の息子に対して発した言葉だったのだ。

「会いたかった……」

母親の言葉は、心の底からの言葉は、魂の抜けた亡骸だとしても子に掛けられる言葉は、温情と寂寥が混ざって俺の心を揺さぶって狂わせた。

うん、俺もだよ、母上。

母というものがよく分からない俺にとって、その眼差しその温もりは物語の中の幻想だ。包み込まれる温もり、掛けられる愛のことば。印象は記憶の残滓に残っているが、実感はとも覚えていない。だから、幻と同じだ。

俺だって、会いたいよ。会いたかったよ。会いたかった、って言ってほしかったよ。目の前にお互いがあるのに、どうして俺にはそう言ってくれないんだよ。理由は分かっている。だから、俺は身を硬直させて、ただの添え木になった。

添え木の視界は自由だった。そのため、玄関口から現れたその人にもすぐに気が付き、目も合った。

「ダヴィード……う？」

金の髪、隻眼の碧。黒の鎧。謎の騎士が兜を取り去った姿がそこにあった。ダヴィード君の父親だった。

母親が顔を上げ、うなずいた。父親は無言で近づき、やはり「俺ごと」、優しく二人を包み込んだ。

「ありがとう。ダヴィード。帰ってきてくれて」

母親が泣きながら子に声をかける。涙は幾筋も流れ、ダヴィード君の顔を濡らしている。彼の帰還を待ち望みながらも叶わぬ夢と思っていた母親は、何度も礼を言っていた。命が絶たれたことを嘆くよりも、こうして亡骸となっても帰ってきてくれた喜び

を、夫と共に表していた。

「良かった、また会えて、本当によかった……」

「ああ……」

二人の涙を拭いながら、父親も震えていた。

俺の心は、愛と慈しみを以て寄り添うふたりを見て、喜びと悲しみを爆発させていた。心臓がばくばく言うほどに、喜怒哀楽含むありとあらゆる感情が飛び回って、どれが俺の気持ちか分からなくなっていた。言葉に出来ない心を、涙がスウツと頬を駆けて行った。

どうせ気付かれぬ涙だと思っていたが、何故か母親が俺を見ていた。俺はひどく驚いた。

「貴方も、ダヴィードの身体を傷付けないように……風化させないように斃してくれたのね……ありがとう……」

魔獣化していたとはいえ、ダヴィード君の命を絶つたのは俺なのに、怒ることも取り乱すこともせず、俺に礼を言った。覚悟が決まっていたのかもしれない。

「……は、い……」

モーリスと違って魔獣化から年月が経っていないこと、あの結界が媒介になることでダヴィード君自体の魔獣化は大方解けていたこと——、色々説明したかったが、何より

も存在を認識されたことが無上の喜びすぎて、上手に言葉が出なかつた。これでもエドマンドのおやつさんに師事しているから、剣より舌で戦う方が多かつたのに、おかしいな。

「私が剣を嚴重に保管していれば、この子は……——」

母親は子の亡骸に目を落とす。涙が尽きたのか、声は震えておらず明瞭に、だか昏く聞こえる。

この顔、この声。俺は知っている。大切なものを守り切れなくて悲しみ、悔いる人のものだ。俺は、両親たちのことを語る人の大半がこのような表情を見せることを、知っている。

「大きくなるまで愛してあげられなくて……ごめんね……」

この言葉に、俺はびしやりと頬を引っぱたかれた。

「幸せにしてやれなくて、すまない……」

父親の言葉にもまた、引っぱたかれた。

今まで、もしも母上と父上はまだ存命なら、と想像することはあつた。だが、死にゆく時のお二方が、どんなお心持ちだつたかは、分からなかつた。

「あの」

俺の口に流暢さが戻る。ただし、戻つたのは流暢さだけで、論理性はまだどこかで遊

説中だ。

「俺は物心つく前に両親が亡くなってしまっていて……、お二人とは逆の状態です。小さい頃に亡くなってしまったから、俺はお二人のことをほとんど思い出せないんですけど」
目の前の二人と俺の両親を「お二人」と混ぜごっちゃにして話してしまっているため、生死に関して大変な矛盾が起きて、話がヘンになっている。だが、そこはその矛盾を以て二人を勇気付けたい己が我が儘を貫くことにした。

「大きくなって振り返ってみると、俺は両親からたくさん愛されていたんだなあって実感するんです。お二人が亡くなった後も俺が生き延びられるように、手を尽くしてくださった跡が、たくさん、たくさん見つかるんです」

本人たちに自覚はなくても結果として、二人の子どもだから、という理由で守ってもらったこともある。それは、お二人の人脈・人柄ゆえだ。お二人が俺を手放さなければならなくなると、俺一人になったとしても生きていけるように。

「それを見つけれられるのは、記憶ですら曖昧な両親から受けた愛を、確かに知っているから、なんです。分からない頃から分かっていたから、分かるんです。愛されていた、幸せだった、幸せだ、愛されているんだ、って」

俺は、生きています。

戦後間もなく、疎開先のゴータイエ領へアネットがすつ飛んで来て、「道連れになんて

させない」——って泣きながら俺をドミニク領へ連れて行ってくれた。アンはメーチェの代わりを務めてくれたのかもしれないが、メーチェが俺の乳母になってくれた発端は両親だ。謎の組織に誘拐された時に助けてくれた人は、両親の知人だと聞いた。ある旧王国諸侯が俺に気付いた時、政治利用されたくなくて転がり込んだ先のエドマンドのおやつさんは、きつと危険だと分かっていたながら「押しかけ弟子」と称して何年も傍に置いてくれた。俺を通して、お二人の姿を見たかったのだろう。

アンは俺の紋章を隠す方法として、魔法を教えてくれた。魔力の量が少ないことを補うために、戦場で魔法が使えなくならないようにと、一緒に魔法効率化に取り組んでくれた。俺が食い扶持を稼ぐために就いた外交官の立場も、ゴージェイエ家の方々が後押ししてくれたおかげもある。スレン族との抗争で殺されかけた時は、ドウドゥーがくれたダスカー模様の外套が命を救ってくれた。

両親がくれた出来事たちは、走馬灯のように駆け巡る。一つ一つ取り出しては説明して……、もういいかな、冒険譚並に長くなってしまう。

俺が今さつき知ったのは、両親の想い。「大きくなるまで愛してあげられなくてごめんなさい」。

父上も母上も、俺を愛してくれていた。同時に、国を治め、愛していた。国を背負うことで俺を愛し続けられない可能性を憂慮していたことくらい、とつくに気付くべきだった。

た。

「子も、親も、同じ想いです。大きくなれるように愛してくれてありがとう……この根源は、生まれた時からずっと続く両親の愛。俺はそう思う。だから、ダヴィード君も……、事故のことは残念だけど……、それまでは、幸せな時間を過ごしていたことは間違いないと思います。それは、どうか否定しないでください」

殺した張本人が子を亡くしたばかりの親御さんにする話じやないような気がするけれど、俺の我が儘で、もういない俺の両親の代わりに聴いてもらいたかった。

「……ありがとう、少し、救われる想いだわ」

母親は再び流れた涙を拭って、口角をおそらく無理矢理に上げた。上げてくれた。

「君の名前を訊いてもいいか？」

「へエ？」

父親から突然の質問に、俺は上ずった変な声を出してしまった。

「弟か妹かは分からないけれど、赤ちゃんがいるんです」

母親は、悲しみを見せながらも腹を撫でた。まだ膨らんでいないが、懐妊していることが判明しているのだろう。

「もし男の子なら、君の名前を参考に付けたい」

………そんな名誉なことがあるのだろうか、ダヴィード君の命を奪ってしまった俺

が、新しい命の名前になって良いのか。

ともすると、命を奪ったことよりその身体を守り連れてきた恩が勝っているのか……？

「アリストアフ」

逆だ。

「……ダヴィード、です。本当です」

二人は驚いた様子で俺を見つめる。俺は証拠として、腰に備えてある短剣の柄を見せて、自分の名前が彫り込まれていることを見せよう。

「……ねえ」

短剣を戻している俺に、母親が声をかける。

「もし、貴方が良ければ……この子たちのダヴィードに……兄になってくれないかしら……？」

「……え？」

この子たち、というのはお腹の子とさっきの女の子のことだろう。兄になる、ということはお二人の息子になるのとほぼ同じ意味だ。

「貴方は天涯孤独の身で、私たちはダヴィードを失ってしまった……。いなくなったダヴィードの代わりだなんて言いません。でも、こんな偶然……主が遣わした出会いのよ

うで」

母上は、まるで聖句を宣べるように美しい声で話している。それは正しいことだと主張せんとばかりに。父上も、これと言って反対する様子はない。

「……………」

俺が望めば、両親の愛を、弟妹たちへの慈しみを、手に入れることができる。

「思うのだが……、お前は別の世界から来た人間ではないか？」

現実離れた話を好みそうにない父上が、突然そう切り出した。母上からなら隠せそうだった動揺も、意外な人物からの指摘によって崩されてしまった。

「もしかすると、異世界の俺たちの子どもなのかもしれないな」

何でそこまで分かるんだ、と思ったが、俺も二人の紋章の雰囲気分かるから、両親だと確信したのだった。父上め、同じ紋章の雰囲気を感じたのかもしれない。

「じゃあ、私たちの子どもと言っても過言ではない……………」

確かに、世界が異なっているも血の情報としては、間違いなくお二人の子だ。だから結界を通ることができた。それが証明してくれる。

「ダヴィード。私を抱き締めてくれますか？ 私はこの子を抱いているから、あなたから」

言われるがままに、ダヴィード君を抱く母上を抱き締めた。なんだか逆な気もするけ

れど、それは、俺が大きくなれた証でもある。嬉しくて、切なくて、涙がぼろりと転がっていった。

そして、俺の上から、父上が全部覆うように俺たちを抱き締めた。そして、三人で顔を付き合わせて、泣いて、笑った。

「ダヴィード、ダヴィード……」

母上が俺の名前を呼んでいる。愛おしそうに。父上も俺を見つめている。隻眼の分、倍の愛情を込めて。

親を失った俺、子を失った両親。逆の立場の俺たちだから、逆に親子揃うことができ

た。
嬉しい。あまりの嬉しさに、胸が爆発——しそうにない。心臓の鼓動を感じないから。

「……………う？」

疑問に首を捻るも、かつて師も心臓が動いていなかったと言うし、この世界の先生も動いていないと言っていた。どっかの世界の女版先生も動いていないらしい。

何より、俺は、生きている。幸せだと感じている。だから、嬉しすぎて逆に心臓が止まるくらいが丁度良いと思う！

「ダヴィード！」

またこの声だ。さつきから、ここには入つて来られない人間の声が名前を呼ぶ。頭の中から響き、更には空間のあちこちからぼわぼわと聞こえてくる。確かに俺はダヴィドだが、ダヴィードは二人も要らない。だから俺が求められたんだよ。

「ダヴィード!!」

まだ聞こえる。さつきよりも大きな声で聞こえてくる。いつもは明瞭で爽やかな声だが、焦つてその名を呼ぶ。

だが、俺にとつてどうでもいいその声は、お二人が俺を呼ぶ声にかき消されていく。ありがたい。俺は過去を振り切つて、未来に生きるんだ!

「おとうさん、おかあさん。ダヴィードおにいちゃんは?」

妹が兄を求めてやつて来た。彼女からでは、ダヴィード君だった彼の姿は見えないの
だろう。

「ダヴィードはね、少し離れている間にぐんぐん大きくなって、戻ってきたのよ」

母上がそう紹介してくれた。本当は逆なんだ。時間の流れを無視して大きくなったんじゃない。大きいダヴィードが時を遡つただけだ。

ああ、幸せだ。俺は望んでも手に入らないと知っていたから、願うことすらなかった現実が目の前にある。両親。きょうだい。ずっとここで生きていたい!

「ダヴィード!! 逆だろう!」

一方、必死に俺を呼ぶ声が響く。いい加減、家族との団欒に集中したい。そもそも、さつきから逆、逆、逆だ、つてうるさい。何が逆だと言うんだ。

逆なのは俺の心臓だけ――

瞬間。

全部が逆さになった。血液が逆流し、頭は地へ、足は天へ投げ飛ばされた。景色が、父上の眼帯を中心に、左回りに渦巻いて意味を成さなくなる。

。だり戻逆て全アア

《left》全部逆なのは、俺の存在意義を示すための手がかりに過ぎない。《le
ft》

！！いたいにここ、ダヤイ

《left》お前は――俺は知っているはずだ。《left》

《left》。うろ戻《left》

目の前の両親の愛を拒むのか？

《left》。いなやじこは所場きべるいの俺《left》

——あの子に話したなあ。最近流行りの紋章象徴芸術。紋章を持っているかどうかは関係なくて、紋章の意匠を身に纏うことで、紋章が象徴する意味を身に着ける、つてヤツ。

獣の紋章——モーリスの紋章の主な意味は「欲望、誘惑、拘束」など。

——この紋章に負の意味を与えられたことに憤る彼女に、象徴芸術の話には続きがあると伝えた。

それぞれの紋章を逆向きにすると、逆あるいは異なる方向へ意味合いが変わる、ということを。

——あれ。いつかの記憶が蘇る。

暗い地下で、泣いていた俺を助けてくれた誰かの声。

「——あれは逆向きになって、あなたの心臓の一部になった——。——全部知って、ここまで来てくれたら……嬉しく思うわ——」

いつかの記憶——。

あの声に導かれて、俺は、無知を切り裂いて進んで来た！

俺は何を期待されたの？

景色が右回りに回転して、正しい位置に戻る。足は地にあり、頭も……地にあった。眼前に広がるのは泥の海であることを、僅かに開いた口がその味を知らしめて教えてくれた。

「大好きな味にとっぷり浸かるのも悪くはないが……生憎こちらはそれを否定し続けているんでね……！」

唾に混ぜて泥と悪態を吐き捨てる。大変行儀が悪いが仕方ない。嵐が唾の成分を有耶無耶にしてくれると思うので許していただきたい。

紋章石が空っぽのブルトガングを再び握り、立ち上がる。少しふらつくが、問題は無い。

「アリストーフ！ 良かった。中から魔獣になるとか聞いたから心配したよ」

心の底からほっとした様子でミロスラヴが俺の顔を覗き込む。かなり狼狽したのだろう、顔色が悪い。物腰穏やかを貫く彼が、このような場合どう狼狽したか見たかったかもしれない。

モーリスの身体はまだ風化していない。記憶と違う。幻覚の類を見せられていたのだろう。はて、どこから俺は倒れたのだろう。

「脈が止まってたんですけど……」

青い顔をするニカノールとその報告に、幻覚の時と似ている。俺はこれ幸いとにやり

と笑う。続きを促す。

「結界による最後の攻撃を受けた時にアリストフさんは倒れた。脈とか心臓かな——は、ずっと止まってた訳じゃないですけど、止まる度に兄上が叫んで……」

「まったく。いつもなら君が私たちを救うのに、立場が逆なのだから」

ダヴィードと呼んでいたのは、長く呼ばれた名の方が君が反応してくれそうだったから、とのことだった。結果として戻って来られたのもミロ斯拉ヴのダヴィードの声かけのおかげなので、よく分からない理不尽な言われようは一応受け取ることにした。

「なあ、結界は最後の標的を俺にした……？」

「ああ。アリストフさんへの攻撃の後は何も起きていない。結界の気配もないし、リーザがうまくやってくれたんだろう」

「なるほど。ありがたいね」

大事なのは事実。確かに結界の崩壊を感じる。それらを確認すると、俺はダヴィード君がいるであろう獣の身体に近づく。

「……いけるかも。二人とも、手伝ってほしい」

俺は始める。俺が凶星だからこそできることを。凶星だからこそ、やらなければならぬことを。

4—7 嵐を救う②

俺はある家の前にいた。嵐は止んでいた。周囲は森で、相変わらず霧靄に包まれて遠くまでは見えない。近くに小川が流れていることは実際に渡って来たから分かる。やっぱり煙突からは灰色の煙がたなびいていた。山の管理小屋や小領主の避暑地のような立地と佇まいだが、いやに生活感のある家だと、改めて思う。

この家は、実際に見たことはないが、知っている。

俺の腕の中では、モーリスと思われていた魔獣から出てきた男の子、ダヴィード君がすやすやと寝息を立てていた。

俺の心臓の紋章石、ミロスラヴの方のダヴィードの血、ニカノールの魔力を貸し与えて、俺たちは獣の身体と人間体を完全に分離させることができた。

もつとも、結界の術式の中に「子どもの命を守る」内容が入っており、紋章石の支配からダヴィード君は解き放たれ、あとはどうにかして魔獣の身体と人間の身体を別つけだつたのだ。そのためには同じ紋章石が必要だった。

異世界からやって来た俺たちは、俺の紋章石から力を送って、魔獣の中のブルトガンをグを反応させ、その際に身体を崩壊させることで為し遂げることができた。

彼からは、懐かしい匂い、特にラヴァンドラの香りがする。母の好きな香りだったそう。俺も、同じ匂いを嗅いでいたかもしれない。

……とすると、デアドラの夜の夢は、やっぱり予知夢だったのではないか、なーんて疑問が立ち上る。不可解な現象を否定ないし解明する理学が大好きな俺が思うほどだから、よつぽどなことだ。ほんとに。

さて、今までと同じように、立ち上る煙をぼんやりと見ていた。

「ダヴィードおにいちゃん？」

ふと、足下から小さな声が出た。見ると、ダヴィード君の妹が俺たちを見上げていた。柔らかな黄金の髪を持つその子は、透き通る碧眼を宝石のようにくりくりとさせてこちらを見つめている。よくよく見てみると、ミロ斯拉ヴの方のダヴィードや、エリザヴェータに似ているようにも感じる。同じ親を持つている兄妹だからかもしれないけれど。ダヴィードは色味が同じで、エリザヴェータは女の子だからそんなもんかな。

彼女は俺の返答を待っているのか、じつと俺の目を見て離しはしないが、続きを話してもくれない。

しばらく無言で見つめ合っていたが、俺はしゃがみ込んで、彼女に兄の寝姿を見せながら言った。

「ダヴィード君が帰ってきたよ」

俺がそう言うのと、彼女はばあつと顔を明るくさせて、踵を返して駆けていく。

「おかあさん、おとうさん。ダヴィードおにいちちゃんがかえってきたー!」

裏口と思われる部分から家の中へと入って行った。それにしても、可愛い。お兄ちゃんを見た時の驚きと喜びに満ちたお顔よ。お兄ちゃんが大好きなんだな、いなくなつて寂しかったろうな、とか色々考えてしまう。

そうこうしているうちに、玄関が勢い良く開かれ、かの女性が飛び出てきた。こちら、もといダヴィード君を見るや否や、麗しいお顔は今にも泣きそうな表情へと変貌し、そのまま駆け寄ってくる。俺はダヴィード君を彼女に任せた。彼女はダヴィードの息を確認すると、泣きながら彼を抱き締めた。

「もう二度と、目にするこゝとすらできないと思つていたわ……!」

ダヴィード君は母の腕の中で相変わらず眠っている。マリアンヌさんは涙を指で散らしながら、我が子の寝顔を愛おしそうに見つめる。

「『ダヴィード』」

その名前は、俺のために呼ばれない。けれど、不思議と俺のことも呼んでくれたように感じた。

……真実はそうじゃなくても、俺がそう感じたという事実は、誰にも変えられない。だから、それでいい。

「会いたかった……」

うん、きつとダヴィード君もだよ、マリアンヌさん。

子を失う絶望の中から真逆の希望を拾い上げた彼女にとって、俺は何にあたるのか、俺はもう分かっていた。

母というものがよく分からない俺にとつて、その眼差しその温もりは物語の中の幻想だった。包み込まれる温もり、掛けられる愛のことは。記憶の残滓に残っている印象は、想像で補完する。とても覚えていない実感は、別の方法で享受する。俺の欲しいものが物語の中の幻想ならば、自分で飛び込んで現実を作れば良い。

もう二度と会えなくても、決して思い出すことができなくても、そういうことはできる。新たな道を拓くことができる。多くの人に支えられて歩んできたこの道の先に、お二人がいなくても、この道の源流はお二人だという事実が、俺の歩を進めてくれる。

その力をくれるのは――。

視界はある意味不自由だった。ダヴィード君とマリアンヌさんを見つめていたから。まるで呪いのように、俺は二人を見ていた。そのため、玄関口から現れたその人にもすぐに気付くことができなかった。

「ダヴィード……？」

金の髪、隻眼の碧。黒の鎧。謎の騎士が兜を取り去った姿、ダヴィード君の父親デイ

ミトリさんだった。俺が憧れ続け、追い続けていた父の姿とほとんど同じ見た目である。

色素の薄いほぼ白色の髪を持つ俺を見て、デイミトリさんは息を呑んだ。俺の肩ががっしりと掴み、俺の顔や髪をじっと観察する。そして、同じ色で俺の目を見つめ、問いかける。

「その髪……。痛い思いはしていないか？ 辛い思いはしていないか……？」

人として最大の心遣いはその言葉の中に見た。やっぱりこの人は優しい人だ。

心の底からの言葉は愛憐と同情を含み、俺を包み込んだ。俺はその柔らかい殻から抜けて、大きくうなずいた。

「はい。もう大丈夫です」

答えた言葉が全てだった。

「そうか。……良かった」

デイミトリさんは、俺の言葉の本当と嘘を見破っただろう。だが、それを踏まえてなお、俺が苦しみの中にいないことを喜んでくれた。

「……ありがとう。ダヴィードを救ってくれて……」

背後から、マリアンヌさんの声がした。俺は振り向く。デイミトリさんも二人に寄り添い、我が子の帰還を実感するかのようになダヴィード君の頬を撫でる。

たとえ獣の姿でも生きていてほしいと願ひ、それを打ち破られ、しかし生きて帰ってきたダヴィード君。マリアンヌさんは、何度も礼を俺に言ってくれた。

「仲間たちのおかげです」

事実ながらもこうして言葉にするのは恥ずかしい。照れくさい気持ちから、何か別の話題を探さなければ、と思考を回転させて見つける。あ。先生からの伝達事項、忘れていた。

「あとで先生が軍医殿を遣わすとか何とか言っていたので……もしよろしければ、診せてあげてください」

「ええ。そうね。……そろそろここを出る良い契機になるでしょう……」

「そうだな……」

ダヴィード君を抱え、微笑みかけるお二人の姿の中に——俺が知っているはずもない、かつての両親の慈愛を見た。美術画に写る聖人のように、街中で見かける親子のように、三人と俺たちはそこにいた。崇高だが手を伸ばせばすぐそこにある。俺は頬を緩めて微笑んだ。

俺はこの光景を目に焼き付けて、目を閉じて、もう一度、開けた。

「それでは、俺は……」

お暇する旨を伝えると、デイミトリさんがそれを止める。

「まともに礼も詫びもできていない。もう少しここにいてくれないか？」

大変光栄で、大変喜ばしいお申し出だが、きつとこれ以上いたら戻れなくなってしまうそう。それはそれで大変困るので、首を横に振る。

「いえ。俺はここに來ることができただけで十分です！」

これも本心。戦って生き残って、異世界のダヴィード君も救って、お二人の心を救うことができて、それをこの目で確信できて。これ以上望むことなんて何一つとしてないのだから。

「あのっ、せめてお名前だけでも教えてくれませんか？」

踵を返して去り行く俺に、マリアンヌさんは引き留めるかのように声を掛ける。子が母に縋るように。

ここは「名乗るほどの者ではございません」などの模範解答が良いのかもしれないが、悴にはまって何も残さないのはズルい気がした。

背中を見せた時点で俺は既に涙目だったが、最後の気合いで涙を引っ込め、振り返って、人生で一番の笑顔で答えた。

「ダヴィード」です!!」

同時に、用意しておいた魔法を展開させる。魔力が弾けて光り煌めく簡単な魔法。一

時的な目潰し、索敵や信号弾にも使える。それと、涙を隠すのにも使える……かも。
「どうか、どうか……、幸せに……!」

転移魔法「レスキュー」の魔力を浴びながら、俺は泣いていた。俺は、愛と慈しみを教えてくれたあの家族に対して、心臓がばくばく言うほどの激情を抱えていた。

異世界の存在とはいえ両親に会えた喜び、彼らを振り切る哀しみと後悔と勇気、何だかんだ言ってやっぱり同じダヴィード君に嫉妬して、それでも俺には帰る場所がある幸せ、成し遂げたい偉業が存在する誇り……。頭の処理が間に合わなくて残った分は、涙がぼろぼろと代わりに述べてくれた。

ニカノールの「レスキュー」によつて救護地点に迎えられた俺は、もはや放心状態で、身体にまともな力が入らなかった。

そのまま地面へ向かい、その辺に転がる小石と口付けを交わすのみになった俺を、がっしりと支えてくれた人がいた。ソイツは俺を力いっぱい抱き締める。背中がメリメリと音を立て、俺の身体は反れんばかりに押し上げられる。

「ダヴィード……、ダヴィード……。ダヴィード!!」

その名前は俺のために呼ばれ、その腕は俺を包むために力を込めた。

お前だつてダヴィードじゃんかよ、つて言いたかつたけれど、声が出せなかつた。涙

がぼろぼろ流れていて、それどころではなかったからだ。

「君は、強い！ 勇気があって、優しくして……全ての『ダヴィード』を救ってくれた……。私たちの凶星よ——」

俺しか分らないと思っていた俺の宿命を、どういふ訳かコイツも覺つたようだ。

「だから、君は正しい。誰が何と言おうと、このダヴィードⅡミロスラヴブレードが証明するよ……ダヴィード……」

そう言つて抱き締める力を強くする。その声は、少し震えていて、今にも泣き出しそうだった。なんでお前が泣くんだよ。

そんな泣き出しそうな声で、彼は問う。

「——主よ。なぜ彼だけがこうして……両親との決別を繰り返さなければならぬのですか——」

………。

意味を理解した瞬間、俺はしゃくり上げた。肺の方からひゅつと情けない音がして、俺の激情を吐き出す準備を始めていた。——でも、俺は声を上げて泣いたことがない。

………見つかつてしまうから。

敵に、保護者に、仲間。命を落とすきっかけ、俺が安定しないことへの心配……。そういうのは怖くて苦しくて嫌な気持ちになる。だから、人生から排除して生きてきた。

飄々と笑つて、劍と舌で受け流して生きてきた。

「……………うッ……………ヒッ……………」

ダヴィードは、声を嘯み殺して小刻みに震える俺の背を、それはそれは優しく撫でた。「ここは異世界。そして君の世界から来た者は君だけ。どれほど泣いても、この世界の出来事だよ——ダヴィード」

耳許で聞こえる優しくして声色は、俺の虚勢を打ち崩してしまった。父のように広く母のように深く、俺を大切に想う心が、俺の心を紐解いた。

「うう……………、うわあ……………うわあ——っ！」

なんて子どもみたいな泣き声だろう。空を見上げ、大声と共に出る号哭は、呆れるほどに悲しみと寂しさを露呈させていた。

そうだよな、なんつって俺は何回も父上や母上とさようならしているんだろな。

一回目は、お二人の死。これで二度と面と向かつて会うことはなくなつた。

二回目は、王国再興の拒絶。お二人が真に願うことを突き詰めて考えて、俺が死ぬ確率が高い上に多くの命を巻き込む戦乱を、俺は起こしたくなかつた。火種になりたくなかつた。仇も取らないと決めた。それ即ち、王国を愛していたお二人の心と決別をした、つてことだ。それに至るまでに、どれだけ俺は悩み、責められ、呵み、謗られただ

ろう。苦しい決別だった。二回目と言えども、この中には何度もなんども断ち切った想いがたくさんある。

三回目は、さっきの夢。手を取るだけで、二度と手に入るはずもない理想を叶えられたのに、俺は自分の役割を果たすために突っぱねた。悲しくないわけではなかった。

四回目は、今。夢と違って俺がああ家族の中に入ることはないけれど、自分からさようなら、つて言つて名残惜しさも見せずに去つたのは、それはもう「決別」と言つていいだろう。自分自身という人間を、他者もとい両親に依つて証明することを拒んだのだから。

俺を抱き締めるダヴィードには、俺と同じ両親がいる。父君が病に罹り久しいらしいが、それでも両親はご存命。何より、生まれてからずっと一緒だった。俺と全く異なる。そも別れが訪れないのだから、理由が無い限り「決別」などするはずがないのだろう。別れを覚悟していることは別として。

真に理解できる痛みではないと分かっているが、それでも俺の中の大きいなる悲しみを感じたからこそ、ダヴィードは俺を抱き締めてくれているんだ。何も言わずに、ずっと。

……俺は孤独だった。いや、両親が遺してくれたあれこれのおかげで、多くの人と出会ひ、別れ、生きてきた。両親からの愛も時を経て実感している。理解しあえた人もたくさんいる。だから、決してひとりぼっちではなかった。けれど、孤独ではあった。

いくら養子として迎え入れようと、養父にとつては先王の忘れ形見。いくら弟子と見做しても、おやつさんにとつては薫陶を授けた娘の忘れ形見。アンが匿つてくれたり魔法を教えてくれたり、ドウドウが守つてくれたり謎の組織が誘拐してきたり——、そういうのだつて、結局俺を見てくれていた訳じやないんだつて思つちやうことがあるんだ。

父上や母上が源流となる想いだからこそ、それが与えてくれる現状に対して「さみしい」なんて言つてはいけない、つてずつと思つていた。だから、誰かにこの寂寥を伝えたいことなんて無くて、孤独、だった。

そして、異世界の存在を知り、そこで幾人かのダヴィードたちに出会つても、俺は彼らを救う存在であつて、同列にはなれなかつた。彼らには今もなお肉親がおり、幸せに暮らしている。それでいいし、そうであつてほしい。でも、羨ましかつた。なぜ違ふのだろうと苦しくなつた。同じ両親を持ち、同じ名前を持つのに——。

——けれど、今さつきダヴィードが言つてくれた言葉のおかげで、俺の孤独は照らされ、満たされた。呆気ないほど簡単に。飢えていたからこそ単純に。けれど、そんなことを言ってくれる・言えるのは、やはりダヴィードしかいないから、俺にとつては得難い存在だ。誰にでもできることではない。いつでもどこでもできる訳でもない。本来、世界は一つしか存在し得ないのだから。

だから、教える。俺の知りうる答えを。主に聞いたとて返事を受け取ることはできないだろうから。

『ダヴィード』だから——」

鼻声のせいでうまく発音できない。鼻を嚙り、短く呼吸して、伝えた。

「お前たちの幸せを、守りたいから……」

「——ッ」

俺の役割と想いを伝えると、ダヴィードは更にさらに俺を抱き締める腕に力を込めた。込められる力に、彼の想いの強さを感じる。想いの強さは力に比例し、俺の背骨は悲鳴を上げ始める。

「あ、あのさ……」

「なんだい?」

ダヴィードはあくまで優しく訊いてくる。何でも言っつてごらん、といった優しさが大いに含まれる語調だった。

「そろそろ痛い……かも……」

大変言いにくいのが、これ以上は常に胸張りをせざるを得ない体型になってしまいそうだった。

「……すまないね」

申し訳なさと恥ずかしさを苦笑の中に入れ、ダヴィードは腕の力を弱めた。俺は何だか面白くなってしまって、涙まみれの顔で笑ってしまった。

「くくっ」

「……あはは」

ダヴィードも、少し涙を浮かべた目をして小さく笑った。

ありがとう、ダヴィード。俺はお前を救ったかもしれないが、お前の方がよっぽど、俺を救ってくれるんだぜ。

「ハハハ！」

「あはは！」

……ありがとう。